699-36
1200501581814

430

短篇集

來往問人

野浩二著

黎明社

帝國圖書館藏・昭和一三・六・
納本

699-36

目次

歴　問……一
人間往來……二九
一と踊……一五五
海戰奇譚……一八五
夏の夜語……二二三
枯野の夢……二四五
鼻提灯……三四三
日曜日……三七三
八木彌次郎の死……三八五
四人ぐらし……四二三
終の栖……四六七
夢の跡……四八九
跋……五一九

人間往來

裝幀

鍋井克之

歴

問

人間出來

大阪に著いたのは午後四時半頃だつたが、戎橋の北詰の餘り目立たない宿屋を選び、そこで夕飯をすまして散歩に出ると、十月下旬だつたから、町にはもう明がついてゐた。ちやうど誓文拂の日だつたので、道頓堀の通はそれ程でもなかつたが、目抜の商店街でありながら、町幅の狹い戎橋筋は、人波を打つてゐて、歩くのに困難な程だつたから、彼は知人に會ふ恐れがあるとは思ひながら、道頓堀の人込の中を、古本屋の店頭だけはちよいちよい覗いて見たが、後は、別に急用もないのに、縫ふやうに急ぎ足で歩いた。と、突然、人込の中から

「こらアー　鮒ツ！」とあたりの人々が（彼もその一人だが）その聲の方に一齊に見向いた程の大聲で叫んだ者があつた。『鮒』といふのは彼の中學時代の綽名だつたので、その聲の方を見ると、人込の中から現はれたのは、彼の中學の同窓の、草鹿といふ、二十二貫もある大きな體の持主で、

「……不屈な奴ちや！　大阪に來てながら、俺ンとこに知らさんといふ事があるか！」草鹿は前と同じほどの大聲で叫んだ。大聲は彼の持前であつたが、さういふ人込の中とか、人の家を訪問

するとき門口から呼ぶ時とかは、その持前以上の大聲を出すのが彼の癖であつた。癖といふより、一種の變態的な氣取であつた。

最初、牧は、吃驚して、といふより、呆氣に取られて、立竦んだが、直ぐ、この相手の癖を思ひ出したので、

「……だつて、今日の夕方、四時二十分の汽車で著いたんだよ。……」

「はッ、はッ、はッ、」と、これも變態的の氣取から來る豪傑笑をしてから、「燕か。えらいええ勢やなア。何ぞ急用で來たんか？」

その時、といつても、草鹿に見つかつてから一分と立たなかつたが、牧は自分たちが所謂衆人環視の中に立つてゐる事に氣がついたので、

「何處かその邊のカツフエーにでも入らうか、」と誘ふと、

「カフエー？　阿呆なこと云ふな。……ちよつと此處で待つててんか、逃げたらあかんぞ！」と草鹿は云ひ殘して、直ぐ傍の芝居茶屋の中につかつかと入つて行つた。

「今晩は。ちよつと電話貸してんか。」といふ聲が表まで聞えた。尤も、電話口も入口の近くにあつたらしい。

「もしもし、片田はんでッか、先生ゐやはりまッか？……ぼく……牧……マ、キ、……東京の牧さんの代理だす。……」

表で聞いてゐた牧はますます困つたことになつたと思つた。草鹿が彼自身の名を云はないで、彼の名を使つた意味はほぼ分つたが、この際彼は一人でも餘計に舊友に會ひたくなかつた。——

牧の今度の旅は、東京と東京での煩瑣な生活から離れたい、それには人情風俗その他のすつかり違ふ大阪がいい、併し舊知舊友の多い大阪であるから彼等とも成るべく會ふ事を避けねばならぬ、といふ一人極の考へを持つて出た旅であつた。——

彼は當時不思議な煩悶に人知れず惱んでゐた。——彼は、孔子の所謂『四十而不惑』の年を既に三四年前に過ぎ、今はその『不惑』に近い心境に達してゐるやうに見えたが、この頃ときどき、朝から晩まで、否、目が覺めてゐる間、殆ど讀むか書くか、一人では殆ど散歩する氣にもならず、用を足しに行くほか自分の書齋を出たことがない、その上、生來、一切の酒類を嗜まず、一切の勝負事を好まず、煙草も今は嗜まず、女性に對する興味も次第に薄くなり、一人子に對しても世の父たちが持つやうな愛情がどういふ譯か湧いて來ない。さうして朝から晩まで目を覺ましてゐ

る間は殆ど机の前に坐り詰め、錢湯に行くほかは十日ぐらゐ町を見ないことが珍しくない。――さういふ生活を彼の死んだ友人は『作即ち生活、生活即作』と云つてゐた。が、その友人には酒といふ道樂があつた。作即ち生活、さうして絶對に道樂のない生活――然し、かういふ生活は生きた人間の生活であらうか？　といつて、かういふ生活が生きた人間の生活でないと悟つても、生れ變らない限り、自分ではどう仕樣もない。――これが彼が人知れず惱んでゐる煩悶或ひは惑ひであつた。

牧の思惑などに全く無頓着な草鹿は、向ふの電話口に片田が出たらしく、忽ち言葉の調子を變へて、

「……おいおい、ぐづぐづ云ふと承知せんぞ！……なに？　そんなら、此方から直ぐ自動車で迎ひに行つたるさかい、なに？　よオし、そんなら、俺たちの代りに、藝者を二三人、使者に立てたろか？……どや、どや？……あツはツはツは、は、は……」

これを表で聞いた牧は、幸まだ宿屋の所も名も明かしてないし、この雜踏の中だし、餘程その人込の中に姿を晦して、橋一つ向ふのあの宿屋に歸つて、久振りで孤獨を樂しみながら眠らうかと考へたが、言葉遣が亂暴なやうに物の考へ方その他は粗雜ではあるが其の反面に神經質な所

と氣の弱い所のある草鹿を落膽させることが氣の毒になつて來たので、折角の考へを止めることにした。が、その爲めに、彼は、彼の文學的才能ぐらゐでは、思ひも考へも附かぬ經驗と知識を得ることになつた。

その晩、牧が草鹿に案内された茶屋は十年程前に矢張り草鹿に連れて行かれた事のある家であつた。牧も草鹿も十年の間に十年分の年を取つたが、十年前に同じ茶屋で彼等が會つた三四人の藝妓は十年前と殆ど同じやうな顏と恰好をしてゐるやうに牧には見えた。その藝妓たちの中に草鹿と特別の關係のある女があつて、十年程まへ牧が音曲と三絃に興味を持つてゐた頃、牧はその女を相手に交る交る音曲と三絃を歌ひ且つ彈き合つた事があつた。その時から二年程後牧はその女が草鹿の子を生んだ事を別の友人から聞いた。それから又二年程後草鹿が東京に來たとき牧が何食はぬ顏をして、「君のあのひとの子はもう五歳ぐらゐになるだらう？」と云ふと、草鹿が眞赤になつて「こいつ、……誰に聞いた？」と可なり狼狽した聲で叫んだ事があつた。その女の顏も十年前と餘り變つてゐないやうに牧には見えた。が、彼は男女に拘らず餘り人の顏に注意しない方であつたから、彼のこの見方は當にならなかつた。その證據に、彼はその女と暫く話をしてゐ

るうちに「あ、この女だな、」と氣が附いた位であるから。それに、その女も何故か十年前に彼と歌ひ且つ彈き合つた事を丸で忘れたやうに話さなかつた。併し、それは當然であらう、男は十年の間に容貌が變つても心持はその割に年を取らないが、女は同じ十年の間に容貌が變らぬやうに見えて心持は十年以上年を取るものらしいから。さうだ、草鹿との間に出來た子が最早學校に通ふ頃であらう。否、もう尋常二三年になるであらうか。——

牧は、先程人込に紛れて姿を晦さなかつた事を後悔し始めた。草鹿は大酒である上に大食だつた。俗に『大食腹に滿つれば學問腹に入らず』といふ諺がある。大酒もその通りであらう。先程街頭で牧に大聲をかけて驚かした時の草鹿は、——大きな盆のやうな眞圓な大きな顏、下つた眉毛、下つた目尻、その眉毛と眉毛の間が廣く、眉毛と目の間も廣く、共に形は尋常であるが顏全體と釣合の取れない小形の鼻と口、それ等を組合せて造られてゐるところの草鹿の顏は、その二十二貫の大兵肥滿の體と共に、——愛嬌があつて毒氣がないので、牧はついそれに引かれて草鹿の誘ひに應じたのであるが、草鹿が珍しく銘酊してしまつたので始末に困つた。銘酊してゐる草鹿がふと漏したところに依ると、彼は牧に會ふ前に河豚を食ひに行つて河豚の鰭酒を飲んだとい

ふことであつた。それを聞くと、彼の思者の女が、

「そらいかん！　今晩だけ、牧先生に證人になつてもろて、此處で泊りなはつたら……」と云つた。

と、草鹿は突然目が覺めたやうに目を見張つて、

「いかん、いかん！これから、牧を連れて家イ歸るんや。なア、牧、一ぺん俺の家を見てくれ。」

「いや、僕は……」

「いかん、いかん！　おい、直ぐ車を呼べ！」と叫びながら草鹿は立上らうとしたが、どさツと大きな音を立てて尻餅を搗いた。それを見ると、座にゐた一同は思はず「あツ！」と驚きの聲を擧げたが、銘酊者は、何にも云はずに其の場で仰向きに大の字になつて、鼾聲も立てないですやすやと眠つてしまつた。

「困つたなア。」牧は溜息をつきながら片田の方を見て、「君、ここから蘆屋まで自動車でどの位かかる？」

「さあ、六里ぐらゐあるやろけど、阪神國道に出たら早いからな、一時間ぐらゐで行けるやろ。」

「といつて、一時間で行けるにしろ、向ふに着いたら一時半頃になるだらう。それに、こんな醉

拂と一緒に乘つても、蘆屋まで行くは行つても、蘆屋の何處か分らないからな。」

「大抵、毎日、一時頃に歸りはりますよつてに、時間は心配おまへんけど、何しよ、こない醉うてはりますよつてなア。河豚の鰭酒飲みはりますと、何時でもちよつとは醉ひはりまつけど、こない醉ひはりましたん初めてだす、」と傍から草鹿の女が云つた。

「今まで一度も泊つたことないの？」

聞いてから牧は餘計な事を聞いたと後悔した。

「ええ、一ぺんも……」と彼女は、受けたが、それ切り口を噤んでしまつた。

『お車が參りました、」といふ聲を聞くと、眠つてゐた筈の銘酊者は、むつくりと起上り、一瞬間ちよつと不思議さうにあたりを見廻したが、その目が牧を見つけると、

「さあ、行かう、牧！」と云ひながら、「どつこいしよ！」といふ掛聲と殆ど同時に立上つた。片

その様子がわりに確して見えたのと、初めての宿屋に歸るには少し時間が遲過ぎたので、牧は、草鹿の家に行くことに極め、彼の「どつこいしよ！」といふ掛聲と殆ど同時に立上つた。片田も牧と殆ど一緒に立上つた。片田は、途中で車を拾ふと云ひ、茶屋の入口で草鹿と牧の乘つた自動車が動き出すのを見送り、二三歩あるき出すと、ちやうど流の自動車が自分の前に止つたの

で、それに乘つた。彼は、乘つてから舊式のボロ自動車に乘つたのを甚く後悔した、この春十八歳になる一人子が急死して以來一層ヒステリイのひどくなつた細君の顏を思ひ出して。——

確して見えたのは乘りしなだけで、自動車が走り出して暫くすると、初のうちは車窓から見える沿道の橋の名とかダンスホオルの名とかを牧に教へてゐた草鹿は、次第に云ふ言葉がしどろもどろになり、終には牧が物を聞いても返事をしなくなり、いつの間にか腕組をしたまま眠つてしまひ、幾ら牧が物を云ひかけても返事をしなくなり、稀に返事をしたかと思ふと、「こんな事は滅多にないこつちや、……今日は本眞に醉うたわい、……河豚、……河豚、……、鰭酒……うーむ、うーむ、……」などといふ言葉を途切れ途切に云ふだけになり、仕舞には全く物を云はなくなつてしまつた。

全く物を云はなくなつてしまふと、却つて度胸が出來てきて、牧は神戸まで行つてもいいと覺悟を極めた。併し、目は絶えず右側の六甲山脈を眺めつづけた。晴れた秋の夜更のことであるから、歩いてゐたら、ずゐぶん素晴しい星空を樂しむ事が出來る筈であるが、現に六甲山脈の上にはカシオペイア、ペルセウス邊を流れてゐる銀河が見えてゐるが、砥のやうな阪神國道を矢のやうに走りつづけてゐる自動車の窓からは、空よりも眞黑な山脈の方が主に見えるので、一旦度胸

は極めたものの、ときどき何とも云へぬ心細さに胸を締めつけられるやうな氣がした。かういふ場合でなくても、夜の山といふものは、餘り近くから眺めると、朝や晝の山とは同じ山と思へない程、凄く見える事がしばしばある。今、牧が自動車の窓から見る六甲山脈は凄く見えた。――

やがて、その眞黑な塀のやうに見える山脈の遙か向ふの方に、山の中腹から麓にかけて、幅の廣い瀑布のやうな形が、そこだけが、金砂を撒散したやうに、ちらちら光るのが見えた。それを見ると、牧は直ぐあれが蘆屋らしいなと思つたが、運轉手にそんな事を聞くのは業腹でもあり極り惡くもあつたので、彼は、車窓からそのちらちら光る金砂の瀑布が、次第に近づくのを見詰めた。金砂の瀑布はますます近づいて來た。その金砂瀑布が人家の明であることが次第に分つて來た。明の絆は目睫に迫つて來た。彼はもう堪らなくなつた。

「おいおい、蘆屋に來たらしいよ。」牧は草鹿を搖すりながら云つた。

「うむ？　蘆屋？」草鹿はまだ眠さうな薄目を明いて窓外をちらと見た。と、直ぐ「おい、この次ぎの橋を渡つて、右へ曲つてくれ！」

「大丈夫か？」

「大丈夫よ。」やつぱり薄目を明いて云つた。

車が橋を渡つて右へ行くと、

「おツと、ここを左イ曲つて、煙草屋の角を右へ曲つてくれ。」

牧はやつと安心した。

「ずゐぶん上の方だね？」

「うむ、一ばん天邊や。……前は海岸の傍やつたんやが、金が入ることがあつて賣つてん、……併し、今度の家の方がずつと場所がええ。明日の朝、見せたるわ。おツと、そこ左……よオし、ストツプ！」

牧は、草鹿のやうな男でも、而も珍しく銘酊したらしいのに、自分の家の近くに來ると、氣が確になつて來る、といふ事實に驚かされた。道頓堀で會つた草鹿、その前に海豚の鰭酒を飲んだ草鹿、(この時の草鹿は牧は自分の目でなかつたが、見なくても略想像がつく)茶屋の草鹿、自動車の中の草鹿、最後に、牧を最も驚かしたところの自分の家に歸つてからの草鹿、――そんな風に見て來ると、『草鹿のやうな男』といふ輕輕した呼び方は決して出來ない、出來ないどころか、牧自身が假に草鹿になつたとして考へて見ると、牧自身は、草鹿のやうに、カメレオンのやうに、變れない事を考へて見ると、この男は一見粗雜なやうに見えてさうでない所があらしい、と考へ

て、ちよいと豪い奴かな、と一應は感心して見たが、待て待て、と彼は考へ直した。この男は、神經質な所を少しは持つてゐるが、大體に於いて太い神經の持主である、それに女のやうに良心を持つてゐないところがある、何故なら、一時間前の茶屋場から、一時間後の家庭へ、と場面は變つても、少しも顏附は變らない、例へば嘗て藝妓であつた細君に一時間前の茶屋場を絶對に想像させないところ、――これは男なら出來ない藝だ、と牧は考へた。

併し、その日の朝東京を立つた牧は、疲れ切つてゐたので、草鹿の細君に一別後の挨拶を簡單に述べると、それから五分後に宛行はれた部屋で前後正當もなく寢てしまつた。が、寢床へ入つてから寢るまでの一分間程のあひだに、「かういふ生活こそ本當の生活でない、いや、いやかういふ生活が人間らしいと云ふのかな、いや、いや……」と考へた。――

翌朝は、生憎、深い霧がこめてゐたので、草鹿が自慢してゐた展望は駄目になつた。最も展望にいいといふ二階の十疊の部屋には、可なり大きな望遠鏡が置いてあつたが、その望遠鏡で淡路島や神戸や御影や大阪灣やを眺望する代りに、目の下の他人の家の座敷に向つて、草鹿はレンズ

を合して、

「どうや、壁に打つたアる釘まで見えるやろ、筆立の筆やペンが勘定でけるやろ……」そこで望遠鏡を廻して、

「あの家が面白いね。今日は月曜やからあかんけど、水曜日の朝、あの部屋で講習會みたいなもんがあるね。大阪からずゐぶん別嬪が來よるさかい、その時は望遠鏡をこの邊に置いて……」

「幾ら置き變へても肝腎の代物がゐなければ仕樣がないぢやないか?」と云ひながら、牧は部屋の眞中の卓子の傍に行つて一服した。その時、ふと壁に、見覺えのあるやうな、油繪とも日本畫とも附かぬ繪が、立派な額緣に入れて掛けられてあるのが目に着いた。見覺えがある筈であつた。

「草鹿!」と牧は呼びかけた。「あの繪は片田薫か?」

「いや!」草鹿は彼が得意の時か上機嫌の時かに見せる靨を兩頰に浮べて、「あれは俺ンとこの娘が描きよつてん。」

「片田薫そつくりだね。」

「當前や、片田に習てよるんや。一週間に一ぺんづつ俺の家に來よつて、この邊のええ家の子供に教へよるね……彼奴うまいで。その教へてる子供の親に自分の繪ェ賣りよんね。……そんな子

供の親に賣りよるぐらゐは知れたもんやけど、お前、大阪の絲源知つてるやろ？」

「知らん。」

「絲源いうたら、大阪で一二の大けな糸の問屋や。その絲源の親父が片田薫のパトロンや。その代り、月に一ぺん、糸源から暖簾を分けてもろた昔の番頭が、三十人位もあるやろ、それが糸源の家に集つて御馳走になりよんね。俺は行たことないけど、何でも糸源の親父が床の間の前にてんと坐りよつてナ、その左右に暖簾を分けてもろた昔の番頭がずらりと竝んで御馳走を呼ばれよんね。その中に、毎月、きつと片田薫が來てよるさうや。その代り、糸源には片田薫の繪ェが隨分あるさうや。千圓ぐらゐの繪ェでも買ひよるさうや。……」

「併し、」牧は糸源の話に興味がなくなつたので、草鹿の話を中途で切るつもりで、「昨夜の片田はひどく憂欝だつたね。この夏、個人展覽會で彼が東京に來た時、彼の話に、――何でも彼の親父が瀕死の病床に就いてゐた時、死ぬ前に孫の顔が見たいと云つたので、彼の子を親父の枕共に呼んでやると、その子が彼の父の手を取つて回復を祈つた。……ところが、その翌朝いつもの時間にその子が起きて來ないので、片田の細君が見に行くと、死んでゐた、……そしてその代り、彼の親父はその翌日から日増に健康を回復した、――といふ話を聞いたが……そんな話をしてから

片田は、親の自分が云ふのもをかしいが、珍しい秀才だつた、それに文學が非常に好きで非常にむつかしい本を讀んでたといふやうな話をして泣いてゐたよ。……あの事がまだ頭の中に殘つてゐるんぢやないかね！」と云ふと、

「阿呆いへ！片田が塞いでよつたのは、お前、知らんか、彼奴の細君がえらい燒餅燒やからや…。」

「お前の細君もさうらしいぢやないか。假にさうでないとしても、お前のやうな奴が、家に歸ると、すつかり人間が變つてしまふところを見ると、さうとしか取れないよ。」

「阿呆いへ！」草鹿は急に低い聲になつて、「俺はな、嬶でも、外の奴でも、みな滿足を與へてやる依つてに圓滿にいくんや。……」牧が呆氣に取られてゐる間に草鹿は遠慮なくつづけた、「もう一つ教へたろか、外の女子のことは、どんな事があつても嬶に知らしたらあかんで、……」

「お前、なかなかえらい事を云ふね。」牧は、この言葉通りちよつと草鹿の言葉に感心したが、直ぐ何か反撥する心を感じた。

草鹿は自分の云ひたいだけの事を云つてしまふと、急に思ひ出したやうに、

「おい、お前、さつき、片田の子オが死んだ話をしたなア。あれは、お前、自殺しよつたんや……」

「どうして？」

「どうしてもかうしてもあれへんが、彼奴、『赤』やつたんや。」

如何に單純な粗雜な性質とはいへ、人間の子が死んだ話を、丸で犬か猫の子が死んだやうな言方をする草鹿に、牧は好感が持てなかつた。

「ぼつぼつ出かけようか？」と牧が云ふと、

「さうや、まだお前に見せるのを忘れてゐたが、」と草鹿は云つて、彼の家の構造、造、電氣の裝置、その他を、一々牧をその場に連れて行つて説明した。

「お前にしては、なかなか細かい所に注意が拂つてあるね、」と牧が云ふと、

「俺やあれへん。俺の友達の河田といふ奴のみんな設計や、」と云つてから、草鹿はその河田といふ友達が如何にえらいかといふ話をし出した。

草鹿は、高等工業學校が淺草の藏前にあつた頃の建築科の出身で、現に大阪の野島ビルに草鹿建設社といふ看板を掲げ、十人近い人間を使つてゐる社長だつたから、毎日自宅から社に通つてゐるのであるが、肝腎の專門である筈の設計が得意でない、といふより出來ないので、名は嚴しいが、實は建築材料を扱ふ商賣をしてゐるのであつた。が、さういふ商賣の才能や人を使ふ才能を彼は餘り惠まれてゐないらしかつた。

それで牧が思ひ出すのは、中學の頃、草鹿が一年から五年まで毎年及第と落第の境の成績であつたが一度も落第した事がなかつたので、所謂口性ない連中は草鹿のやうな進級の仕方は優等の成績で進級するより難しいだらうと云ひ合つた。いづれにしても、兎に角、草鹿が五年間に一度も落第しなかつたのは奇蹟だといふのが定評であつた。中でも、草鹿自身が不得手を承知してゐた英語が如何に出來なかつたかの最も適切な例を二つ紹介すると、彼は中學を卒業してからも、恐らく今も、英和辭書の引方を知らないことがその一つ、或る時、英語の教師が彼に"one"といふ英語を書いて見せて何と讀むかと聞くと、彼は暫く考へてから「オネ」と答へたのがその二つである。—

草鹿の自慢の蘆屋第一の高臺の家を出發して驛まで歩く道で、牧が中學の頃の話を持出して、例の一年から五年まで何時の年でも及第と落第の境を通つて、眞に千番に一番の兼合の離技で、及第した事は「誰も奇蹟だと云つたよ、」と云ふと、

「あツ、はツ、はツ、は、は、は、」草鹿一流の笑ひ方をしてから、「あれは叔母の家から校長や教師のとこィ賄賂を持つて行きよつたんやが。……それに、年に二度、春と秋に、校長や教師を別々に叔母の家に招待しよつたからやが。……」

牧は、文字通り、明いた口が塞がらなかつた、「さうかな……」と云つたまま。

草鹿の叔母の家といふのは大阪で一二の藝妓屋兼茶屋であつた。

しばらく歩いてから、草鹿が、

「途中でお茶でも飲んで行こか、」と云つた。

「うむ。」

驛まで行く間に喫茶店らしいものはなかつた。そのうちに驛に著いたので、何處で茶を飲むつもりだらうと牧は不審に思つた。驛に着くと草鹿は牧の切符を買つた。彼はパスを持つてゐた。

牧は、いよいよ不審に思つたが、不案内の土地のことであるから、だまつて草鹿と行動を共にすることにした。猶、牧が不審に思つたことは「途中でお茶でも飲んで行こか、」と云つてから、珍しく草鹿が口數が少なくなつたことである。殊に電車に乘つてからは殆ど口をきかなかつた。尤も、牧も考へ事をしてゐたので、電車に乘つてから間もなく、

「おい、此處や！」と草鹿から聲をかけられて、慌てて下りたくらゐである。夙川といふ驛だつた。

驛を下りてからも草鹿はやはり口數が少なかつた。

「蘆屋を社長重役級の町とすると、此處は中流のサラリイマンの町や、」と草鹿は牧に説明した。

それ切り、二人は殆ど無言で歩いた。

歩きながら、牧はまだ草鹿が「途中でお茶でも飲んで行こか、」と云つた言葉にこだはつてゐた。が、この小さな町は、蘆屋などと違つて、同じやうな生垣のある、同じやうな小ぢんまりした家が竝んでゐる、中流のサラリイマンの住宅地で、「お茶を飲む」所などなささうであつたから、牧は、「お茶を飲むこと」はあきらめて、無言で草鹿と行動を共にすることにした。併し、その單調な町を何の目的もなく歩くことは退屈で仕方がなかつた。が、相變らず無言で幾らか急ぎ足に歩いてゐる草鹿は何か目的があるらしく牧には思へた。果して殆ど町外れに近い所まで來た時、

「ここ、左、」と草鹿は沈默を破つて、横町に曲つた。その横町は、今まで來た單調なほど規則正しい町の裏に入ると、こんな狹細しい曲りくねつた路地があるかと思はれるやうな所であつた。二人ならんで歩けない路地であつた。その路地の奥の、その家に出入する人のほか通らない道の、突當の家の前に草鹿は立止つた。奥井建太郎と、下手な字で書かれた、貧弱な表札が、格子戸の嵌つてゐる入口の敷居の上に、無造作に掛けられてあつた。

「おい、おい！」

草鹿は自分の家の者を呼ぶやうな聲で叫んだ。併し、それは、彼が往來で、昨日牧を呼んだ時

に使つた呼聲から思ふと、ずつと低かつた。

やがて玄關の障子が明いて女中が顔を出すと、

「留守か？」

「いえ、ちよつとぼんぼんと御一緒に……」

「直き歸るやろ？」といふ言葉と一緒に草鹿は牧の方を振向いて、「おい、上ろ！」

階下の間には、部屋の眞中に大きな辻臺が置いてあるのが目立つだけで、道具らしい道具が置かれてないのが牧の注意を引いた。

「二階へ上ろ！」

階段を上つたところの部屋は、日本間であつたが西洋間風に飾られてあつた。六疊の部屋で、眞中に小形の卓子が据ゑてあつた。それを挾んで牧と草鹿は差向に腰掛けた。そこへ階下から上つて來た女中に、

「おい、紅茶を入れて來い！」と草鹿は云ひ附けた。

その時、牧は初めて「お茶でも飲んで行こか」はこれであつたのかと思ひ當つた。ちよつとの間、直ぐに適當な言葉が見つからなかつたので、

「靜かな所だね、」と、云ひながら、窓の外の風景をお愛想にちよつと見てから、牧は主人公の氣を惡くしない程度で室内を見廻した。小形の卓子、椅子、本箱、その他、額、置物等は悉く女の好みらしいが、みな何處か野暮くさい感じがあつた。子供のある家で、女主人らしいが、所謂黑人風な好みは、この家に入つた時から階下の部屋を通つてこの部屋に落着くまでの間に牧の目に觸れたものの中に、一つもなかつた。

「おおい、紅茶まだかア？」

突然、草鹿が階下の方に向つて叫んだ。

牧はその日初めて昨夜道頓堀で自分に浴びせられたのと同じ大きさの聲を聞いた。

その時、三歳ぐらゐの子供を抱いた二十四五の女が靜かに階段に現れた。位置の關係で、牧が先きにその女の姿を見出したので、彼は、

「やあ……」と云つて立上つた。

牧の顏附がちよつと變つて立上つたのを見た草鹿は、ちよつと赤くなつて、その赤い顏を牧に見られない先きに振向いて、

「牧さんや、東京の……」と女を牧に紹介した。さうして直ぐ女の方に向つて、

「建一郎は？」と聞いた。

「今ぢきまゐります。極り悪がつてまんね。……」

この二人の會話を聞かない先きに、牧は總ての事を推察することが出來た。彼は、この女を見た瞬間、咄嗟に、この女性が、この家の主人である事を、嘗て誰かから草鹿が自分の使つてゐる女事務員か他の所に勤めてゐる女事務員かと特別の關係が出來てその間に子まであると聞いたことがあつたことを思ひ出した。

牧は、また、今草鹿がその婦人に「建一郎は？」と聞いたのは、今し方この家に入る時に見た表札の名の奥井建一郎に違ひないと悟つた。さうして、第一夫人の子が三人とも女の子で、假にあの茶屋の女を第二夫人と見ると、第一夫人の子も、第二夫人の子も女の子である中に、この女事務員夫人を第三夫人と見立てると、この第三夫人の子が二人とも男の子であることを草鹿が喜んで、彼が專門とする建築の『建』の字に、一部の日本人が長男に附ける習慣になつてゐる『一郎』といふ字を添へて、『建一郎』と名附けた心根を察することも出來た。

今、その建一郎が階段口に現れた。草鹿がこの建一郎とその弟とを見る時の顏は、彼が最も機嫌のよい時の表情——四箇の下つた眉毛と目を一層下げると共に、惠比須大黑を思はせる彼の豐

頰の兩方に見事な靨を刻む——をした。當時五歲になる建一郎も、三歲になるその弟も、その顏立が父の草鹿の顏立と餘り似過ぎてゐるのに牧は驚いた。牧は、草鹿がその二人の子を愛する、といふより寧ろ溺愛する、形を、それが草鹿だけに、興味を以て見た。牧は、草鹿が酒を溺愛する形をしばしば見た、昨夜のなどはほんの一例である。併し彼が子を溺愛する形を見たのはこの時が初めであつた。ところで、草鹿は酒や子を溺愛するやうに、女を溺愛するであらうか、それは牧にも分らなかつた。

この、夙川の女は、牧が今度會つた草鹿の女たちの中で、比較的にではあるが、一番或る純粹さを持つてゐるやうに感じた。それは彼女が初對面の牧に東京に住みたいと訴へるやうに云つたからではない、それを傍で聞いてゐた草鹿が「いかん、いかん、」と向になつて止めたからではない、では何故三人の女の中でこの夙川の女が一番或る純粹さを持つてゐるやうに感じたか、その理由は感じた牧にも直ぐには云へないやうなものであつた。

何れにしても、夙川の驛から彼女の家に行く時の道と、彼女の家から夙川の驛に歸る時の道とでは、彼等の氣持が非常に變つたことは事實である。二人とも餘り口數をきかなかつた事では行

きの道も歸りの道も餘り變りはしなかつた。併し、氣持は、別別にではあるが、可なり變つた。

「俺は、な、牧、」突然、草鹿が道を歩きながら云つた、「あの女だけは、一生面倒を見てやろと思うてんね、あの女は本眞の處女やつたさかい……」

牧は頷いただけで返事はしなかつた。牧は、草鹿が今いつた事實は事實であらうと信じたが、草鹿の言葉を鵜呑で肯定した譯ではなかつた。唯、この草鹿の言葉の中には草鹿流の單純の良さはあつた。併し、夜は茶屋の女の許に通ひ、夜更から朝までは必ず自分の家に歸つて細君を滿足させ、午前には、出勤前に、夙川の女の家に寄る、――これだけの事を毎日極つて判を捺すやうにしなければならない生活は、仕舞には重荷になりはしないだらうか、と考へるのは牧が考へることで、草鹿には、一日も酒なしには居れないやうに、これ等の事も彼になくてはならぬ營なみなのであらうか、……併し、自分なら、こんな生活は、氣持からいつても、肉體からいつても、遣切れないなア、と牧は考へて、自分の事ではないのに、道を歩きながら、激しく頭を振つた。

「何してんね、氣違みたいに？」と草鹿が吃驚したやうに云つたので、牧ははッとして止めた。

「お前、『アラスカ』知らんやろ、朝日ビルの十階にある？……彼處の料理は旨いぞ、大阪にゐる間に一ぺん行つて見い、見晴しもええ所やさかい。」

「お前ン所よりいいか？」と云つてから、牧は何と返事するかと思ふと、

「それやア比較にならんわい、」と草鹿は言下に云つた。

やがて夙川驛に着いた。

成程、『アラスカ』の眺望は素晴しい。

牧が行つたのは、草鹿の家で泊つてから二日後の午後二時頃であつた。あの水族館の入物の中に入れられたやうな氣のする、而も三方豪華なガラス張になつてゐる見晴は、牧に思はず心の中で快哉を叫ばせたほど、素晴しいものであつた。

それは、目の下に見える、大大阪の心臓と云はれてゐる、大川と、大橋と、大建築とが、丸で箱庭のやうに見えたほど大きな素晴しい眺望であつた。

彼は成るべく眺望するに都合のいい席を選んだ。食事時を過ぎた頃だつたので、彼の坐つてゐる卓子の傍の卓子は二つ三つ明いてゐたので、彼は、首を、目を、ゆつくり、三方に廻した。そ

れから、料理の來るのを待つ間に、三方の雄大な眺望を貪るやうに眺め廻した、幾度も、幾度も繰返し、繰返し。

彼は、四歳の年から二十歳の年まで大阪に住み、小學校も中學校も大阪で濟ました。尤も、その頃の大阪と今の大阪は、裏町は殆ど變つてゐないが、交通機關はその頃と今とでは比較にならないほど發達した。交通機關の事はここで用はないが、六年振りで大阪に來た彼には、この朝日ビルの十階は、大袈裟に云ふと、驚異であつた、殊にそこからの眺望は。

「目の下に見える、大川と、大橋と、大建築とが、否、大阪全體が丸で箱庭のやうに見える程、大きな素晴しい眺望、」といふのは、大阪の三方を山々が圍んでゐるやうに見えたからである。

それを稍委しく述べると、西の方から、最も近く見えるのは六甲、六甲の右に遙かに見える大きな山は攝津と丹波の境の三國岳、三國岳の左に竝んで見える山、——多分兵庫縣と大阪府と京都府に跨つてゐる、——その山脈の中で一番高いのが、深山。それからずつと手前に、群島のやうに、ところどころ跡切れてゐて、繋がつてゐるのが、老ノ坂山脈であらう。龍王山が見える。龍王山の右にポンポン山が見える。ポンポン山と老ノ坂山脈との間に、遙かに愛宕山が見える。それから右の方、遙か向ふに多分尾張と伊勢と近江の國境になつてゐる、鈴鹿山脈が見える。その日は珍しい秋晴の日だつたので、御在所山らしい山から、鈴鹿峠あたりまで望まれた。それから、東の方は……

その時、

「牧君ぢやない？」といふ聲が彼の耳の傍で聞えた。振向いて見た一瞬間、彼を呼びかけた白髪の、色の黑い、小柄な人が誰であるか、牧にはちよつと見當が附かなかつた。

「分らないだらう、古谷だよ。」

「……」牧は暫く口がきけなかつた。暫くしてから「今來たの？」と聞いてみた。

「うん。」

「ぢやア、此方へ來ない？」

「何年振だらう？」

「……十年以上になるね。」

牧と古谷は一つ違ひで、牧は四十三、古谷が四十二であるが、牧は禿頭に近くなり、古谷はすつかり白髪になつてゐたので、若し彼等が卓子を挾んで話合つてゐるところを知らぬ人が見て、彼等の年を推量するとしたら、彼等は五十歳以上或ひは六十歳近くに見られたであらう。

彼等が最も親しく附合つたのは二十二三年前から十八九年前の頃である。その頃、彼等は、結局兩方とも得なかつたが、一人の女性を密かに戀し合つた事もあつた。併し、牧に、また古谷にも、かうして十年振ほどで顔を合した時、最も懐しく思出されるのは、文字通り、艱難貧苦を共にし合つた時の事であつた。——

牧が二十七歳、古谷が二十六歳の頃であつた。その頃、牧は、戀に身を窶した果に、下宿屋まで不拂の爲めに追出され、文字どほり、宿無になつてゐた。古谷は、その頃の、牧の唯一の友達であつた。尤も、古谷の外に、その頃の友達で牧に宿を貸してくれる者が一人あつたが、その友達は津田沼にゐたので東京から行くのに五十錢の汽車賃が入つた。併し、牧は、宿無の身になつてからは、仕方がないので、五十錢の金のある時は津田沼へ行き、津田沼に飽きると、東京に歸つて來た。東京に歸つて來ると、當時本郷にゐた古谷の下宿に居候をしに行つた。

ところが、古谷も、既に下宿料を半年も滯らしてゐたので、いつ何時立退を命ぜられる運命になるか知れなかつたので、牧が彼の下宿に居候するには非常な遠慮をしなければならなかつた。例へば、朝寢坊の古谷の朝食を牧が食ひ、夕飯の時は、客膳三十錢よりおでん茶飯十五錢の方が得

だといふので、何方かが下宿の定食を食ひ何方かがおでん屋に食ひに行くといふ風にした。

牧は、戀愛事件の跡始末が附いてゐなかつたのと、宿無になつたのとで、何も手に附かなかつたが、古谷は、大學は牧同樣中途で止めたが、英語と獨逸語に通じてゐたので、一つは毎日の退屈凌ぎ、他の一つは（この方が重要）何もしないでゐるやうに見えると下宿の信用がなくなるので、もう一つは何にもしないでゐるといふ事が不安なので、——この三つの理由で、彼は當時の流行であつた、オウ・ヘンリイ、タゴオル、バルザツク、ドストイエフスキイ、その他、暇に任せて飜譯をしてゐたので、長短篇合せて十數篇もその飜譯原稿を持つてゐたが、それが一篇も賣れないので困つてゐた。

餘り飜譯が賣れないので、或る時、古谷が、滅多にこぼさぬ愚痴をこぼして云つた。

「牧君、君だから云ふが、僕は時々こんな役に立たない英語や獨逸語をやつたのを後悔する時があるよ。君だから云ふがね、まだ學校に籍があつた時分のことだ、歌澤といふものを習ひに行つたことがあるのだ。……」

「道理で、ときどき君が歌つてるのは、……あれ歌澤だつたのか？」

「さうだ。」古谷はちよつと極の惡さうな顔をして、「師匠は半井桃水といふ新聞小説家があるだ

らう、あの人の細君だ、夫の桃水も歌澤をやつて時々その歌澤の新作を作つてゐたがね、歌澤寅吉といふんだ。……自分で云ふのもをかしいがね、その寅吉が始終僕にあんたは百人に一人ぐらゐと云つていいほど質がいいと云つてくれたよ。月に一度お浚といふものがあつてね、若し僕が何かの都合でそれに出ないと迎へをよこしたものだよ。……」この邊から滅多に興奮したことのない古谷が興奮して來た、「僕が止めると云つたら、もう二ケ月つづけたら許をやると云つたよ。許をもらふと歌澤何とかいふ名をくれるんだ……。」

「君なら、參三の參を取つて虎參がいいだらう。」

「虎參なんかよくないよ。……だがね、あの時、師匠が、止めてから又何度も進めに來た位だから、師匠の言ふ通り、もう二ケ月つづけて、許を貰つておいたら、今頃は、赤坂か、神樂坂か、新橋か、淺草か、何處かの横町で師匠をして樂に暮してゐたと思ふんだがね……」

「どうしてやらなかつたんだ、金がなかつたの？」

「無論、金はなかつたが、師匠は月謝なんか入らないと云つてくれたんだが、……」

「それをどうしてやらなかつたんだ？」

「僕は……」古谷は云ひにくさうに、「僕は……三味線が引けないんだ。」

「どうして稽古しないんだ、三味線を？」

「それがね、僕は、——君も知つてるだらうが、——中學時代に劍術の選手だつたらう、あれをやつた爲めに指が堅くなつたんだ。……」

「でも、稽古したら鳴らない事はないだらう？」

「それがね、」と又いひにくさうに、「僕のは劍術のせゐばかりぢやないんだ。僕は『鳴らず手』なんだ。」

「『鳴らず手』つて何だい？」

「それはちよつと解說が面倒だがね。……つまり三味線には、——三味線でなくて何にでもあるだらうね、——『鳴手』『鳴らず手』といふものがあるんだ。『鳴手』『鳴らず手』といふのは、つまり、質のことだね。……例へば、『鳴手』の人は、どんな三味線を引いても、いい音が出るんだ。反對に『鳴らず手』が引くと、どんな三味線を引いても、いい音が出ないんだ。……そればかりか、一つの三味線でも、『鳴手』の引いた跡は音がよくなり『鳴らず手』が引いた跡は音が惡くなるさうだ。……」

「ぢやあ、『鳴手』の三味線を借りたらどうだ？」

「さうはいかんよ。……つまり、かうなんだ。三味線は一つなんだ、その一つの三味線を、『鳴らず

手』が引いた跡でも、『鳴手』が鳴らすと、初はちよつと音が悪くても、直ぐいい音になるといふ譯なんだよ。併し……」古谷はますます調子に乗つて、「併し、……かういふ話があるんだ。むかし、大阪で名人と云はれた團平が江戸に來た時、江戸中で三味線の調子の本眞に合うてる人は三人しかおまへん、――一人は二代目清元梅吉、一人は三代目駒之助扇歌、もう一人は四谷の何とかいふ旗本だ、――と、かう云つたさうだ。ところが、君、その二代目梅吉は『鳴らず手』で、三代目駒之助扇歌は肝腎の左手の人差指が、つまり糸を抑える指が、瘭疽をわづらつて使ひものにならなかつたさうだよ。……」

「ぢやあ、君も『鳴らず手』の名人になつたらいいぢやないか。」

「さうはいかんよ。」古谷は何故か苦苦しい顏をして云つた。――

その時の事を思ひ出して、牧が「君、歌澤はどうした？」と聞くと、

「……文句も節も忘れたよ、」と古谷は力のない聲で云つた。――

矢張りその頃の事、――或る朝、古谷が

「朝といふものは清清しいものなんだが、僕たちみたいに貧乏すると、ちよつとも清清しい感じなどしないで、空氣までが重重しい氣がするね。さあ、ひとつ氣持を轉換する爲めに飜譯にかか

るかな……』と獨言のやうに云つた。

「今、何の飜譯をやつてゐるんだ？」牧が蒲團の中から顏だけ出して聞くと、

「昨日から、氣持轉換の爲めに、ロシアの叙事詩を始めてるんだ。詩の形にするのは面倒だから、散文譯にするつもりだ。ちよいと面白いもんだよ、君は知つてるかも知れないが、ネクラソフの長詩だ。」

「ネクラソフの長詩は讀んだことがないね。」

「『如何にして露西亞で自由と幸福が得られるか』といふ長たらしい題だが、何時の事か、何處の國の事か、それは問題ではない、そんな事はどうでもいい、といふのが書出の言葉だ。……」

「ちよつと面白さうだね。」

「まあ、分りよく云ふと、所も知らぬ名も知らぬ、といふ譯だね。或る街道で七人の善人の百姓が逢つたとさ、と云ふんだ。その七人がそれぞれ大變な所から來てゐるんだ。『瘦地』、『荒地』、『石塊地』などといふ國から、『つぎはぎ』、『ぼろぼろ』、『跣足』、『貧乏ぶるひ』、『燒け出され』、『空腹』、『不作』などといふ七人の百姓がその街道で落合つて大いに議論をするんだ、我我は互にかういふ有樣であるが、そんなら、誰が、露西亞では、仕合者か、自由な人間か？　といふやうな

問答を始めるんだ。……君、それからが面白くなるんだよ。……おやおや、また寢てしまつたな。チョッー」と古谷は舌鼓を打つた。——

しかし又、牧が二三時間後に眠りから覺めると、何處からか唄を歌ふ聲がする。古谷が賣れない飜譯の仕事に飽きたか疲れたかすると必ず始める歌澤をうたつてゐる聲である。歌ふ聲が可なり近くから聞えるので、牧が蒲團の中からそつと覗いて見ると、小さなぼろ火鉢の上に手をかざしその手の上に顏を伏せてゐるので、長く延ばした髪の毛が火鉢の火で焦げはしないかと危ぶまれるやうな恰好をして、嘗て『百人の一人』の質と云はれた聲で歌澤をうたひつづけてゐるので、牧は又そつと頭から蒲團をかぶり、次ぎ次ぎと歌はれる歌澤に耳を傾けたものであつた。——

それから七八年後、牧自身も半年程歌澤を習つた事があるので、一つの歌を教はる毎に、七八年前蒲團の中から聞いた古谷の歌澤はこれだなと思出し思出したことがあつた。が、今は——

「いつ來たの？」白髪の五分刈頭が聞いた。

「二三日前……」禿頭が答へた。さうして「今何處にゐるの、住居は？」と聞いた。

「濱寺だ。」

「お母さん、お達者？」

「ああ、達者だ。」

「君はお父さんに似たんだね、その白髪は？」

「ああ、白髪だけ親父に似て、顏が母に似たもんだから不幸だよ。」

「さうさう、何時か、君のお母さんが何人かの競爭者の中から君のお父さんを取られたといふ話を聞いた事があつたね。」

古谷は答へずに苦笑した。しばらくして、

「君、」と古谷がちよつと改つた形になつて、「僕、今、子供が二人あるんだよ、」と云つた。

餘り突然だつたので、牧はちよつと面喰つた形で、

「幾つと幾つ？」と云つてから自分の智慧のない問を後悔した。と、反對に、

「六つと四つだよ、」と古谷は、牧に急に解せなかつた程、にこにこして、よく聞いてくれたと云はんばかりの表情で、答へた。さうして附加へた。「子供といふものは可愛いもんだね。」

牧はますます面喰つた。これには智慧のない言葉もある言葉も返す術が分らないほど狼狽した。さうして、暫くしてから、「ここにも子煩惱がゐる」と、牧は考へた。

そこへ料理が運ばれた。——

人

間

往

來

明日の燕で立つことに極めて、使に行つてくれる者に切符と急行券を買ふことを頼んでゐると、暦を見てゐた母が

「今日は、五月十五日……日曜やな、……」そこまでは獨言で、「今日は本木の正夫さんの祥月命日や。健作、お前、一ぺん行きたい行きたいと云うてたが、今日、これから、わしと一諸に行けへんか、」と云つた。

彼は、ちよつと行く氣にはなつたが、自分が久振りで伺ひたいと云ふと、先方で大袈裟にとつて斷ると思つたので、母が佛様にお參りさせて戴きたいと申して居りますと云つたら、あの子煩惱の本木のことだから、喜んで來てくれと云ふだらうから、そんな風に電話をかけるように細君に云ひつけた。

彼女の電話の返事は彼が豫想したより以上に成功した。「今年は、正夫さんの十七年になるのださうです。それで、一時間ほどしたら、坊さんがお參りになりますから、成るべく早くいらつして下さるように、と……」いふのである。

十七年前、健作はまだ獨身であつた。本木正造は、健作の又從兄弟であつたが、年は彼より十

三歳上だつた。正夫は正造の一人子であつた。

道が遠く、時間もなかつたので、健作と母は自動車で出かけた。自動車の中で、十七年前、正夫が死んだ時分のことを、又その前後の事を、彼は思ひつづけた。——

正夫が死ぬ前の年の秋、健作に細君とも戀女とも附かぬ女の出入があつた爲めに、それまでの細々した借家住居が出來なくなつた時、本木は、健作君は自業自得だから何も補助する事はないが、お母さんはお氣の毒だからと云つて、彼の母を自分の家に預かつた。それと共に、健作は下宿してゐる友人の部屋に居候をした。

當時、本木は麻布に住んでゐた。家族は彼と彼の妻の啓子と一人子の正夫と他に書生一人女中二人であつた。彼は四十一歳、啓子は健作と同年で二十八歳、正夫は九歳であつた。當時、彼は或る會社の可なり重い役であつたが、夕方會社が引けても直ぐ家に歸らないで茶屋遊びに耽つてゐた。會社の用で始終出かけて行く新潟に愛する藝妓がゐた。が、彼の細君の啓子は、體が丈夫でなかつたからでもあらうが、家にゐると絶えず呶鳴り散らす夫が留守勝ちなのを却つて氣樂に思ふやうな性質でもあつた。また女學校出には珍しく捌けた性分で、自分から率先して新潟の藝妓に品物を贈つてやつたりした。——

正造と啓子は氣質がまつたく正反對であつた。彼は至つて神經質で、彼女は至つて呑氣であつた。彼のは、神經質といふより、一種の神經病で、部屋を歩いてゐて疊の緣を踏むと後戻りして歩き直したり、時とすると座蒲團の上に坐るのに幾度もその周圍を廻つてからでないと坐らなかつたり、また一度出かけて行つたのが急に用ありげに歸つて來て別の靴に穿きかへたり、といふ風であつた。そんな風であつたから、慣れてはゐるものの、啓子はときどき「今に本木は氣が變になるんではないでせうか、」と健作の母にささやく事があつた。唯、この正反對の氣質を持つた本木夫婦をやうやく結びつけてゐるのは一人子の正夫であつた。その形は全く違つてゐたが、盲目的に子を愛する點では、彼等は全く一致してゐた。

その頃の或る日、健作が本木の留守宅を訪問すると、

「……子供なんて、をばさん、一人ぐらゐあるのは、心配を飼つてゐるやうなものですよ、」と啓子が云つた。

「本當です。……私の方でも、一人子同樣の健作が、あの通りでせう。……あつて心配、なくて心配、と申しますからね……」健作の母が慣れない東京語で云つた。

しばらく言葉が跡切れた。——彼女等は健作の來てゐることを知らなかつた。彼は茶間の鄰の

洋間で雜誌を拾ひ讀みしてゐたのである。——

「……本木がいいお妾さんを欲しがつてゐるんですが、いいのがないでせうか、」と啓子が云つた。

答はなかつた。

健作は、馴染の書生に、急に用事を思ひ出したと云ひ繕つて、彼女等には會はずに、友人の下宿に歸つた。

それから一月程後の或る日、母に用事があつて、健作が本木の家を訪ねると何月振りかで本木と顏を合はした。主人公が留守のつもりで入つて行つたので、彼は自分の顏色の變つたのが分るほど狼狽した。が、折よく母が傍にゐたので大急ぎで用事の話をすますと、彼はそこそこに本木の家を辭した。歸る道々、今方見た正造の苦々しい顏がときどき彼の心の目に浮かんだ。

その翌日、健作が居候をしてゐる彼の友人の下宿に、彼の母が訪ねて來て、「正造さんがお前を嫌がつて、わしに用事のある時は、お前に來させないで、わしの方から行つてほしい、と云はれた……」と流石に悲しげな顏をして云つた。彼はあり得る事だと思つたので、素直に「承知しました、」と答へた。——

生れつき虛弱だつた正夫が床に就いたのはその翌年の四月中頃であつた。彼はそれから一月ほど後の五月十五日の朝死んだ。病氣は肺病であつた。その死の知らせは健作の所には彼の母から來た。その晩、彼は、通夜をしようと思つて、質屋から袴を出したり、新しく下駄を買つたりして、殆ど一年振りで本木の家に行つた。ところが、子の爲めに、ひどく神經の興奮してゐた本木は、書生にことづけて、「今夜は外に大ぜい見えてゐまずから、」といふ口實で、折角の健作の志を送つてくれなくともいい、」と云はれた時の事とは、その半年程の間、思ひ出すと、健作の心を曇らした。併し、その葬式の日に、「君は送つてくれなくてもいい、」と云ひながらも目に涙を一ぱい溜めてゐた本木の顏は、可なり長い間、健作の頭に殘つた。——

その時から十七年たつた。その十七年の間に——

正夫が死んだ翌年、ずつと前から、氣が合はないとか、正造が神經質過ぎるとか、いふ理由だけでなく、もつと深い理由で、しばしば里に歸つたことのある啓子が、里に歸り切りになつたのが元で、たうとう本木夫妻は夫婦別れをした。その後、五六年の間、彼は表向き獨身でゐたが、

實は啓子と別れる二三年前から小田原に茂子といふ隱女があつた。茂子は元箱根の藝妓であつた。啓子と別れてから六年程後に、彼は、書生や女中に『弘田さん』と彼女の姓を呼ばすことにして、茂子を家に入れた。彼女は元黑人のやうな所がなくて年のわりに落着いてゐたので、後には本木の親類や知人たちまで、本木に倣つて、弘田さんと呼び慣らし、本木の內緣の細君として附合ふやうになつた。この『弘田さん』時代に、本木の家は澁谷に越し、健作も彼が長年の志望であつた文筆の仕事でやうやく一家を成すやうになつたので、彼は久振りで本木を訪問したことがあつた。健作の母も、啓子と親しくなつたやうに、弘田さんとも會ふと親しくなつた。ところがこの弘田さんは、來てから五年程して、（銀行員と結婚するために歸るといふ名義で）小田原に歸ることになつた。彼女を知る人々は皆それを惜しんだ。

弘田さんが本木の家を去つた本當の理由は、本木が何處かの女事務員と特別の關係ができた事、その女が身持になつたので何處かに圍つてゐる事、などが分つたからであつた。それでも、本木に止められて、弘田さんは出來るだけ辛抱したが、たうとう堪り兼ねて彼女が本木の家を出た頃は、女事務員に出來た子は二歲になつてゐた。女事務員は名を俊子と云つたが、本木は、俊子と子を引取つてからも、親類や知人に彼女を紹介しなかつたばかりか、彼等が訪ねて來ても、なる

べく彼女に顏を出させないようにした。本木は、又、弘田さんが隙を取つて歸つてから一週間程のうちに、これまでゐた書生や女中たちをすつかり換へてしまつた。それが濟んでから、彼は俊子と子を引取つたのであるが、俊子は引取られてから半年も立たぬうちに病氣のために入院した。慢性の肺病だつたので、病院には二月程ゐただけで、彼女は逗子に小さな家を借りて轉地した。彼女は、逗子に移つてから一年程ぶらぶらしてゐたが、危篤の電報で本木が東京から自動車で駈けつけた時、やつと臨終に間に合つた程の急な死方をした。息を引取る眞際に、一年餘も顏を見ない子の名を呼んだ事が、人に話のできない事だけに、本木の頭に、寢覺の惡いほど、可なり深い印象を殘した。子は女の子で、房子と云つた。その房子はもう七歲になつてゐた。——

自業自得とはいふものの、本木は、俗に云ふ四十二の厄年のとき、一人子の正夫に死なれ、その翌年、好きで貰つた啓子に去られて以來、所謂家庭の幸福には甚だ惠まれなかつたが、政治的色彩の濃過ぎない有力な實業家に取入る手腕があつたので、その十數年の間に、勤める會社が二三度變り、時には會社勤を止めてゐた事もあつたりしたが、どういふ方法でか、一年毎に、私財を殖やしつつあつた。現に、今年の二月上旬、現住所の目黑に地所を買ひ家を建てた。その新築

の披露式に健作の母が呼ばれて行つた。

披露式は午後六時からであつたが、健作の母に三時間ほど早く來てくれ、と、その朝、電話で云つて來た。これは、本木の亡父が生前、健作の母の姑（健作の祖母）に落魄した時しばしば經濟的に救はれた上に養子の世話までしてもらつた事、本木自身少年時代に彼の兄と一緒に健作の母の夫（健作の父）の家に書生に置いてもらつた事、この二つの事で、彼は健作の母に敬意と親しみを持つてゐたからである。——

その日、健作の母が本木を訪問すると、新築の家の部屋部屋を案内してから、彼は彼女を茶間に通して、

「をばさん、」と眞のをばさんに話すやうな調子で、「お陰で曲形にも、家は建てましたし、もう何の心配もないやうなものですが、唯一つ、子供です。……氣はいつまでも若いつもりでゐても、矢張り年を取つた譯でせうね。御存じの通り、母親がゐないもんですから、機嫌のえゝ時はえゝんですが、一つ抉れると、女中が幾ら賺しても駄目なんです、……初めは一所懸命に宥めてゐますが、仕舞には、私が見てゐないと、女中が子供を叱りよる、これでは私が家を明けてゐる間に何をしよるか分らないと思ふと、……不憫で、不憫で、……」といふ言葉が潤んで聞えたので、

見ると本木の目に溢れるやうに涙が溜つてゐた。彼女が答に困つてゐると、突然二人を飛び上らすほど驚かす音がした。併しそれは電話のベルの音であつた。

「もしもし、は、は、」今先き「不憫で、不憫で……」と云つた聲とは別人のやうな朗らかな聲で、本木は受話器を耳に當てながら叫んだ、「は、は、あのう、折角ですが、唯今、五六人客が來て居りますので……」

健作の母は、本木のかういふ電話には、慣れてゐるので少しも驚かなかつた。驚かなかつたどころか救はれた氣がした。——

この日の歸りに、本木は「一度ぜひ健作君に來てくれるように云つて下さい、」と云つた。

本木が「健作君」と云つたのは、健作が中學を出て上の學校に入る學資がなくて困つてゐた時、本木の兄が他の學科なら學資を出すが文科なら出さないと云つた時、當時奈良にゐた健作が、東京から本木が京都の本木（彼の兄）の家に來てゐると聞いて、法學士である正造なら分ると思つたので、どうしても文科に入りたいといふ希望を出來るだけ法學士の感心しさうな文章で綴つた手紙を、奈良から京都に出すと、本木から折返し返事が來て、何日の何時に京都何町の何旅館に來てくれと云つて來たので、指定の日時に指定の旅館を訪問すると、本木は、健作の顏を見るな

り、「君はずゐぶん筆が立つな、」と云つて御馳走した上で、「兄貴には卒業したら教員になると云つとき給へ、學校に入つてしまひさへしたら何でも君の好きな事をやつたらえゝんだから。東京に來たら、東京に慣れるまで、半年でも一年でも僕の家に來てるとえゝ、」と云つたので、健作はその云ふ通りにした、さうして上京後半年ほど正造の家の一室で暮したが、京都の本木から東京の本木に送つて來る彼の學資金の中から下宿料に近い金を引かれたので、その後は自由行動を取つたが、元を尋ねると彼が今日文筆で辛うじて生活できるやうになつたのは、この半世紀程前の本木正造の恩義の爲めであつた。が、本木の方でも今では健作に親しみを感じ出したからである。

これが、健作が、新築披露式から歸つて來た母から「一度ぜひ健作君に來てくれるように」といふ言附を聞いて、久振りで「一ぺん行きたい、」と云つた所以である。——

目黑の高臺にある本木の新邸は、外から見ると、和洋折衷風の建物であるが、内に入ると、洋風が過半であつた。部屋も洋室が多く、洋室には階上階下とも大抵ヴェランダが附いてゐたし、玄關も廊下も洋風であつた。玄關に入つて直ぐ目についたのは正面の壁にも兩側の壁にも和洋の繪の額が合して五六枚かかつてゐたことで、その中で眞先きに目についたのは近藤浩一路の奈良

あたりを描いた水墨畫であつた。

健作と彼の母の通された部屋は、玄關を上ると直ぐ左手にある階段を上つて、(その階段の上口の左側の壁にも水彩畫の額がかかつてゐた、また途中で直角に曲る階段の曲角の隅に骨董屋からでも買つたものか等身大の裸婦の石膏像が置かれてあつた、)長い廊下を通つた突當りの左側の洋室であつた。健作はかねて母から、「内も隨分あるけど、本木さんとこの額の數は大したもんやで、」とか、「掛物が床の間に一ぱい積んだアる、」とか聞いてゐたので、それほど驚きもしなかつたが、まさかこんなに澤山あるとは思はなかつた。彼等の通された部屋は、これもヴェランダが附いてゐたが、主人公の書齋兼應接間らしく思へた。健作の知る限り、本木は讀書を好まない質であるから、書齋といつても書籍は殆ど一冊もなく、眞中に簡易な卓子と椅子が置かれ、片隅に、書き物をする机が置かれ、その机の上に、彼の兄の太郎の寫眞が立てかけられてあつた。太郎の寫眞を見た時、健作は、京都の本木の家の奥庭に洋風の小ぢんまりした圖書館を思ひ出した、そこには明治時代からの數種の新聞がそろへて保存され、所謂軟派の文學書は新刊される毎に殆ど悉く小賣書店から月末拂で屆けられ、それ等が何列かの本棚に竝べられてあつたが、多忙な主人公はそれ等の本を殆ど見たことがないばかりか、家族の者にも絶對に見させず、その戸の鍵は一日に

一度掃除する役の書生に渡されてゐる事を思ひ出した。讀まない本を數多く買ふ兄の本木も、本を少しも買はない弟の本木も、共に書籍に親しまない點で似てゐると健作は思つた。似てゐるのは、兄が玩具を蒐集して部屋を飾る事、弟が和洋の繪畫を蒐集して部屋を飾る事であらう。——

その部屋の三方の壁には、彼の亡父本木信哉の寫眞、彼の少年時代の師であつた健作の亡父牧六三郎の寫眞、彼の壯年時代の師であり彼の崇拜する師であつた、これも故人の、鹽見博士の寫眞、その鹽見博士の親友であつた城山大將の寫眞、俗な言葉でいふと彼の親分に當る某政黨の顧問である赤尾又太郎の寫眞、彼の亡くなつた一人子の正夫の寫眞、以上六人の寫眞が程よき所に掛けられてあつた。この時は本當に來客があつたので、健作と彼の母はその部屋に附いてゐるヴエランダの椅子に腰を下ろした。小ぢんまりした卓子を挾んで彼等は差向ひになつたり、立上つて遠景を眺めたり、目の下の庭を見下ろしたりした。遠景や庭の眺望に飽き、健作が卓子の傍に戻つてその上にある二三冊の雜誌を拾ひ上げると、『現代美術家總覽』といふ粗末の紙表紙の本が出て來た。日本畫家西洋畫家の諸團體を類別して各畫家の略歷が附けられてあつたり、附錄の見開きの頁には各畫家を相撲取の番附風に扱つた表を入れたりしてあるのは未だしも、各畫家を軍人のやうに大將から兵卒までの位を附けてあるのには、健作も呆れた、といふよりも、何か見

てはならないものを見たやうな氣がして急いで本を閉ぢた。が、その本を雜誌の下に置いて、ふと上の方を見ると、壁間に、日露戰爭の終に近い頃奉天戰役の直前に山縣元帥が密かに內地から滿洲の聯合軍の本營を訪れた時にとつた寫眞——それは日露戰爭直後健作も見た覺えのある山縣を中央に、大山、黑木、奧、野津、乃木、兒玉その他の諸將が竝んでゐる寫眞——の額が掛つてゐたので、彼は六十近い本木にもこんな子供らしい趣味があるのか何か微笑ましい氣がした。この時、三十五六歳の白粉氣のないさつぱりした小綺麗な婦人が現れた。彼の母が先きに見つけて椅子から腰を浮かした。

「ま、どうぞ、どうぞ、そのまま……いつもいつも、結構な頂戴物をいたしまして……」と婦人は云ひながら、果物を盛つた鉢を卓子の上に載せてから、健作に向つて初對面の挨拶をした。

「急に思ひ立ちまして、ちよつとお參りさせていただきに上りました。……坊さんはまだ……」と健作の母が云ひかけると、「あの……先程、一時間程と申上げましたが、あの電話が切れまして五分程しますと、坊さんが見えまして、何か坊さんの都合で、早く參りましたのださうで、……」と婦人は氣の毒さうに云つた。「さやうでございますか……では、取敢ずお參りさせていただきませう、」と健作の母が云つた。「では、御案內いたしませう。」

今度は奥の階段を下りた。下りると直ぐ左手に六疊の子供部屋があつて、その次ぎの間が佛間になつてゐた。どういふ譯か佛間はたつた二疊であつた。

「ずゐぶん可愛らしい佛間ですね。」健作の母は、佛間は初めてだつたので、少し小さ過ぎるとは思つたが、そんな事は口に出して云へないので、こんな風に云つた。

健作がこの佛間に入つて眞先に目についたのは、正夫が二歳位の時に寫した可愛らしい丸裸の寫眞である。これは二階で見たのと違つて額に入れずに佛壇の中に收めてあつた。彼が線香を供へてからその丸裸の寫眞に見入つてゐると、次ぎの間に坐つてゐた先きの婦人が、

「毎朝、その寫眞の前に坐つて、泣いて居ります。それから、會社から歸つて參りますと、あの二階の寫眞の前に立つて、また長い間泣いて居ります。……それが毎日でございます、」と涙聲で云つた。

この言葉を聞くと、彼は直ぐこの女の人は前の弘田さんの役だなと思つたが、この言葉とこの場の光景は、死んだ正夫のこの丸裸時代を知つてゐるので、彼は可なり心を打たれた。

元のヴェランダの所に戻つて來てから、

「さつきの女の人は前の弘田さんのやうな役ですか、」と健作が聞くと、

「さうらしいな、」と彼の母は答へた。

彼は立上つて先きに見た正夫の寫眞の傍に行つてみた。それは、多分正夫が死ぬ前の年のらしく、玩具の木馬に片足をかけてゐる寫眞であつた。佛間にある寫眞といひ、この部屋の寫眞といひ、成程、これは本木正造を泣かすであらう、と思つた。いつの間にか、彼の母も彼の傍に立つて額の寫眞を見つめてゐた。

「もう見るのは止しませう、」と云つて、彼等が再び元の席に戻つて一服してゐると、いつの間に入つて來たのか、七歳にしては小さい房子が本木太郎の寫眞を立ててある机の椅子に上りかかつてゐるのが、彼の母の目に止まつた。

「房子さん、いらつしやい、いらつしやい、」と彼女が聲をかけると、房子は見慣れない健作の方にちよつと不審さうな目を向けたが、椅子に上ることをあきらめて、直ぐちよこちよこと彼等の方に小走りにやつて來た。が、傍に來て、二言三言、言葉を交してゐたが、庭に犬が駈けてゐるのを見ると、「ジョオ、ジョオ！」と犬の名を呼びながら駈け出して行つた。その姿は直ぐ庭に現れてブランコに乘つた。いつの間にか連らしい同い年位の女の子がブランコの傍に立つてゐた。

「あれ、隣のお子よ、」と彼の母が云つた、「あの子（房子をさす）は、なかなか、しつかりした、

利口な子や。正夫さんは、生きてゐても、どうかと思うけど……。それでも、正造さんは、ときどき、正夫がゐたら、去年は、二十六になる、今年は、二十七になる、と云ふて、男泣きに泣いてなさるからね。……」

その時、先きの婦人が入つて來て、「どうも、大へんお待たせいたしました。どうぞ、此方へ、」と導かれて、來た時に上つた階段を下り、一たん玄關の板數の間のところへ出て、正面の、近藤浩一路の繪の左手に附いてゐる扉を明けると、十二疊ぐらゐの洋風の應接間があつた、この部屋にもヴエランダが附いてゐた。この部屋に入つて、眞先に目についたのは左手の壁にかかつてゐる百號以上の厖大な油繪である。それは日本人にはとても描けさうにない厖大な海の繪である。健作がその繪の前に立つてゐた時、彼等を案内した婦人が、その繪の左側に附いてゐる扉を半分あけて、「御案内いたしました、」と隣の部屋の内の方へ聲をかけると、

「ええだらう、此方へお通ししても、」と聞覺えのある上方訛のある低音の聲が答へた。本木正造の聲だ。

隣の部屋は食堂になつてゐた。食堂といつても、向前に廣い方に四人づつ狹い方に二人づつ竝べる位の長方形の卓子が部屋の大半を占め、窓は一方だけ、窓の反對の側に簡單な食器棚が備附

けられてある、といふ程度の、恐らくこの家の部屋部屋の中で、最も粗末な飾氣のない、(それでも兩側の壁に二枚づつ四枚の額が掛つてゐる、)最も暗い部屋であらう。

彼等が入つて行くと、入口から一番遠い窓際の席に主人公の本木が、彼と直角の位置に二人の先客が差向ひに、席に着いてゐたので、彼等は、距離は雜れてゐるが、本木と向前になる席に竝んで着いた。既に食事が濟んだ後だつたので、卓子の上には灰皿のほかに何も置いてなかつた。先づ本木が二人の先客を彼等に紹介した。その一人は二階の彼の書齋に掛つてゐた寫眞の一人鹽見博士の嫡子で最近官命で歐洲に行つてゐて歸つて來たばかりの或る省の役人であつた。この鹽見と、健作は同年であるばかりでなく、彼が二十歲で上京して半年ほど本木の家に寄宿してゐた頃、鹽見の家が直ぐ傍にあつたので、毎日ほど顏を合したものであつた。當時、健作は或る私立大學の文科の豫科生で鹽見は第一高等學校の法科の學生であつた。鹽見は養子であつた。彼の實兄は音樂家であつた。その頃、彼は夕食後の休時間に本木の家にやつて來て、細君の啓子に淸元延壽太夫の『三千歲』のレコオドをかけてもらつては獨稽古をしてゐた。ところが、彼は、一週間で二枚分のレコオドをすつかり覺え、延壽そのままの節廻しで『三千歲』のレコオドに入つてゐる分だけは完全にうたつて、啓子と健作を驚かした。併し、啓子が次ぎに延壽太夫の他の曲のレコオドを買

つて來て、「今度はこれをおやりになつたらどう？」と幾ら進めても、鹽見は「僕は音曲はあれ一つで止めます、」と云つた。云つた通り、彼は音曲を忘れたやうに、止めてしまつた。殆ど十數年振りで鹽見の顏を見てその事を一番初めに健作は思ひ出した。もう一つ、ロシア文學が流行してゐた頃で、或る日、彼等がロシア文學の話を交した時、鹽見が「牧君、君は『アンナ・カレニナ』や『戰爭と平和』を讀むとき、出て來る無數の人物の名をどうして覺えますか、」と聞いた、健作が「どうしてつて、自然に覺えますね、」と不審な顏をして云ふと、「牧君はえらいなア、」と鹽見は云つた。兄が音樂家であるだけに、彼の聲は低音であつたがそれが可なり響いた、「僕はまだ『アンナ・カレニナ』しか讀んでゐませんが、僕はあれを讀んでゐる間、あの中の人物の名の表をこしらへて、机の前の壁に張りつけておいたものですよ、あ、は、は、」と持前の朗らかな聲で笑つた。この事を健作は思ひ出した。——

鹽見は一足先きに歸つた。別れ際に、彼は「一度お伺ひしたいと思つてゐるのですが、お忙しいと思ひまして、」健作に云つた。「忙しくない日はありませんが、ま、年中休みのやうなものでもありますから、いつでも……一度近いうちに、どうぞ、」と健作が云ふと、「え、そのうち、一度……」と昔ながらの朗らかな聲で云つた、如何にも近いうちに行くやうに。で、お葉書で結構です

から、今度お變りになつたお所をどうぞ、」と健作が云ふと、「電話帳にありますが……いや、直ぐお知らせします、」と云つた。が、その約束の葉書は一週間が一月たつても來なかつた。——

紹介された二人の先客に型通りの挨拶をすましてから、

「何年ぐらゐお目にかからないでせうか、六七年振り位でせうか、」と健作が本木に云ふと、

「いや、六七年どころか、もつと會はないよ、」と本木は云つた。

六七年か、それ以上、會はなかつたか、その場で直ぐ確かな判斷はつかなかつたが、健作は、そんな事よりも何よりも、本木が餘り深けて見えるのに驚かされた。五十九歳は若い年ではないが、いくら贔屓目に見ても六十五六歳ぐらゐに見えた。全くの白髮は十年程前からであるが、今はその白髮の毛が薄くなり、顏色が酒を飲んで赤くなる赤さとは別の桃色がかつた赤味を帶び、目の光が霞んでゐるやうに見え、皮膚が變に弛んでゐるやうに見えた。先客の他の一人は、本木を通して彼の會社に何かの仕事をさして貰ふ者らしく、愛知縣何某町何某と記した名刺を健作に渡した。

「どうだ、健作君、君は禿げたし、僕の白髮は御覽の通りやが、髭を取つてから若く見える、と云はれてゐるんだが、……」

「お若くなりましたよ、」と愛知縣が云つたのと殆ど同時に、

「さうでもないですな、」と健作が云ふと、彼の母は彼の膝をちよつと突いた。

「ごめん下さいませ、」といふ聲と共に扉が明いて、先きの婦人が、メロンを盛つた皿を、女中に手傳はして、持つて來た。と、本木は、席から立つて來て、健作たちの後にある食器棚からナイフとフォークを出して、客たちに配りながら、

「どうも、獨身者は、これだから辛いよ、」と笑ひながら云つた、それから例の婦人に向つて、

「操さん、はるに食鹽を持たしてくれませんか、」と云つた。

これを聞くと、健作は、今度は『弘田さん』と姓を呼ぶ代りに、名に『さん』を附けて女中と區別する譯かな、と思つた。

メロンを食ふ事で話が途切れた時、突然、

「あ、健作君、先程は有難う、さつき鹽見君に見せたんぢやが、鹽見君はあの方に委しい、あの國芳の繪を非常に褒めてくれたよ、」と本木が云つた。それが始まりで、「わしは洋畫の方は少しも分らんが、日本畫の方は、古い物は分らんが、新しい物なら、落款を見んでも、これは玉堂、これは栖鳳、これは大觀、これは素明、これは翠雲、と、それだけはちやんと分るやうになつた

よ、……」

「ははあ。」

「ふふん。」

鹽見と愛知縣人は異口同音に呻るやうに云つた。

「さうですかなア、」と健作もそれに雷同しておいたが。

「この分なら、わしは、畫商になつても、食うて行けるぢやらうと思ふ、……」と本木はつづけた。

「日本畫は大分お持ちださうですね。」餘り默つてゐるのも惡いと思つて、健作が水を向けると、

「いや、今度、ゆつくり、君に見てもらはうと思ふんだが、……といふのは、日本畫は押入に一ぱいあるので、見てもらふとなると一日がかりになるからだ。……日本畫は、油畫と違つて、ときどき掛け換へんならんのが面倒や。……今日は掛け換への日だつたんだが、君だとか、鹽見君だとか、珍客が見えたもんだから……」と本木は云つた。

その時、鹽見が中坐したのである。——

鹽見が中坐したのを機會に、本木は健作たちと愛知縣人を隣の應接間に案内した。この部屋に落着いて見ると、ここには、あの尨大な海の繪の額のほかに、その反對の側の左の隅に、濱田葆

光の油繪の小品が上の方に掛けられ、その下に甲冑が剝出で飾られてあつた。その部屋には、ストオヴが備へ附けてあつたが、額は、南薰造の水彩畫、石川寅治の油繪の小品、チェツコ・スロヴアキアの風景を描いたといふチェツコ・スロヴアキアの無名畫家の作になる油繪、その他――が掛けられてあつたが、健作の目に、それ等の繪に、一つとして增なものがなかつたので、

「あの濱田葆光の繪はちよつといいですね。葆光は、鹿專門ですが、展覽會に出す大きなのより、却つてこんな小品の方がいいやうですね、」と健作が愛嬌に云ふと、

「なるほど、君はなかなか洋畫通だね、二階の應接間に葆光の大きな繪があるんだがね、なるほど、君の云ふ通り、小さい方が、粗が見えなくてええね、」と云つてから、本木は急に改まつて、

「健作君、この繪は傑作ぢやらう、」と例の尨大な海の繪を指さしながら、「この波と空のうまさは眞に迫つとるだらう。……」

「これは日本人の繪ぢやないでせう。」その尨大な繪は、大きいばかりが能ではないと云ひたい程褒めやうがなかつたので、その繪が西洋人の作らしいのが勿怪の幸だと思つて、健作がさう云ふと、

「うん、さすがに君は目が高い。これはイギリスの何とか云ふ大家の描いたもんで、赤尾さんか

ら貰つたんぢや、」と本木は頬に會心の笑を浮べて云つた。赤尾といふのは、例の二階の書齋兼應接間にかかつてゐる額の寫眞の中の一人で、彼がときどき世話になる某政黨の顧問である。

「實に、お宅は結構に出來て居りますな、」と愛知縣人が突然いつた。

「いやア、」と本木は云つてから、「健作君、君は、この家を、どういふ風に見てくれた、一つ君の感想を聞かしてくれないか。」

「みな拜見してゐませんが、どの部屋が特にいいと云ふのがない代り、特に惡い部屋といふのもない、つまり、班がありませんね。僕はさう思ひます。」

「さすがに、君はうまい事をいふね、それが三菱式なんだから、ね、」と云つてから、本木は愛知縣の方を向いた。

「さやうです。」

「健作君、」と云つて、本木は立上り、例の尨大な繪の傍に行つて、その繪の下の方を指さしながら、「この邊にピアノを置かうと思ふが、どうだらう。」

「それはいいと思ひますが、その大きな繪が邪魔になるでせう。」

「この繪はずつと上の方に上げられるがね。あの鎧のある邊はどうだらう。」

「いや、あそこより、その大きな繪を上に上げるとしたら、そこの方がいいでしやう。」

「うむ、さうか。よし、それに極めた。」

さう云ふ本木は、如何にも嬉しさうに、如何にも好好爺に、見えた。——

本木の家を辭して歸る自動車の中で、今急に使手のなささうなピアノ、二階の廊下を通りかかりにふと日本間の床の間に見た今直ぐに使手のなささうな琴、それ等は、額と同じやうに裝飾の爲めか、操さんの爲めか、七歳になる一人子の房子が成長した時の爲めか、その何れにしても、老人が子孫のために杉の苗を植ゑる話を思はせるやうな——さういふ風に考へる事が、健作に云ひやうのない樂しさ、思はず頰に微笑の靨の浮ぶやうな樂しさ、を感じさせた。

以前は大阪へ行く時は始ど夜行の寢臺車に極めてゐたのだが、特急列車『燕』の味を覺えてから、今度で二度目の『燕』だ。何度も往復したので、東京大阪間の東海道沿線の風景は目をつぶつても空で知つてゐる位だつたから、八時間ぐらゐは、沿道の風景に少しも氣を取られる事なしに、讀書しつづける事は健作には何の苦痛もなかつた。彼は食堂車に入つても、自分の家で三度の食事をしながら讀書する習慣があつたので、讀書をつづけてゐた。と、突然、

「牧君、」と呼ぶ聲を案外近くで聞いたので、聲の方に顏を向けると、同業の先輩の松尾松風であつた。

「相變らず熱心ですね。何處へ。」

「大阪です。あなたは。」

國に急病人が出來てね。……羨しいな、大阪は。……京都大阪は僕の古戰場だからな。」

京都大阪は古戰場といふ言葉を聞くと、健作は二十三四年程前の或る冬の晩のことを思ひ出した。彼の伯父の家が大阪の南の方にあつた頃、彼は大阪に行くとその伯父の家で泊つた。或る晩、その晩の何時かの汽車で東京に歸る事になつて、その汽車の出る迄に少し時間があつたので、彼は心齋橋筋を南から北の方へ歩いた。その途中で、或る呉服屋の陳列窓をちよつと覗くと、その陳列窓には正面に鏡が張つてあつたので、品物を見ると一緒に自分の顏が見えた。と、彼は自分の顏の直ぐ隣に見覺のある顏を見出した、彼の見覺のある顏も彼の顏に見覺えあるらしく鏡に寫つてゐる彼の顏を眺めてゐる。

「やあ！」鏡の方を向いたまま兩方から叫び合ふと殆ど一緒に實物同士の顏を合した。この相手の顏の持主が松尾松風であつた。

「君、どこへ。」松尾は持前の少し疳走つた聲で聞いた。

「今晩、今晩の汽車で東京へ歸るんです。」「一汽車ぐらゐ後れてもいいでせう。ちよつと、ちよつと、僕の宿まで來ませんか。ぜひ話したい事があるんだ一寸でいいから……」

健作がもぢもぢして返事し兼ねてゐるうちに、松風はもう先きに立つて歩き出した。松風は、健作が竝んで歩き出すと、「その後はどうしてゐる」とか、「しばらくだつたね、」とか云ふ無駄な言葉は一切抜にして、

「君、大阪は實にいい所だね、……年の内に春は來にけり一白に、餅花開く餅搗きの、賑々はしや九軒町、嘉例の日取り吉田屋の、庭の竈は難波津の、歌の心よ井龍の、湯氣の大杵……」と云ひつづけた。

「それは何の文句ですか。」

「君は大阪の人で、而も文學を志望しながら、この文句の出所を知らないのは情ないですな……『夕霧阿波鳴渡』の一節ですよ。」松風は眞から情なさうに云つたが、直ぐ「君、難波新地はいい所ですね……」とづづけた。

氣がつくと、その邊の地理には松風より明るい健作は、いつの間にか戎橋を渡り、その『難波

新地』に近づきつつある事を知つた。戎橋を渡つて二三町行つたところの角を西に曲ると直ぐ北側の宿屋が松風の宿であつた。その町は大阪では『もしもし屋』の町とか『芝居裏』とか云つてゐる。『もしもし屋』といふのは、男或ひは男連が前を通りかかると、入口に立つたり腰かけたりしてゐる女が『もしもし』と呼ぶ家を云ふのである。もしもしと呼ぶ女はそれが專門で、呼ばれて格子造の家の座敷に通ると、町に住んでゐる私娼が藝妓の風をして現れるのである。松風はその『もしもし屋』の女に戀心を引かれてゐたのである。その頃の事を「昨夜の晩遲く東京から到着した爲替を毎時の郵便局で幾枚かの五圓紙幣に換へて懷にすると、少し行つてから下駄屋に入つて、崩し初めに足駄を買つた。私は乏しくなつてゐた懷中に新らしく幾許かの纏つた錢が入つて來ると、眞先に新らしい履物と足袋とを買ふ癖があつた。」と彼の或る小說に書いてゐる。――その晩、健作は松風に彼の宿の部屋に通されて坐ると一諸に「君、その女はね、背はそんなに高くないんですが、ちよつと見ると高く見える、それは姿がいいからなんだ、つまり、體の形が如何にもすらりとしてゐる上に、その、何だ、その、手足の指の形まで、すんなりとしてゐるんです。それから、目が何とも云へん……大きな黑目勝の目が……」といふ類の言葉を、少しの休なしに、一時間近く聞かされた。――その時のことを健作は思ひ出した。さうして、あの頃は、彼

自身は二十二歳、松風は三十四五歳だつたと回想した。さうして、昨日會つた本木と今日會つた松尾とが同年の五十九歳であることを妙な廻合だと思つた。

「どうです、大阪へちよつとお寄りになつては、」と健作が云ふと、

「どうして、どうして、一時も早く國へ歸つて、一時も早く東京へ歸らないと……」

「どうして、そんなにお急ぎになるんです。」

「どうして、そんなに急ぐかつて、」と松風は以ての外の質問と云はんばかりの劍幕で、「十二と十の娘を殘して來てるからです、」聞いてゐる健作が不審な顏をしてゐることなど頓着なしに、「この二人が、學校に通ふのに、電車を二つも乘換なければならない上に、あの新宿驛前の交番の前のところが、電車と自動車と、勤人と學校通ひとの波——つまり交通地獄ですからね、……あれぢやあ、子供が、いつ何時、どんな怪我をするか知れませんからね。……それで、近々、子供の學校に近い所に越す算段をしてゐるんです。ところが、一昨日、手頃な家があると知らしてくれた人がありましたので、昨日その家を見に行つたんですが、場所は學校に近くて申分ないんだが、電車とバスの便利が非常に惡いんです。これでは子供には都合がいいが、親父の僕には不便で仕方がない、といつたやうな譯なので、二の足を踏んでゐる所へ、國の方から、……實は、國の急

病人と云ふのは嘘で、國へ金策に行くんですよ。」これだけの事を、彼一流の辯舌と、彼一流のせつかちな調子で喋りつづけた。——

彼一流と云ふと、松風は一旦話し出すと、相手に口をきかせない、よし相手が話をしても彼はそれに耳をかさない、といふ性質があつた、その事で健作は次ぎのやうな事を思ひ出した。——

それは松風が京阪（殊に大阪の花柳街）の樣子を知らなかつた頃のことで、或る晩、健作が彼を難波新地から所謂南地五花街（難波新地もその一つ）を案内した事があつた。案内したと云つても、當時健作は二十一二歳の貧乏書生だつたので、松風の所謂『木理の目立つまでに洗ひ磨かれた千本格子の軒並』の一軒（茶屋）の中まで案内する事は出來なかつたが、さういふ軒並の町々を、素通りに、案内しただけであつたが、松風はどの町を通つても、「これはいい、これは氣に入つた、」と、彼一流の眞に迫つた物の言方で、讃美した。松風は當時三十四五歳であつた。それから健作は難波新地にあつた馴染の喫茶店（大阪に喫茶店が初めて二三軒できた中の一軒）に松風を案内した。その時、松風が暫く大阪に滯在するつもりだから誰か適當な人を紹介してほしいと健作に頼んだので、二三年前早稻田大學の英文科を卒業して波斯のオオマル・カイアムとか印度のラビンドウラナア・タゴオルとかを研究し現にオオマル・カイアムの四行詩ルバイヤット

を飜譯して上梓したことがある田毎二郎が大阪毎日新聞社の學藝部の記者をしてゐた事を健作は思ひ出ひ出したので、電話をかけて二郎をそのカツフエーに呼び出して松風に紹介した。彼等は二言三言初對面の挨拶を交すと、先づ年上の松風がいきなり彼の憧憬する大阪と彼の崇拜する近松門左衛門、伊原西鶴等の藝術に就いて語り出した。例へば、「近松の、『女殺油地獄』のやうな作品は、今日の最も進歩した自然主義的見地から見ても非常に勝れた藝術的作品で、あの中の與兵衛といふ人物の性格などは立派な寫實であると思ひます……」と松風が云ふ。その話が少しでも切れると、「ペルシヤの國を僕が好むのはあの七百メイタアから一千メイタアの高度を持つイラン高原の壯嚴と美しさです、それからあのザクロス山脈が西の方に傾いたところのメソポタミヤの河谷の秀麗な風景です、……」と二郎が云ふ。こんな風に、田毎二郎は、自分の話を始めると相手の話を無視する點で、松尾松風と、その性質傾向が一致した。若しこの一致がなかつたら、折角牧健作が彼等を引合はしても、初對面の挨拶を交してから、彼等は十分以内に激しい爭論を始めたであらう。併し彼等を引合はした健作は驚いた。松風が話をしてゐる間、二郎は、「うんうん、」と返事はしてゐたが、少しも相手の話を傾聽してゐないで、一寸でも相手の話が途切れると、自分自身の話を進行させる點で、松風とその傾向が餘り全く似てゐ過ぎたからである、言ひ換へると、彼

等は向前で對話をしてゐる恰好をしてゐるだけで互に壁に向つて話をしてゐるのと同じ效果しかなかつたからである。

「……若い婦人や子供が芝居茶屋の女中に送られて芝居小屋へ入つて行く時の足附は實にいいもんですね。それとは話は違ひますが、――否、さふいふ足附で、僕は、一昨日の晩、近松座に入つて行きました、それは逢ひたい女に逢ひに行く夜道のやうな氣持……」と結城の着物に新しい足袋を穿いた松風が云つて、ちよつと息をつくと、

「オオマル・カイアム、と日本では云ひますが、あれはオマアル・イブンハイヤアムと呼ぶのが本當で、僕の譯したルバイヤツト、あれはルバアイーと呼ぶのが本當ですが、あのルバアイー――四行詩が何故すぐれてゐるかと云ふと、彼は詩人であると共に、偉大な數學者であつたからです、……」と、ペルシヤどころか上海にも行つた事はないが、當時の大阪にも東京にも滅多にないスマアトな洋服を着た間子のやうに見える二郎が、松風に一時遮られた話の續きをする、といつた風であつた。

そこには、健作ばかりでなく、同じカツフエーにゐた近所の椅子にゐた者は、小さなカツフエーだつたので、悉く呆氣に取られた。その中に、健作の知人がゐて、

「君、東京の人て、みんなあんな物の云ひやうをするのか、あれで分るんか、」と後で健作に聞いたほどである。——

「引越に、そんなにお金が入るんですか。」國に金策に行く、と云ふ言葉を言葉どほりに取つて、こんな事を云つたのを、云つてから健作は後悔した。

「引越などに金がかかるもんですか。」松風は文字どほり苦笑して、「金策といふのは子供の爲めに掛けてある保險の掛金が溜まつたからですよ。……」

この時、初めて健作は松風の顏をしみじみ見た。この人にも二年振りぐらゐで會つたのであるが、同年の本木より一寸見は若く見えるが、髪の毛がめつきり薄くなり、折疊みの出來る老眼鏡をはづすと、皺の寄つた目の落ち凹んでゐるのが目立ち、鼻筋の通つた鼻は肉が痩せた爲めに險阻に見え、それに頰がげつそりこけてゐるので、深けて見えるといふより、何か痛々しく見えた。併し、嘗て何人か女を戀し、幾度かの戀に失意しながらも、彼の言葉を借りると、「一つの目的物に向つて全力の愛情を傾倒してゐる場合には、ちやうど鹿を遂ふ獵師の目に山が見えないといふ譬のとほり、その一つの目的よりほかのものは殆ど考へられなかつた」といふ程の人間味と情熱を持つた藝術家松尾松風が、老齢になつて、その「一つの目的物」を子の愛に向けるやうになつて

も、尙更「鹿を遂ふ獵師」の情熱と人間味とを合せ持つてゐる苦痛（西洋流に云ふと十字架を背負つてゐる）形が、この痛々しく見える風格に表れてゐるのかと思ふと、健作は彼自身「鹿を遂ふ獵師」の情熱を持たないが、心の中で頭を下げた。やがて松風の話の途切れたところで、

「いつ東京にお歸りになります、」と健作が平凡なことを聞くと、

「今夜、國の兄の家で泊つて、明日の夜行に乘るつもりですから、明後日歸ります。……ぢや、失敬、」と云ふなり松風は立上つた。立上ると一緒に小さな傳票の紙を浚ふやうに取つて勘定場の方へさつさと歩いて行つた。健作は、この頃外出の時は殆ど洋服にしてゐると云つた松風の、老人ながらスマアトな洋服姿の後姿を見送りながら、二十三四年前に、カツフエーで、この松尾松風と不思議な問答をした翌年、夭逝した田毎二郎のあの時のスマアトな洋服姿を思ひ出した。健作はあの時きり田毎二郎に會はなかつた。

牧健作を、午後五時丁度に、梅田驛に迎へる約束になつてゐた島木新吉は、大阪の中學校時代からの三十餘年來の友達であるが、彼等が遠來の友を停車場まで迎ひに行く事はこの時が初めてであつた。畫家である島木は美術學校を卒業すると直ぐ生地の大阪に歸つて、そのまま永住してゐ

る。牧は、先きに述べた如く、二十歳の時に上京して以來東京に永住してゐる。十三四年前に島木は洋行したが、牧にその通知を出さなかつた、必要がなかつたからである。外遊先から一通の便りも出さなかつた、繪の勉強に忙しかつたからである。彼等は非常によく似た性質傾向と全く反對の性質傾向とを持つてゐた。大阪人で知識階級に屬する人、殊に藝術家は殆どさうであるが、中でも島木は大阪人を好まなかつた。それには他の理由もあるが、彼の父が生粹の土佐人であり彼の母が生粹の大阪人である爲めの相剋からであると思はれる。意志が強く、苦痛を忍び、諦がよく、口の堅い點で、彼は土佐人の血を引いてゐた。

この時、島木がわざわざ梅田驛まで健作を迎ひに出たのは、彼の方から紀州の白濱へ行く氣はないかと健作に進めておきながら、彼の方に不慮の故障が起つてその爲めに二度も延びたからである。梅田驛の前の廣場から中の島の方に出る道を歩きながら、島木はその日から一週間程の間の日程を健作に相談する形で話した。さうして彼等が前に豫定してゐた白濱行を、後にしないで先きにしようといふことに極めた。「さういふ事にきまつたら、道頓堀でもぶらついて、君がよかつたら、今晩は、僕の家に泊つたらどうや、」と島木が云ふままに、やがて彼等は通りかかつた朝日ビルの一階の千疋屋で一服した。そこで、簡單な物を食ひながら、「道頓堀へ行く前に、ここを

出たら、君が去年とまつた堂島のあそこへ、部屋があるか、ちよつと見て見たらどう?」「ああ、さうしよう、」といふ事に話が極まつて、彼等が千疋屋を出ようとすると、朝日ビルの入口で島木に挨拶をした男があつた。「あ、さう、……一寸これから牧君の宿を見に……いや、今晩、まだ何處に泊るか極まつてエしまへん、……え、明日白濱へ、……ぢや、歸つてから又……さよなら、」島木はそんな話を濟ますと、傍に待つてゐた健作に「ぢや、行こか?」と促して歩き出した。道道、「君に紹介してほしいと云ふんやがな。……いや、僕も一週間ほど前に初めて知つたんや、『大阪』といふ週刊の小さい雜誌を出してるといふ話やが、ああいふのん大阪に多うて困るわ。宿屋を見たら、歸りにもう一ぺん千疋屋へ寄つてくれ云ひよつたけど、友田君の話にあの男と餘り附合はない方がええ云ふ話やから、宿屋で部屋だけ見たら眞直ぐに道頓堀まで走ろ、」と島木が云つた。

友田といふのは、彼等の中學の同窓で、京都の三高の獨法科に在學中父の死に逢つて中途退學をした、長男だつたので、それ以來ずつと亡父の家を繼いでゐるのであるが、文學とか美術とかが好きで、可なりの資産家であるが、さういふ種類の人にあり勝な嫌味が少しもないので、同じ大阪に住んでゐる島木は、月に一度ぐらゐ會ふ程度であるが、三十餘年來の友人としてわりに信頼して附合つてゐるのであつた。

又、健作は、離れて友田を考へると、いつでも次ぎのやうな事を思ひ出した。――やはり二十三四年前の事、東京の學校に籍を置きながら大阪に同人雜誌の資本を出してやるといふ友人があつて、第一號だけ出したのであるが、それが生憎發賣禁止になり、そんな雜誌に金を出すのは嫌だと資本主が云つたので、それを說得するために、彼は大阪に出かけ、梅田驛の近くの素人下宿で暮したことがあつた。その頃、友田は三高の法科の學生であつたが、彼は、健作とその連中のやうな、文科の學生でありながら、貧と道樂の爲めに藏書が本箱に少しも落着いてゐない類の學生と違つて、却つて、一般の文科の學生より文學書を多く讀み、多く藏してゐた。そればかりでなく、彼は、獨法に籍を置きながら、佛蘭西語と英語とが出來た、つまり三國の言葉に通じてゐた。當時健作は、旅先きではあり退屈と貧乏の極の境涯にゐたので、夕方になると、しばしば友田を訪問した。それは當時大阪に出來はじめた喫茶店の馳走になり旁々本を借りる爲めであつた。「君、何々の本を持つてゐるか、持つてゐたら貸してくれないか、」と云ふと、彼は唯の一度も嫌な顏をした事がなかつた。そればかりか、何とも云へぬ嫌味のない而して纖細な微笑をその靑白い顏の頰に浮かべながら、「ああ、」と、これも纖細そのもののやうな聲で答へて立上るのが常であつた。不思議な事に、彼の家が舊家であつた爲めか、いつ行つても書齋らしい部屋に通された事が

なかつた。「ああ、」と答へて立上ると、彼は押入の傍に進んで行つて、その襖を明けた。その押入の中には二本の簞笥が入つてゐた。彼はその簞笥の第何番目かの引出を明けて、健作が借用を申込んだ本を一冊拔出すと同時に引出を締め、さうして拔出した本を坐つてゐる健作の膝の前に置いた。その部屋には押入が二つあつたから四つの藏書入りの簞笥があつたのであらう。健作が驚いたのは、彼が借用を申込む本の名を云ふと、友田は一分の半分ぐらゐの間首を傾けると直ぐ立上つた、さうすると、その本がどの押入の何方側の第何番目の引出に入つてゐる事が直ぐ分るらしく、彼は決して簞笥とその引出を間違つたことがない事であつた。――

健作は、この簞笥の本を借りた頃から二十年餘り友田に會ふ機會がなかつたが、彼の名を聞くと、去年六年振りで大阪に行つた時、島木と三人でアラスカで晝飯を共にした時のことを思ひ出して、ちよつと會つて見たくなつた。その事を島木に云ふと、素捷い島木は、「ふん、聞いてみよ、」と云つたかと思ふと、小柄な彼の體は道端の自動電話の小屋の中に入つて受話器を耳に當てゐた。やがて出て來た返事に、「八時頃まで手の放せない用事がある。八時頃にゐる所を電話で知らしてくれ、是非お目にかかりたいから、」と云ふのである。

「そいつは少し無茶だな、此方が何處かの家にゐるものならそれでもいいが、八時頃といふ時間

で縛られる感じが重いな。向うは八時頃まで用事があるから八時頃は氣にならないだらうが、此方がかなはんな、」と健作が云ふと、

「うむ、さう云ふと、ちよつと無茶やな、」と島木は應じた。その時、健作が突然立ち止まつて、右側の活動寫眞館の方を見ながら、

「『にんじん』をやつてる。君、見た？」「いや、ええ寫眞やさうやな。」「時間はどうだらう、何時から何時までか知ら？」などと云ひながら、彼等は、寫眞館の正面の階段の左手に、『にんじん』の登場人物や場面などが十枚ほど見本兼看板に出てゐるのを發見して、その方に近づいて行つた。

「これが主役らしいね、芥川龍之介を子供にしたやうな顏だね。」

「なる程……フランスの寫眞だけに場面の取り方が印象畫風だね。面白さうやな。」

いつの間にか、町は暗くなり、電燈がついてゐた。併し、松竹座の邊は、あの邊だけ、あの町筋で、どういふ譯か、變に暗く見えた。その時、その暗がりの中から、一人の洋服を着た男が島木の傍に歩み寄つて、

「失禮ですが、B協會の島木先生で、……？」とささやくやうに云つた。

「ふ、ふ？　え？　さうです、……」と、暗がりの中なので、その男の人相は健作の方からはつ

きり見えなかつたが、島木が、面食つたやうに、迷惑さうにしてゐる形が、呼びかけた男は大男の方で、呼びかけられた島木は小男の方であつたから、一層氣の毒に見えたが、牧は成るべくその男に話しかけられたくなかつたので、もう一通り見てしまつた『にんじん』の見本寫眞を見てゐる振をしてゐると、島木を摑へた男が矢張りささやくやうな聲で「牧先生……？」といふのが聞えた。見つかつたなと思ふと殆ど同時に、島木から離れた男が牧の方に近づいて來る氣色がして

「牧先生ですか、私はかういふ者で、……」と一枚の名刺を出して、「今、島木先生にもお願ひしたのですが、今度『コント』といふ雜誌を——可なり大きなものですが、——發行することになりました。」と云つてから、東京在住の、ダンス好きの高名な老作家を始め、その他、中堅新進の諸作家から畫家たち、大阪在住の作家畫家たちの名を擧げて、既にそれ等の人たちにお賴みもし又もう頂戴したのもある、と述べた。その中に、半年程前まで堺の或る場所に思想的犯罪で一年半ほど隱れてゐて今阪神アパアトにゐる前プロレタリア作家竹内義人に先達て會つた、その竹内の友人で、これも左翼的作家である、柳津秀雄にもときどき會ふといふ、言葉があつた。竹内は健作の二十二三年前からの友人であり、柳津も健作は會つた事はないが嫌ひな作家ではなかつたので、この二人を知つてゐるといふ事が健作に幾らかこの男を警戒する氣持を解く材料になつた。健作

の顏附に少し隙の出來たのを見つけると直ぐ、「先生も、どうか隨筆を一篇、この二十五六日頃までにいたゞきたいのですが、……」とその男は切り出した。

なるほど、名刺を見ると、『コント』主刊小森虹文」とあり、「發行所　阪神國道、尼崎ホテル第百〇三號」、大阪支部　此花區何某町、何某アパアト」とあり、兩方とも電話番號まで附いてゐた。が併しこの名刺には何か空虛なものがあるやうに牧には感じられた。

「どうぞ、お願ひします。二十五六日までにお願します。」

「何が……」

「出來たら……」

口々にかう云つて、牧と島木が小森に別れて歩き出さうとすると、突然、虹文が片手を上げて、

「先生方、『にんじん』ごらんになりたいですか、」と云つた。

「さあ？」

「いま何時だらう。」

彼等は顏を見合した。『にんじん』を見る時間と友田に會ふ時間を期せずして考へ樣としたのだ。

「もう始まつてるか知ら？」と、東京でそれを見そこなつた牧が島木と小森の顏を見くらべながら云ふと、小森がいきなり、

「ちよつとお待ち下さい、」と云ひ殘して、松竹座の石段を勢よく駈け上つて行つた。直ぐ彼は戻つて來て、

「もう直ぐ始まるさうです、御案内しませう。」

「何時にしまひます？」

「九時半ぐらゐです。」

「中に電話ありますか。」

「あります。さあ、御案内しませう、」と云つて小森は歩き出した。

「友田君に中から電話をかけよう、」と島木が云つたので、牧も決心がついて島木と竝んで石段を上つた。入つたところの小さなホオルの腰掛に小森は彼等を案内しておいて、彼は、案内所の女の傍に行つて彼等のことを賴み、後から尋ねて來る人（友田）のことも賴み、島木を自動電話のある所へ案内すると、

「では、これで失禮します、」と云ひ捨てて、そこそこに暗い往來の方へ消えてしまつた。

そこへ島木が戻つて來て、「友田君、八時から八時半までに來る云うてた、」と傳へた。

やがて『にんじん』の始まる合圖のベルが鳴つた。座席に着いてから、

「變な奴だね、」と健作が云ふと、

「おもしろい奴ちやなア、」と島木が云つた。——

友田は八時半頃に來た。松竹座を出たのは十時近かつたので、夕方千疋屋で簡單な物しか食べてゐなかつた島木と牧は可なり空腹を感じた。「なるべく近い所で早く食ひたいな、」と牧が云ふと、「そんなら、丸萬がええやろ、」と友田が云つた。この晩の友田は、何か屈託があつたらしく、さういふ事を滅多に色に出さない彼としては珍しく沈み勝だつたので、牧は、彼を呼び出した事を、彼の爲めに氣の毒な氣がすると共に、後悔したが、ただ何かの話のついでに小森虹文の名が出たとき、「あの人は……あの人は……」と云つた言葉の調子が、牧が二十三四年前に簞笥の引出から取出す本を借りに行つた時分の纖細そのもののやうな友田の聲を髣髴させるものがあつたので、牧には懷しかつた。が、今は牧よりは親しくはしてゐるが、牧のやうな簞笥の本の經驗を持たない島木は、

「ふーむ！（島木獨得の感嘆詞）友田君は默つてて、世間を知らんやうに見えてゐて、僕等の知らん、いろいろの人の事を知つてるな。何處かにえらいところがあるんやなア。ふーむ、」と唸る

やうに云つた。

「僕のは、耳學問といふんだらう、」と友田は持前の靜かな聲で云つた。——

併し、牧には「あの人は……あの人は……」と云つた友田の言葉と聲とが何か印象に殘つた。

その晩、天下茶屋の山手にある島木の家に彼等が歸つたのは十二時半をまはつてゐた。牧は宛行はれた二階の六疊の部屋で床に就くと直ぐ寢た。彼が島木の家に來たのはこれが二度目で、二階に上つたのはこれが初めてであつた。島木は洋畫家であるが、アトリエの外は、どの部屋にも油繪の額はかかつてゐない。階下の座敷の床の間に、彼と同じ頃の美術學校の日本畫科出の無名の畫家が彼の結婚祝に贈つた日本畫の掛物がかかつてゐる。この繪は、所謂有名な畫家の繪のやうな是見よがしの所がなく、所謂展覽會向きのやうな所が微塵もない、さういふ好さがあつた。彼がこの家を新築して越して來たのは四五年前であるが、恐らく十五六年前彼が結婚してから構へたどの家の座敷の床の間にもこの繪は掛つてゐたに違ひない。島木には、この床の間の繪の場合ばかりでなく、如何なる事物にも、かういふ見識のやうなものがあつた。——

仰向きになつて寢てゐる牧の頭の方は、南向きで庭を見晴す窓になつてゐて、一面に磨硝子の

障子が嵌まつてゐた。そこに雨戸がなかつたので、白地のカアテンが引かれてゐた。左側は襖で隣りの部屋を仕切つてゐた。右側は全部壁で壁間に島木の尊敬する先進坂田敏太郎の素描が掛けられてあつた。それから、彼の足元の方に半間の床の間があつた。そこに、牧は驚くべきものを見た。その床の間にかかつてゐた掛物である。――それは、二十二三年前、島木が美術學校の三四年の頃、或る人が斡旋して、彼のために、彼の繪具代その他のために、半折の俳畫會が催されたことがあつた。牧は、その或る人から、島木に内緒で、その俳畫を一枚見せてもらつた事があつた。『さみだれの降り殘してや光堂』といふ芭蕉の俳句を半折の中央上寄りに書き、その俳畫の意味を繪に描いたものである。――その俳畫の掛物がその床の間にかかつてゐたことだ。が、その足元の方の床の間も掛物も、頭の方の硝子障子を蔽うたカアテンも、寢てゐる牧には見えなかつたが、左側の襖の模樣と右側の壁間の額とは、ときどき頭の向きを變へる毎に、カヴア代りに風呂敷で包まれてゐる電燈の光線で見ることが出來た。――

床に入つた時は、至つて寢付のよい方だつたので、それに其の日は長距離の汽車と活動寫眞と散歩との爲めに疲れてゐたので、枕に頭をつけるのと寢入るのと殆ど一緒であつた。それほど寢入端は熟睡したが、寢入つてから何十分たつたか何時間たつたか覺えてゐないが、その頭の向き

を右左に變へた頃のことだ、左側の襖の向ふ(隣室)の方から寢言ともつかず、寢言にしては節があるやうだし……と思つて耳を澄ますと、夜が更けて邊が森閑としてゐたので、やつとその本體が分つた。それは十四五年前牧が信州諏訪に二月ほど滯在してゐたとき夜になると近くの宿屋から聞えて來た木曾節と伊那節に似てゐた。が、同じ木曾節と伊那節のやうであつたが、三味線の伴奏がないので、彼がむかし聞いたのとは節が違ふかと思ふ程ちがつてゐた。が、耳を澄ますと、確かに木曾節が歌はれたり伊那節が歌はれたりしてゐた。「伊那の平に葺なら二本、思ひ切るよし切らぬよし」と聞える伊那節は、或る年の一月、信州大町の驛の前を、手綱の先を持つた手を腕組して一間ほど後に空の馬を從へ、歩きながら歌つてゐた馬子の口から聞いた伊那節と似てゐた。が、今、眞夜中に、隣室から聞えて來る木曾節と伊那節は、藝妓は無論、馬子にも似ない、一種獨得のものであつた。その歌の聲を、後日、その家の主人である島木は「歌ふが如く、吸込むが如く、聞ゆるが如く、聞えざるが如きものであるが、歌手の胸中には萬感交々に起つてゐるに違ひない、」と語つたが、これは流石その歌手を一月でも二月でも客にしてゐる人の言葉であると、牧は感心した。併し、それは、歌手の正體を知つてからの事で、知らないうちは、殊に、正體を知らないうちは、ほんの一寸の間、少し氣味が惡かつた。その歌手は隣室で寢てゐるに

違ひないが、寢てゐながら、どうして「男なアー、ナカノリサン、をとこ達なら、ナンジヤラホイ、」といふやうな唄を、こんな夜更に、而も客らしい、何のために歌ふのであらう？　が、そんな事を考へたり、その唄に聞きいつたり、してゐるうちに、牧はうとうと眠つてしまつた。

それから、何十分か何時間か立つた。牧が、慣れない、途中で曲る、階段を下りて、階下の便所の戸を明けると、見慣れない人間が用を足してゐた。「や、失敬、」と彼はあわてて叫んで、戸を締めて待つた。ところが、中から出て來た人間と牧とが顔を合すと、今度は、双方から、「や、」「や、」と聲をかけた。相手は島木と同じB協會の會員である洋畫家の山川一新であつた。山川も、牧であることを確めると、「や、これは、」と、持前の聲を出す、といふより、聲を呑み込むと一緒に息を吸ひ込むやうな聲で云つた。山川は、繪は可なり奔放なところがある反對に、謙遜、といふより、腰の低過ぎる人であつた。この人の顔を見ると、牧は「あ、この人だつたか、あの唄は、」と直ぐ氣がついた。牧が「どうぞ、」と階段の方に手を出しながら云ふと、「ひゆう、」といふやうに聞える聲で答へて、一新は階段の上口の方へ歩いて行つた。

牧が山川に會ふのはこれが二度目であつた。最初は去年の秋島木が上京した時で、或る日の夕方、島木が牧を訪ねて來たとき、牧が島木に晩餐をさそつた。さうして、二人で出かけて暫く行

つた所で、「四時に會ふ約束をしてある友達があるんやが、」と島木が云つた、「山川一新や。」「いま何處にゐるんだ？」「本郷のC研究所や、ちよつと電話をかけとかう、」と島木が云つたので、牧は「ぢや、この喫茶店からかけたら、」と通りがかりの喫茶店を指さした。その喫茶店で電話をかけてゐた島木が、電話の口を抑へて牧の方に向ひ、「君と一緒やと云ふと、會ひたいと云うてるがどうする？」と云つた。「會はう、」と牧が云つた。神保町の文房堂で待合すことになつた。それから、文房堂で落合つて、タクシで銀座に出て、坐る所で晩餐を共にした。島木も牧も一滴もいけない方だつたが、山川は初めはビイルでいいと遠慮してゐたが、その空瓶が五六本机の上に竝ぶと日本酒をやり出した。酒を飲み過ぎた山川は、次第に陽氣になり、食事がすむと、辭退する他の二人をタクシに乘せて、彼の馴染の或る土地の待合に案内した。その時、牧は山川一新の木曾節と伊那節を初めてを聞いたのである。牧が島木の家の便所の前で隣室の客に會つた時、「あ、この人だつたか、あの唄は、」と直ぐ氣がついたのはさういふ謂があつたのである。

牧健作が、それまで名前だけ聞いてゐた山川一新に興味を持つやうになつたのは、その初對面の時からであつた。それ以來、これまで島木の口癖である、「面白い奴ちや」といふところの、山川一新の話を、牧は好んで聞くやうになつた。——この二三年來、山川は大阪に來ると、長い

時は二三ヶ月、短い時でも一月ぐらゐ、島木の家を宿屋代りにしてゐるが、その代り、六七年前頃は毎年秋の美術期になると上京する例になつてゐる島木は山川の家を宿屋代りにした。その頃の話で、當時ひどい胃病にかかつてゐた島木は食後の藥を飲むやうな狀態だつたので、朝の食事は牛乳とパンに極めてゐた。ところが、二度も洋行したことのある山川の家にガラスのコップが一個もなかつたので、蕎麥屋の丼(どんぶり)の返し忘れたので牛乳を飲んだものだ。その頃の事で、島木の頭に最も深く印象に殘つてゐるのは、島木が蕎麥の丼に入れた牛乳にパンを浸しながら朝の食事をしてゐる傍に、同じ食卓を取卷くやうに四五人の子供が朝飯を食つてゐる。その食事してゐる子供等の顏を、山川は苦い顏とも微笑む顏とも何とも云ひやうのない顏をして眺めてゐる。子供等が混雜して食事をしてゐる有樣を眺めてゐる山川の目は、畫家でなく小說家のやうに見える、それでゐて、小說家には見られない恬淡な風格を持つてゐる。島木は、山川との交際はそんなに古くはないが、かういふ山川を見たのは初めてであつた。島木は、山川がどんな投遣(なげやり)な繪を描いても、どんなに酒色に溺れてゐても、それ等の事に就いて他人が彼を非難すると、山川を辯護する氣持になつたのは、この朝飯の時以來であつた。さて、一新が子供等の朝飯を食つてゐる有樣を恬淡とした風格を以て眺めてゐたとき、突然、久留米絣の筒袖の着物を膝から下が見える恰好

に着た子供が、帶に刀のつもりで二尺ざしを挾んで入つて來て、父なる山川の前で劍劇の形をして見せた。と、「何だ、その劍舞士のやうな……」と、彼は實に苦い顏をして。さうして、「こんなもん、彼方(もつち)へやらんか！」と細君に向つても顰面(しかめつら)をした。尤も、山川はこんなはつきりした言葉で云つたのではなく、例の息を吸ひ込むやうな聲でぼそぼそ云つたのである。この時の山川をときどき思ひ出すほど、島木は人間性の分り過ぎるほど分る人であつた。——

さて、牧は、なるべく音を立てないやうに階段を上り、自分の部屋の入口の襖もそつと明け締めするやうにして、部屋の中に入つた。彼は、床に入つてからも、島木が山川一新が客に來てゐるのを一言も云はなかつたことは、如何にも島木らしいと思へばそれ迄であるが、これが島木でなければ、實にをかしな事である、ともは考へた。

「牧さん、牧さん、……」その時、隣室からあの息を吸ひ込むやうな聲が聞えて來たのであつた。

「……誠に失禮ですが、ちよつと聞いてもらひたい事がありますので、もしお目覺めでしたら、僕の部屋へお話にいらつしやいませんか。お互ひに寢間着ですから、御遠慮なく、……表からお廻りにならなくても、……あなたがお宜しかつたら、境の襖をお明け下さい、」と云つた。

牧は、氣輕と反對の性質であつたが、この時は、どういふ譯か、若干の好奇心も手傳つてか、

隣室を訪問するつもりになつて、

「では、失禮します、」と床の中から答へた。

「それは、ありがたう、」と云ふ聲と共に向側から襖が明けられた。

牧の部屋は彼が使つてゐる蒲團を片附けてしまへば伽籃洞であつたが、山川の宛行(あてがは)れてゐる部屋は、窓際に學習用の卓子と椅子、その近所に椅子より背の低い本棚が三箇、その他、女學生の書齋としては最も簡單なものであつた。この部屋は、四疊半だつたので、山川の寢床が敷かれると、部屋の中に通行の道がなくなる程であつた。山川はその蒲團の上に胡坐(あぐら)をかいてゐた。枕元に小さな盆が置いてあつて、その上に灰皿と銚子が三本と盃が一箇載つてゐた。一本の銚子は横倒しになつてゐた。一新は可なり銘酊氣味であつた。

「先程は失禮しました。こんな所をお見せして誠に面目ございません。あなたに聞いてもらひたい、ことがございまして、ええ、フー、と申すのは、生活難……僕一人でありますと、生活難なぞ知らずに濟むんですが、子供が五人居ります。……ウ、フー、ときどき省線電車に乘つて行く子供にやる電車賃がない事があります。初めのうちは、細君(ワイフ)が近所で都合してもらつて、どうにかかうにか、まあ、ウフ、やつてゐたらしいですが、今では何處でも貸してくれないさうです。

これは、エヘ、貸してくれないのが當然でせう。……電車賃がなければ、その日は學校を休ましてしまひます。電車賃がなくて學校を休んでゐる子供たちが、しよんぼりしてゐるのを見ると……エヘ、フー、子供を殺して夫婦心中する馬鹿者の氣持が分ります。……僕は、困ると、かうして旅から旅をして、ど、どうやら日をつぶすことが出來ますが、……止しましやう、止しましやう。こんな愚痴は……」そこまで云ふと、山川は、急に、何か急病が起つたやうに、横倒しに轉がつてしまつた。轉がると一緒に組んでゐた胡坐(あぐら)が自然に解(ほぐ)れ、轉がると一緒に、枕が頭を吸ふやうにうまく頭が枕に乘つた。そのまま、山川一新は眠つてしまつた。

牧は境の襖をそつと明け締めして自分の部屋に戻つた。——

その翌朝、健作はアトリエの中で島木と顔を合はした時、前の晩の話をすると、

「夫婦心中の話か、醉ふと、この頃、夫婦心中の話ばかりしよるさうやけど、心中するほど細君と氣が合うてへんけどなア、」と島木が云つた。

「いつ頃から來てるの?」

「先月の初めやから、もう一月(つき)からになるな。しかし、朝遲いし、……朝やない、起きるのは大抵晝過ぎや。……それから、顔を洗ふのンが長いし、やつと顔を洗(あら)ても、今度は飯が長い、晝か

らでも酒飲みよるよつてなア。……だから、僕ンとこの飯は、子供が一番先き、その次ぎに僕、それから山川や。だから、女中は一日ぢゆう、飯の用意してよる。……」

「あの方は？」

「行くね。行くと、二日も三日も歸つて來よれん。一週間ぐらゐ立つて歸つて來よると、玄關から、片手を拜むやうな恰好に額に當てよつて、奥さん、すまん、奥さん、ひゆッ、ひゆッ、と云ふやうな事いひよつて、そのまま、するするーッと二階に上つてしまひよる。」

「かなはないね。それぢや、繪を描くことなど滅多にないだらうね。」

「まあ、さうやな。……しかし、突然、今日は一つ描く、云ひ出しよつたら、大騷動や、鉢卷をしよつてな。……去年の秋や、突然、内のやつを描く、云ひ出しよつてな、……云ひ出すと、そら、繪具、そら、筆、と、女中まで轉手古舞や。それに、モデルになつた者は災難や、ちよつと此方を向いた、ちよつと右の方を向いた、といふ風やから、内のやつ困つてよつた。……しかし、描いたん見ると、顔なぞよう似てるし、なかなか旨いわ。……去年の六人會に出たんやから、六人會の事務所にある筈や、……持つて來る、持つて來る云うて、なかなか持つて來よれへん。」

その時、島木の娘が朝飯の出來た事を知らしに來た。島木の娘の美穗子は十七歳になる。牧が

美穗子を見たのは島木の家が大阪市内にあつた時分で、美穗子がまだ幼稚園にも行かなかつた頃であつたから、十三四年振りで會つた譯である。彼女は東京で生れた。島木は、凡そ迷信などいふものと緣のないやうな人であるが、彼女が生れた當時流行してゐた姓名判斷といふものに興味を持つて、彼は生れた子のために姓名判斷學から十ぐらゐの名を擇り出した。その結果二つだけ殘つた、その二つの内どちらがいいかと云ふ事を、ふとした事から、その選を、牧健作と他の一人に依賴した。それに當選した名が美穗子である。だから、西洋流の名附親といふ言葉を捩つて云ふと、牧は美穗子の名附親になる譯であつた。が、十三四年見ない美穗子に突然道で逢つても、名附親である牧には分らなかつたに違ひない。それほど美穗子は名の如く美しく且つ成長した。さうして父の新吉よりずつと背が高かつた。背の高いのは美穗子は母の山紀子に似たのであらう。牧がその山紀子夫人に會はない事も矢張り十三四年ぐらゐであらう。

その十三四年振りで會つた山紀子夫人と美穗子孃とが話をしてゐる所を見ると、友達同士が話してゐるやうに見えた。そこに、男としては小柄である父の新吉が交ると、恰も兄と妹とその友達が集まつてゐるやうに見えた。

牧は、この三人家族の家庭を見た時、こんな朗らかな夫婦親子といふものがあるだらうか、こ

れは今の世に稀な現象である、と心から感心した。夫と妻と、父と娘と、母と娘とが、友達のやうに暮してゐる家庭、これは造らうと思つて造られるものでない、自然に成つたものだ、とも牧は考へた。——

島木新吉と牧健作が、紀州白濱に向つて、島木の家を立つたのは晝過ぎであつたが、山川一新はまだ寢てゐた。

彼等が、紀州白濱に三四日滯在して、大阪に歸つて來たのは夕方であつたが、道頓堀を散歩してゐるといつの間にか十時過ぎたので、牧はその晩また島木の家で泊ることにした。島木の家に着いたのは十一時前であつた。牧が、由紀子夫人に、いきなり、「山川君は、」と聞くと、

「白濱へお立ちになつた夕方お出かけになつたままだす、」と彼女は答へてから、「あ、昨日、竹内さんからお電話がかかりまして、お歸りになりましたら、小森さんの所へお電話でお知らせ下さいますように、云ふお言附(ことづけ)だした。」

その翌日の午後、牧は、難波驛で島木と別れて、着いた日に島木と見に行つた堂島の宿屋に落

着いた。さうして、三時頃、思ひ出して、先づ小森に電話をかけたが、發行所にも支部にもゐなかつたので、あきらめて町に出ると、知合の新聞記者に會つたので、竹内の住所を聞くと直ぐ分つた。そこで、竹内に電話をかけて、朝日ビルの一階の千疋屋で待合した。牧は十年ぶりで竹内に會つた。——牧が初めて竹内を知つたのは二十四五年前で、當時竹内は十七八歳の文字どほりの美少年であつた。それは佛蘭西象徴派の詩人の詩を讀むことが流行した頃であつた。佛蘭西ばかりでなく十九世記の諸詩人の研究の流行した頃であつた。その頃、牧も竹内もボオドレエルやヴエルレエヌ等の詩を耽讀した。彼等（彼等の仲間）は十七八歳から二十三四歳であつた。竹内を牧に紹介したのは、竹内の同郷の坂本といふ詩人で、その頃、牧は坂本とヴエルレエヌの詩の飜譯を企てたことがあつた。ヴエルレエヌの詩集の序文を、フランソア・コツペエが書いてゐる。その序文に、ヴエルレエヌとコツペエとは少年の頃からの友達で、二人は一つの本の頁の上に二つの額を合せて讀んだ、といふ一節がある。牧と坂本は密かにヴエルレエヌとコツペエを氣取つたものであつた。——それから二十四五年が經過した。牧と竹内は、その二十四五年の間に、同じ文學の道ではあるが、別々の嶮しい道を通つた、或る時は一諸に嶮しい道も通つたが。——その時の竹内の感想を惜りて云ふと、「十年間を飛び越し、昨日まで毎日會つてゐた者のや

うな挨拶」を彼等は交した。――その通りで、彼等は時とすると文學上の意見の相違で爭ふやうな立場に立つた事もある。併し、時が來ると文學は爭ふ者を握手させるものである。――

その時、竹内が

「今、柳津が住吉にゐます。會つて見ませんか?」と云つた。柳津は、先きに述べたごとく、昔の竹内の同志の一人である。

「柳津、といふと、……あ、さうだ。君も小森虹文といふ男知つてましたね?、」と牧が云ふと、

「知つてゐます。一昨日やつて來て、あんたに會つたことや、島木さんと一緒に白濱へいらしつた事なども話してゐました……」

「君はあの男とどうして知合になつたの。……僕は、島木と二人で松竹座の前に立つて、『にんじん』の宣傳寫眞を見てゐると、突然、あの男が現はれて、『コント』といふ雜誌の話から、君や柳津君を知つてゐるなど云ふので……」

「あんたも『にんじん』ですか、」竹内は相好を崩して、「僕も、その『にんじん』なんですよ。……」

「ぢやあ、柳津君も『にんじん』……?」

「いや、柳津君はずつと前かららしいですから……」

彼等の間にこんな問答があつてから、「柳津君に會ふにしても、ここぢや大變だから、道頓堀に近い方がいい、」と相談が極まつたので、「では、心齋橋邊まで、」といふことなつて、千疋屋を出た所で、タクシを拾つた。タクシの中で、竹内は、「一年半程あそこにゐた間に隨分マイナスになつた上に、今は、親父夫婦、彼、細君、子、次弟、その子、末弟、女中、合計九人の家族を扶養しなければならぬのは、實に辛いですよ、」と云つた。――

竹内の案内で、丸善の傍のモカといふ喫茶店に入つた。竹内が電話をかけに行くとき、牧は竹内を呼び止めて、「住吉なら南海線の難波驛に下りるんだらう。それなら時間を合せて、柳津君に、難波から一本道だから、南から北へ歩いてもらつて、僕たちはここを出て、南へ行けばしぜん出會ふだらう。電話の時、よく時間を示し合したら?」と云ふと、竹内は、口の中で「ゐるかしら?」と獨言ちながら電話室の方へ歩いて行つた。やがて、電話室から歸つて來た竹内の返事に、「來る」といふことだつたので、時間を計つて、彼等は心齋橋を渡つて南の方へ進んで行つた。まだ雜踏する時間に少し早かつたが、もう可なり雜踏してゐた。五月の夕方だつたから、空はまだ明るかつた。心齋橋を渡つて暫く行つた邊で、狹い人込の道を、一人の背の高い黑服を着た無帽の男が、微笑を浮べながら、竹内の方に近づいて來た。往來の人々の邪魔にならない所

の、彼等の傍を離れない位置に、牧は立ち止つて待つた。竹内と話してゐる男の傍にも連らしい小柄の洋裝の女が立つて彼等の話のすむのを待つてゐた。その男と竹内との會話の中に、一度か二度、「牧先生」といふ言葉が出たのを牧は聞いた。さう思ふと、牧は、その男は、先程、竹内に目禮すると一緒に、自分にも目禮したので、目禮を返したやうな氣がした。

やがて、彼等の話がすんで、その男は、竹内と北と南に別れる時、「では、歸りにこの道で、」と竹内に云ふと一緒に、また牧の方に目禮して、連の女と竝んで北の方へ、人込の中に姿を隱した。並よりは背が高い男だつた。此方の二人は南の方へ二三歩あるき出した。

「あれ、誰？」と牧が聞くと、

「あれが小森虹文ですよ、」と竹内が微笑を浮べながら云つた。

「あれが小森虹文？」牧は、夕方の松竹座の暗がりで見たのと、松竹座の中でちらと見たのと二度だけしか顏を見てゐなかつたので、小森虹文の顏を殆ど忘れてしまつてゐたのであつた。

「あれは變な男ですね、」と竹内は歩きながら云つた、「あんた、小林何子といふのを知つてゐますか？」

「知らない。」

「ビクタアの專屬の歌手で、今、千日前の歌舞伎座に、松竹少女歌劇團と一緒に來てゐるとかで、『椿姫』の女主人公の、マルグリットをやつてゐるんださうです。……面白いのは、小森が、あの女を、カッフエー・ビイナスの主人に賴まれて、これから連れて行くのださうで、用事は直ぐ濟むから、あなた方、柳津さんにお會ひになつたら、直ぐ引返してこの通を、南から北に向つて歩いて來て下さいませんか、と云ふんですよ、」と云つて、竹内は體を搖すつて笑つた。

そんな話をしながら、心齋橋筋を南の方へ歩いて行くと、西側の、とある商店の飾窓の窓ガラスの上の方半分に、何某音頭の歌詞が可なり大きな字で印刷され、その歌詞の中央上の方に、今さき彼等が見た、小森に連れられてゐた女の寫眞が出てゐて、その傍に、ビクタア專屬歌手、小林何子女史と記されてある紙が張られてあるのを、先づ健作が發見してそれを竹内に知らした。

併し、彼等は、その宣傳廣告の肖像寫眞を、歩きながら、一瞥しただけで、「あれで見ると、あの女は本物らしいな、」「さうですね、それにしても、小森といふ男は變な人物ですね、」などといふ言葉を交した切りで、それまで話題にしてゐた話を切れ切れに交しながら、次第に散歩の人足の繁くなり出した心齋橋筋を、人波の中を縫ふやうに、急ぎ足で進んだ。

戎橋を渡つて二町ほど行つたところで、竹内は「ああ、」と口の中で叫んで、片手を上げた。ち

やうど南海電車の準急行の着いた時らしく、南の方から寄せて來る人々の方が多かつた。その人波の中から、住吉に養生に行つてゐる、病後の人とは思へないほど血色の良い、逞しい骨格をした柳津の笑顔が近づいて來た。それは、痩型の小柄の青ざめた顔をした竹内が、刑餘の人とは思へない朗らかな感じを與へたのと、一種の好對照の印象を牧に與へた。牧と柳津は初對面であつたが、彼等が相識の間柄のやうな挨拶をしたので、竹内は別に改まつて彼等を紹介しなかつた。そこで、ちよつと立止つた彼等は直ぐ北の方へ歩き出した。

「君は小森虹文といふ男を知つてたね？」竹内が中國訛のある言葉で云つた。

「知つてるよ。それがどうしたの？」柳津が上方訛のある言葉で云つた。

歩きながら、竹内は小森に會つた顚末を愉快さうに話したが、彼等より前から小森を知つてゐるからであらう、柳津は小森にそれほど興味を持つてゐないやうに見えた。戎橋をわたつて暫く行つた邊で、

「ぼつぼつ氣を附けませうか、もう小森に會ふ時分ですよ、」と竹内が云つた。

「大丈夫、人を見つけるのが彼の商賣らしいから、此方は此方で勝手に話しながら歩いてたらいいだらう、」と牧は云つた。

果して、それから暫く行くと、小森虹文の笑顔が近づいて來た。——云ひ忘れたが、小森は、無帽で、前から見ると綾毛で分らないが、後頭の方は丸く禿げてゐた。その髪の毛は茶褐色だつた、が顔色が白かつたので、それが目立たなかつた。——見ると、小林何子の外に連が一人ふえてゐた。その連は歌劇かレビュウの俳優らしい男に見えた。牧が驚いたのは、この小森といふ男は、歌手の何子と歩いてゐても、その他に俳優らしい男が加はつても、連として少しも不自然に見えない事であつた。併し、これはこの男が憶面無であると考へれば何でもない事であつた。が、その外にも理由がある事が後に分つた。小森は此方の三人の方に笑顔で近づいて來ると、

「不二家で一服しませうか、」と極く自然に云つて、その方角（南の方）へ歩き出したので、彼の連である歌手と俳優らしい男も彼と竝んで、此方の三人も彼等とほぼ竝行して歩き出した。不二家の階上に着いて席につくと、

「この人は、」と小森は俳優らしい男を指さして、「松竹の少女歌劇の、舞踊の教師をしてゐる、春山君です。」

「あんたは色んな人を知つてゐますね、」と竹内が云ふと、

「いや、今、カツフエー・ビイナスで會つたんです、」と小森は答へてから、隣席の牧に向つて、

「私は、一日に、珈琲を大抵三十杯ぐらゐ飲みます、」と云つた。

「一日にコオヒイ三十杯！」牧と向前に腰かけてゐた竹内が、極度の煙草好きのために褐色に染まつた齒を出して、如何にも面白さうに笑ひながら、叫んだ。笑ふと目尻に可愛らしい皺が寄るのと如何にも面白さうに見えるので、「一日にコオヒイを三十杯！」と中國訛で十分皮肉のつもりで云つたのであるが、それが無邪氣に聞えるので、小森にはその皮肉が通じなかつた。——

一杯の珈琲を飲み終つた頃、歌手と舞踊教師とが、顏を見合して頷き合ひ、先づ小森に、それから他の三人に、會釋して立上つて中座した。歌舞伎座に出勤する時間が來たのである。後に殘つた四人も三十分程して席を立つた。不二家を出ると、彼等は情性的に南の方へ進んだ。いつか町に明がついてゐた。菓子と珈琲とだけでは腹の足しにならなかつたので、彼等は通りがかりの戎橋北詰の菊屋に入つた。

「あんたはダンスといふものを見たことがありますか。」菊屋の二階で落着かない食事をしてゐた時、突然竹内が牧に小聲で聞いた。

「いつか、船が僕たちが長崎へ行つたとき、瀨戸内海を通つてゐた時、甲板で乘客のマニラ人がダンスをやつてゐた事があつたでせう、……僕がダンスを見たのは、あれきりだ、……」

「あ、あれはよかつたですね。……」その後、竹内はまた小聲で、「あんなのとは違ふ、普通、日本人のやる、……つまり、ダンス・ホオルでやつてゐるやつですよ。」

そこで、竹内は、大阪市内外でダンス・ホオルは禁じられてゐるが、阪神國道の兵庫縣の管轄區域には隨分いいのがある、自分は一度行つただけであるが、ちよつと面白いものだから、と牧に進めてから、今度は普通の聲で、

「柳津君、君、ダンス・ホオル知らない？」

「知らない。」

「小森君、あんたは知つてるでせう？」

「……」直ぐ答へないで、暫くしてから、「御案内しませう、」と小森が云つた。

四人が菊屋を出た時は九時を二十分程まはつてゐた。外へ出てから、何故か、「御案内しませう」と云つた小森の元氣がなくなつたやうに見ゑた。そこで、タクシの値段の掛合も竹内がした。後に、その時のことを竹内が「あの時、小森はタクシの金もなかつたんですよ、」と牧に云つた。が、それも理由の一つではあつたらうが、他にも理由があつたことを牧は後で知つた。

その時、彼等は三箇處のダンス・ホオルを廻つたが、どのダンス・ホオルでも、その入口を通

るときも、中に入つてからも、小森が、親しい親類か友人か、少なくとも始終出入して熟知してゐる家のやうに、振舞ふことが、他の三人を少なからず驚かした。併し、最初のダンス・ホオルに入つた時から、小森がその入口での慣れ切つた應待、例へば、彼は勿論『御案内』された彼等も入場料なしで而も特別丁寧に扱はれる事、又ホオルに入つてからの應待、例へば唯のダンス見物者として最も眺望のいい席を與へられ、席に着くとおしぼりと上等の珈琲を出される事などから、彼等は、それぞれ小説家といふ特殊な職業的な目で、この男は、彼が雜誌の主刊と自稱するのは名義だけで、實は、何かよくは分らないが、兎に角、ダンスに關する事が、彼の本職か、或ひは彼の過去の本職か、に違ひない、と考へた。その感は、三箇處のダンス・ホオルを廻るうちにますます深くなつた。第二のダンス・ホオルに行つた時、牧が、小森が傍に來た時、(彼は何のダンス・ホオルに入つても連の三人を見物席に殘しておいて彼方此方してゐたので、)

「君、一ぺん踊つて見せてくれませんか、……だつて、東京へ行つた時、島田さんと、ダンス・ホオルに行つた、とさつき云つたぢやありませんか?」と云ふと、それでも未だ小森が澁つてゐたので、「ぢやあ、さつき云つたのは嘘ですか?」と押すと、傍から、竹内や柳津も、それぞれの言葉で、進めたので、やつと彼は立上つた。と見る間に、彼は、もう一人の踊子を抱いて、恰も

自分の家の庭を散歩でもするやうな恰好で、床の上を、彼方此方と、見えつ隱れつ、辷るやうに踊つてゐた。此方の三人は、ちよつとの間、呆氣に取られて、無言でゐた。

「ちよつと、便所にでも行く、といふやうな感じですね。」やや暫くしてから、柳津が牧の方を見て笑ひながらささやいた。笑ふと角張つた顋が一層角張つて見ゑた。併し、それにはいい意味で世間知らずの坊ちやんといふ感じがあつた。

「實に輕いもんですね。」殆ど同時に、反對の側から、竹内がこれも持前の目尻に可愛らしい皺を寄せる笑ひ方で笑ひながら、ささやいた。——竹内のは、柳津より彼の方が年上であるからといふ意味ばかりでなく、幾らか苦勞人じみた所があつた、それでゐて、彼は四十一歳といふ、本當の年より五六歳も若く見えたので、知らぬ人は彼と柳津とを同年ぐらゐに見た。この、年より若く見えるといふ事は、むつかしく云ふと、人としての、藝術家としての、彼の長所であると共に短所であつた。

第三のダンス・ホオルに入つて、例の絶好の見物席で上等の珈琲を飲みながら、

「なるほど、小森が一日に珈琲を三十杯のむと云ふのは、嘘ぢやないでせうね、ダンス・ホオルを五箇所まはるとしたら、五杯、それに、大阪で會ふ人毎にカツフエへ行つて、一軒のカツフエ

エで一杯二杯づつ飲むとしたら、……」竹内が、音樂に消されて外に聞えないだらうと安心して、例の笑ひ方で笑ひながら、こんな話をしてゐた時、――三箇所とも、設備も、照明も、踊子も、それぞれ獨得の特徴はあつたが、もともと彼等は唯の見物であつたから、既にそれぞれ倦厭を感じ出してゐた。その時――突然、

「牧君ぢやない？」と後から牧の肩を輕く叩いて聲をかけた者があつた。その物越が餘り靜かだつたので、肩を叩かれ聲をかけられた牧だけが氣づいて、左右に腰かけてゐた竹内も柳津も殆ど氣づかないくらゐであつた。その物越は、自分の低い聲が騷々しい音樂のために聞取にくくはないかといふ考慮と、靜かな大人しい遠慮ぶかい人柄とを現してゐた。この物越を後に感じた瞬間、牧が、何か遠い記憶を呼び覺まされたやうな氣がして、振向くと、その物越の主は友田伊之助であつた。思ひがけない所で思ひがけない人に會つたときの輕い興奮の感情で、牧は、二人の友達に、

「ちよつと失敬、」と云つて、譯わからずに立上つた。――

振向くと一緒に牧が立上つたのを見ると、長身の友田は、昔ながらの上品な角刈にした青白い面長な顏に、堅皺の寄る微笑を浮べてから、牧の方に背を向けて、ゆるゆる歩き出した。見えな

い絲で引かれるやうに、牧は、もう一度「ちよつと失敬、」と、今度は少し落着いた氣持になつて、二人の友達に、云ひ殘して、友田の後を追うて行つた。すると、ダンス・ホオルの中にも、かういふ部屋があるかと思はれるやうな部屋に、友田は無言で牧を案内した。それは一個の卓子と四脚の椅子が置かれてある切りの見すぼらしい部屋であつた。

粗末な卓子を狹んで向前に腰かけた二人は、ちよつとの間、兩方とも極り惡さうに、無言でゐたが、やがて、

「君は始終こんな所……ここへ來るの？」と牧の方から口をきつた。

「いや、友だちが、ここへよく來てゐるので、家の方を訪ねて、ゐないと、何時もここへ來るものだから……」

この友田の言葉と口調は、去年の秋『アラスカ』へ行つた時、殊につい此の間松竹座から丸萬に行つた時の友田の言葉と口調と、殆ど別人かと思はれるほど違つてゐた。尤も『アラスカ』の時も、丸萬の場合も、場所が落着かなかつたり、他に島木がゐたりしたからであらう。友田のやうな人は、たとひ親友であつても、相手が一人の場合と二人以上の場合で、氣分が非常に違ふものである。このダンス・ホオルの中の見すぼらしい部屋の中で二人切り差向ひになつて語り合つ

た時の友田の言葉と口調は、むかし牧が箪笥の中の本を借りた頃の言葉と口調が殆ど同じであつた。牧が、突然、輕く肩を叩かれ呼びかけられた時、その物越を後に感じた瞬間、何か遠い記憶を呼び覺まされたのは、その思ひ出のためであらう。彼等の間に再び一寸の間の沈默が來た時、

「君と二人きりで、こんな風にしんみり話をするのは、二十……二三年ぶり……ざつと半世紀近く振りといふ譯だね？」

「うん。」やつと聞取れる程の聲で答へて、友田は、癖の、頰に堅皺の寄る微笑を浮べた。

「……君は、小森虹文といふ男を、知つてる、とたしか此間いつたね。……」

「うん。」友田は例の頰に堅皺の寄る微笑を浮べて、聞取れるか聞取れないかの聲で答へてから、しばらく默つてゐた後で、……「小森君の話は、こんな所で、……簡單に出來ないし、それに、君の連が待つて居られるんだから……」

「連といつても、……」牧は、懷中時計を見て、「もう十一時近いね、……ちよつと待つてくれないか、連の一人の竹内といふのは、多分……ここは何の邊だ、……御影？……多分、この邊のアパアトにゐる筈だから、ここで彼と別れてもいい、……實は、夕方、大阪の變なとこで、中途半端な飯を食つたので、ちよつと腹がへつてゐるんだ、……」と云つて立上つた。

「うん。」

「ぢやあ、僕、ここで待つててもええ？」友田は、持前の低い靜かな聲だが、後の方を、珍しく大阪言葉で云つた。

「ここを出てしまつたら、歸つて來る道が分らないから、君も中途まで一緒に來てくれないか。」

今度は、牧が先きに歩き出し、友田が後れて部屋を出た。牧が前の席に戻つて、竹内と相談してゐる間、友田は明のとどかない隅の方に立つて牧を待つてゐた。

牧と竹内の相談は、――竹内が、明後日までに渡さねばならぬ原稿があるから直ぐ歸りたい、自分一人なら歩いても二十分程で歸れるが、今晩自分の所で泊ることになつた病後の柳津のために自動車で歸るといふ事になつたので、――牧が、竹内と柳津と小森に別れを告げて、友田の傍に歸つて、その事を云ふと、

「それでは、」と友田が云つた、「僕は、ここの用事はもう濟ましたから、大阪へ歸る、君を堂島の宿に送つてもいいが、……兎に角、一緒に大阪まで行かう、……御中のすいた手當の事も、小森の話の事も、……まあ、自動車の中で、することにしよう。……」

併し、自動車に乘ると、何方の話も出なかつた。ただ取留のない話を適に交しただけであつた。

自動車が大阪の町に入つて暫く行つた頃、「さうだ、僕もちよつと御中がすいた、」と友田は獨言のやうに云つてから、運轉手に例の低い靜かな聲で、「曾根崎新地の二丁目、……角にポストがあるとこを、西い入つてんか、」と云つた。やがて、自動車はとある茶屋の前に止められた。友田に茶屋へ案内された事を、その入口を入るとき、牧はちよつと意外な氣がしたが、直ぐ平氣になつた。座敷に現れた仲居も、客が友田のやうな人であり連が見慣れぬ人間であつたせゐか、有觸れた冗談や世辭を云はなかつた。席に着くと直ぐ、

「二人とも御中がすいてるね、……お酒はいらん、藝者もいらん、」と友田は云つた。仲居が下つて行くと、彼は例の頬に堅皺の寄る微笑を浮べながら牧の方を見て、「ここは、僕の、ちよつとした、古戰場だよ、」と唯それだけ云つた。

それきりで、友田は『古戰場』に就いては何も話さなかつたが、小森の事はぽつりぽつりとだが、可なり委しく話した、それは牧が、相手の纖細な神經に觸らないように氣を配りながら、巧に、話を手繰出したからでもあるが。——

「君は、どうして、……いつ頃から、小森虹文を知つたの?」遲い夕飯の馳走になりながら、牧の方から口をきつた。

「僕が知つたのは、三四年前なんだが、僕のところへ彼を紹介してよこしたのは、あの御影の友達なんだ。相馬といふんだがね。相馬とどうして知合になつた、なんて、君のことだから、聞くかも知れないが、……そんな事まで話してゐては、一日や二日では、話し切れない、……」結局、相馬は、ガラス瓶の會社、——と云ふと貧弱に聞えるが、御影、魚崎、西郷、西宮、今津、の所謂灘五郷で造られる酒は、日本全國の産額の六分の一を占めてゐる、と云はれてゐる、兵庫縣下の清酒の産額約七十三萬石の内、五十萬石である、この約五十萬石だけでなく、兵庫縣下の清酒の産額約七十三萬石は、先づ吉野杉の樽に入れられるが、その中の何分の一かは小賣商人達のために瓶詰にされる、——そのガラス瓶の會社の重役だが、「親讓の重役だから、年は僕と同じくらゐだから、四十三四か、五六だらうと思ふが、やつぱり僕のやうな、親類ぢゆうでは至つて受のよくない、インテリで、」……と云つて、友田は例の頬に堅皺の寄る微笑を浮べた。

「その相馬君がどうして小森を君のとこへ紹介してよこしたんだ?」

「その話は、後にして、……相馬君が小森虹文を初めて知つたのは、さつきの、あのダンス・ホオルなんだ。小森君から、相馬君はダンスを教はつたんださうだ、……」

「小森はダンスの教師でもしてたの?」

「教師、といふんぢやない、ただ器用で、……その時分は、まだ大阪市内に、ダンス・ホオルが、方方にあつたが、……その代り、今の阪神國道にあるやうな、まあ、立派なものはなかつた、阪神國道そのものがなかつたか知ら……」

「君は、なかなか隅に置けないね、ダンスまで通じてゐるのは、驚いたね。」

「うん。……小森君は、その時分、ダンス・ホオル廻り、といふか、ダンス・ホオル稼ぎといふか、……兎に角、あの男は、何をやつても、一寸だけは、器用らしいね。……君、あの男、幾つ位だと思ふ、……多分、もう四十二三だよ。……」

「どうして、相馬君があの男を君に紹介してよこしたんだ?」牧は前の問をくり返した。

「うん。」友田はまた例の微笑を浮べて、「君は、僕の家の商賣、知つてたか知ら?」と聞いた。

「知らん。」牧は、うすうす聞き知つてゐたが、はつきり云へない商賣のやうだつたと思つたので、かう答へた。

「相馬君の會社も、ちよつと類のない會社だが、……」友田は例の微笑を浮べて、「僕のも、親讓なんだが、同じ親讓でも、會社の重役の方が、ずつと樂だよ。僕のは、一口に云ふと、金融業と云ふんだが、變つてゐるのは、その貸す相手が質屋に限つてゐることだ、……」かういふ話をす

る時も友田は他の場合と同じ靜かな落着いた低い聲であつた。

「だつて、君がやるんでなく、番頭、といつたやうな者がゐて、それが萬事やるんだらう?」

「うん。」例の微笑を浮べて、「ところが、相馬君が小森君を紹介してよこしたのは、その番頭では出來ない話なんだ、……相馬君が質屋でないばかりでなく……」そこで、友田は、小森の身の上話をぽつりぽつりと、話し始めた。——

小森の實家は、玉造にあつて、豐太閤在世當時から其處に住んでゐる、古い製墨業であつた。彼は長男で本名を休兵衛と稱した。虹文は彼が二十一二歳頃からの雅號であるが、彼の古風な家の入口には、左側に『小森休兵衛』と書いた表札が、右側に『小森虹文』と認めた表札が掛つてゐる。人あつて彼に、「小森休兵衛といふのは誰か?」と聞けば彼は「親父の名アや、」と答へるであらう。彼が可なり巧な東京語を使ふのは、二十四五歳の頃から四十三歳になる今まで年に二三度は必ず東京に行くからといふ理由ばかりでなく、彼には凡そ個性といふものはなかつたが、その代り彼のやうな模倣の才のある者は稀であるからだ、また、彼は嘘を平氣で話す事でも人に勝れてゐた。現に、『小森休兵衛』は親父の名であるといふ事が嘘であつた。彼の父は彼が十歳の

時に夭逝し、彼の祖父は十年程前まで生きてゐたからである。尤も、彼の家は代代當主は休兵衛といふ名を繼ぐことにはなつてゐたが。

「小森君は、あんな背の高い、日本人離れした體格をしてゐるし、洋服も、露西亞の職工が着てゐるやうな恰好のが、よく似ふのに、彼の家は、商賣柄ではあるが、」と友田は云つた。五間間口の左側三間分が半間ほど突き出てゐて、それが格子で圍つてあるのだが、それが普通の格子造でなく、下半部は一寸位の明き間が明いてゐる格子造で、上半部は一尺位の明き間が明いてゐるので、往來の人々はその上半部の明き間から暗い店の奥の方に飾つてある大小の墨の見本を眺めることが出來る。製造は、奈良に工場があつて、一年の內で二季しか製造に適しない上に、最早古風な文房具であるから需要が次第に少なくなると共に、良い職人が次第に減つて行くと云ふ。變つてゐるのは、小森が二十三四歳の頃まで、隣の駄菓子屋でさへ電燈をつけてゐるのに、彼の家だけは行燈を使つてゐたといふ。

併し、牧が最も驚かされたのは、彼の名刺に刷つてある『コント編輯所阪神國道尼崎ホテル第百〇三號同大阪支部大阪市浪花區何某町何某アパアト』の何方にも、彼は、唯ゐる事になつてゐて、實際に住んでゐるのはその玉造の製墨業の看板の出てゐる家であるといふ事であつた。

長男であつて、父が亡くなつてゐるのに、どうして、友田や相馬のやうに、小森が家業の後を繼げないのか、と牧が友田に聞くと、その理由はいろいろある、その一は彼の母と彼の妻が揃ひも揃つて聟者で、長男であり跡取である現在四十三歳になる虹文事何代目かの休兵衛に、毎月中學生の小遣より少ないほどの宛行扶持の小遣しか與へない事、言ひ換へると、後家である彼の母が、亡夫（虹文の父）である何代目かの休兵衛の實權を握り、長男であり跡取である虹文の後見人の役をしてゐる事、その上彼の妻は二人の子を育てる役と姑である彼の母の參謀の役をしてゐる事などである、と云ふのである。——

「これでは、小森君が、毎日、大阪の銀座兼淺草である心齋橋筋から戎橋筋それから道頓堀から千日前を歩き廻つて、東京から來た所謂藝術家といふ言葉で總稱できる人々に洩れなく刺を通じて、彼等とカツフエエに行きレストランに入り、ダンス・ホオルに彼等を案內する、といふやうな不思議な仕事が、止められないのも、無理がないではないか？　さうして、彼が、文士と一緒に歩けば文士の連に見え、畫家と散歩すれば畫家の友に見え、俳優とカツフエエに入れば俳優關係の者に見え、音樂家と活動寫眞館に入れば音樂家に見える、といふ事は、彼が、如何に模倣の才を持つてゐるか、……といふより、突飛な形容を使ふと、『水は方圓の器に從ふ』といふ諺を

當嵌めると、彼は、正に水だよ、一緒に歩く人と同類に見えるのは『カメレオン』の一種といふ事も出來よう……牧君、人間であつて、『水』になれたり、『カメレオン』になれたりする事は、一種の才能、と云へるかも知れないではないか。――ざつと斯ういふ意味の事を友田は云つたのである。「あの男が、相當の年、といふ事は氣がついてゐたが、あの男に三人も子がある、とは、神ならでは知る由もなしだね。」

「君はさすがにえらいよ、」友田は例の微笑を浮べて、「……併し、男にさう見られるのは、何の害もないんだが、料理屋の女中とか、カツフエエの女給とかいふ、大勢の男を見慣れてゐる女たちが、彼を獨身者と思ひこんで、その爲めにひどい目に逢ふ者が、可なりあるらしいんだ。」

「さういふと、さうだらうな。僕は、會ふのは今日が二度目だが、ちやんと見たのは今日が初めてだが、さういふと、上着の裾口とか、ズボンの裾とか、細君があつたら確にあんな風はさせないだらう、と思へるやうな所が隨分あつたやうに思ふ。……男の僕にでもそんな風に見えるんだから、尙更そんなとこに氣のつき易い女の方が、一層彼を獨身者に見るんだらうな。」……と云つてから、牧は急に言葉の調子を變へて、「さつき君が、相馬君があの男を紹介してよ。こしたのは、番頭では出來ない話だ、と云つたのは、どんな話なんだ?」と聞くと、

「ふん、その話は……」この時は例の微笑でなく、友田の頬に珍しく苦笑の影が現れた、「その話は、したくない話なんだがね……」と云ひさして、今度は何故か極りの惡さうな顏をした。それは二十三四年前に箪笥から本を出してくれた時の顏を牧に思ひ出させた。さういふとき膝の上で手を組合せて肩を捩らす癖があつた。いま友田はその癖を出した。さうして暫く後を云ひ淀んでゐたが、やがて「……外の話はいいがね、この話だけは、含んでおいてくれないか、」と友田は始めた、「……先きに云つたやうに、相馬君の紹介狀を持つて來たんだが、その時も今も小森君の風采は少しも變つてゐないからね、僕は初對面の一瞬間、勘で、この人は? と思つたんだが、何しろ紹介者が相馬君だから――君に話さなかつたが、相馬君は僕の三高時代の同級生、といふと何でもないが、三高時代の僕の友だちは相馬一人、三高時代の相馬の友だちは僕一人、といふ間柄だつたんだ。……相馬と僕の友情の委しい話は、この話と關係がないから、これだけにして……」

相馬の紹介狀には、小森の家が豐太閤時代以來の舊家であること、小森休兵衞君（虹文と號する事は後で知つた）は小森家の當主であること、家業はこれも豐太閤時代からの製墨業であるが、年毎に需要が少なくなるので、その方の收入は次第に減つては行くが、小森家は、當主の休兵衞、その妻いと、その母ます、その子供五人、その弟妹三人　以上十一人といふと大家族のやうであ

るが、雇人が一人もゐない上に、古來の日本人がさうであつたやうに、一切の獸肉を食はなかつたばかりでなく、その極端な例は、魚肉さへも食はない、――その頃から十年程前、繪畫彫刻寺院等の研究に洋行した、（どういふ譯か、イギリスのロンドン郊外の素人下宿を根城にして、フランス、ベルギイ、ドイツ、イタリイ等を見物した、）といふ當主の休兵衞が、洋行中も一切の魚鳥獸肉を謝絶した、といふ程の自然の儉約振である、その上、土地も家もこれ亦豐太閤時代以來の持物であるから、製墨業の收入が減つても一家のくらしには少しも困らない、そればかりでなく、これも豐太閤時代以來の持物である可なり大きな桃谷の地所と若干の貸家がある、その桃谷の地所の内の最も良い地所を抵當にして金を貸してやつてほしい、と認めてあつたのである。

その時は、豐太閤時代以來の舊家といふ事も、製墨業などといふ古風な家業であるといふ事も、魚肉獸肉を食はないといふ家風も、當主の休兵衞が二年間繪畫彫刻寺院の研究に洋行したといふ事も、その休兵衞が豐太閤時代以來手放したことのない桃谷の地所を、相馬を保證人として、抵當にして借金したいといふ事も、その他、悉く信用できる條件であると思つた。それは友田の氣質の中の十分の二位を占めてゐる浪曼的な氣質が好意を持つたのであらう。さうして友田はその小森休兵衞の抵當を取つてもいいと考へたのである。が、又、彼の氣質の十分の三ぐらゐを占め

てゐる彼が亡父の氣質を受繼いだと見られる、むつかしい言葉で云ふと、實利主義的な氣質が小森に「僕の考では、多分御用立できると思ひますが、僕よりこの商賣に明るい番頭と相談せねばなりませんから、三日か一週間お待ち下さい、此方からお返事を差上げますから、」と云はせた。この返事に、小森は、喜んだやうに見えたが、何故かちよつと狼狽したやうにも見えた。そのちよつと狼狽した顏で「お返事は、僕が、聞きに、一週間程したら、來ます、」と云つた。「承知しました、」と友田は答へた。が、これは唯言葉だけの返事であつた。――

小森が歸つて一時間ほど立つてから、友田は番頭の龜吉を呼んで、今先き小森が持つて來た相馬の紹介狀を見せた。龜吉がそれを讀んでゐる間、彼は、腕を組んでゐたが、龜吉が讀み終るのを待つて、

「明日……明後日……ちよつと早いかな？」と半分獨言のやうに云ひながら、首を傾げてゐたが、

「……さうだ、明明後日、その小森の家へ行つて見てくれないか、樣子を見に、」と云つた。

龜吉は、彼の亡父の代からゐる番頭の中で、そんなに古顏といふのではなかつたが、彼の亡父の晩年には彼の代理をし、亡父なき後は彼一人だけ殘ることになつた程であるから、友田は家業の事は一切この男に任してゐたのであつた。その龜吉が小森を訪問して歸つて來た時の話、――

「……思うてゐたよりもつと古風な家で、『御免やす』云うて潜を明けて入りますと、店の間にゐやはつた、法被を着た大けな男の人が、私が入つて行くと一緒に、大急ぎで逃げこむやうに、奥の方へ入つてしまひはりましてん……その逃げこみはる拍子に、ちらッと顔が見えました。……それが先一昨日來やはつたあの小森はんだんね。法被着馴れてはると見えて、よう似合うてましたぜ……」

「肝腎の話はどうなつたんだ?」

「……此方も一寸てれましたで。……おまけに、それから、何でも五分ぐらゐ待たされました。店の間の土間で、誰一人ゐんとこで待たされたんだすさかい、本眞は二三分やつたか知れまへんが。……中イ入つて洋服に着かへてはつたんやさかい、矢張り五分ぐらゐかな、……番頭も丁稚もゐんらしいんだすが、……あれでは隨分不自由やろな、と思て、入らん心配しましたけど、考へて見ると、小賣屋やおまへんよつてん、……それにしても、不自由やろな……」

話がちよつと面白いので、友田は例の頬に堅皺の寄る微笑を浮べながら默つて聞いてゐた。云ひ忘れたが、さういふ時、彼は何時でも口を結んでゐたが、結んだ口元に微笑の影が漂つてゐるのが彼の特徴の一つであつた。

「……ところが、今度出て來やはつたんは、前に逃げ込みはつたとこと、別の、右手の方から出て來やはつて、『どうぞ』と案内されたのは、上つて見ると、その右手の方にいきなり梯子段があつて……それは、窮屈な梯子段だす、――上つたとこが、これ又いきなり部屋になつてをましてナ、……それは日本間を洋間にこしらへ直したものらしいんだすが、狹苦しい部屋で、やつと二人か三人腰かけられる位だす、……本棚には横文字の本や日本の本やがごたごた並んでましたが、……壁には額がちやんと掛けてあつたり、ただ繪ェだけがピンで張りつけられてあつたり、そこらの棚には洋酒の空瓶が縱になつたり横になつたり、……その本だつたか?……私にはよう分りまへんけど、繪ェの本が多かつたやうに思ひます、……そんな樣子を見ると、何ぼ太閤はんからの桃谷の地所でも、ちよつと不安になりましたんで、――その話を、――肝腎の話を持出しますと、急に口の中でむしやくしや云ひはるだけで、……」

結局、その桃谷の地所を抵當に取つて金を貸す時は、相馬に仲に入つてもらつて、初めの紹介文にあつた通り、相馬が保證人になつたので、龜吉は可なり澁つたのであるが、友田はどんな間違があつても損をしない、或ひは間違があつた方が得をする、といふ方法で、(これは無論龜吉の案であるが)貸すことになつたのであつた。さうして、友田と相馬と龜吉とが相談して抵當物

の地所の何十分の一かの金を友田が小森に融通したのであつた。

「牧君、結論は、落語よりつまらないよ、」と友田は最後に云つた、「併し、又、そんな事にならうとは僕は勿論、相馬君も、龜吉も、當の小森君も、誰も想像がつかなかつたよ、……牧君、考へて見ると、この話は、わざわざ含んでおいてくれ、などと、大袈裟な前置をしたことが今更極りが悪い程、實に馬鹿馬鹿しい話なんだよ。……つまり、小森休兵衞は準禁治産者だつたんだ。それが分ると一緒に、虹文といふ號があつたとか、その他、前に君に話したやうな事がだんだんに分つて來たんだよ。……失敬したね。」

友田が云つた通り、この話は、友田としては凡作の部に屬する、と牧は思つたが、

「君のやうな人が、そんな目に會ふのは、空前にして絶後だらう、」と、彼も友田の話に負けない位の平凡な言葉で挨拶してから、急に思ひ出して、「忘れてゐた、僕、明日の朝早く、島木と京都へ行く事になつてゐたんだ、」と云つた。

「島木君に會つたら、よろしく云つてくれ給へ。……ぢやあ、明後日、待つてゐるよ、……知つてゐるだらう、僕の家、おぼえてゐる?」友田が云つた。

その翌日の午前八時に、梅田驛の中央待合室の入口で、島木と待合す約束になつてゐた。前の晩、牧が堂島の宿に歸つた時は一時近かつたので、約束の時間より二十分程おくれた。その日、島木は、豫て注文してあつた清水燒の茶碗の素燒が一ヶ月程前から出來上つてゐるといふ通知が來てゐたのが氣になつてゐたところ、折から來阪してゐた牧が京都の新しく出來た美術館で開催してゐる綜合美術展覽會と博物館で開催してゐる古名畫展覽會を見に行きたいと云つたのを機會に、牧と一緒に、京都に出かけたのであつた。彼の茶碗の用事といふのは、方々の知人や友人やへの義理を返すために、自分で繪を描いた清水燒の番茶茶碗を造つておきたいと思つてゐた、その繪を描く爲めであつた。

島木が六十幾個の茶碗の繪を描いてゐる間、牧はその家の窯を見たり其の家で出來たいろいろの清水燒の製品を見たりした。その家は、島木とは可なり前からの知合らしく、彼が繪を描き終つた頃ちやうど正午になつたので、京都人らしい質素な晝飯を彼等に振舞つた。彼等がそこから程近い博物館に行つたのは一時過ぎであつた。博物館の出品畫の中で最も印象に殘つたのは瀧を描いた應擧の六曲屏風一双であつた。この繪は、專門家でない牧の目にも彼がこれまで見た應擧の繪の中でも可なりすぐれた作と見えたが、他の繪の前では二三度短評のやうな言葉を述べた島

木が、この繪に就いて何も述べなかつたので、牧は心の中でさう思つただけで默つてゐた。清水から博物館までは電車で行つたが、博物館から岡崎公園までは電車では時間がかかり過ぎるのでタクシで走つた。その自動車の中で、突然、「墨で幾色にも見える岩と、あの何本かの褌を流したやうな水の流は、何とも云へんところがあつたなア、」と島木が云つた。美術館に着いた頃は三時を少し廻つてゐた。清水燒の家にゐた頃は「大阪と違つて山に近いだけに、どこか冷冷するな、」などと云ひ合つたのが、美術館の中に入ると、汗ばむやうな暑さを覺えた。それに、綜合展覽會といふのであるから、繪が餘り澤山あり過ぎた。彼等は暑さと疲れとの爲めに、美術館の中を殆ど素通りするやうに廻つたせゐか、この展覽會では殆ど目に止まつた繪はなかつた。

美術館を出た頃、さいはひ日が陰つてゐたので、彼等は平安神宮の東側を通つて黑谷の方へ歩いて行つた。道が次第に上りになるに連れて、閑靜な町家がつづき、木立や林が多くなり、山に近づいただけに空氣も冷冷として來た。彼等は、「京都もこの邊はいいな、」とか、「さうや、この邊から、吉田、大學から三高などのある邊、それに、この下の方の聖護院の邊は、いつ行つてもええな、」とか、「さうだ、僕も聖護院は好きだ、林の中のやうに木の多い町の中に、古風な八橋(煎餅の一種)を賣つてる店が彼方此方にある所など實にいいね、」などといふ當障のない話を、ぽ

つりぽつりと交すほかは、後は、殆ど無言で足をはこんだ。——

牧は、二十三四年前、まだ大學生であつた頃、この黑谷で二週間ほど暮した事を思ひ出した。當時、ここに中學の同級だつた長山といふ男が、インクラインの傍にある洋畫研究所に通ふために、或る寺の離家を借りて住んでゐた。その頃、牧は、ふと京阪が見たくなつて學校を一月ほど休む覺悟をして、この長山の離家に食客となつたのであつた。秋であつた。山に近かつたので毎朝起きると大抵霧が立ちこめた。その霧の中を、露をおいた草の生へてゐる道を、文學書生の牧は畫學生の長山に連れられて賄所へ朝飯を食ひに出かけた。賄所とは其の附近に間借してゐる帝大や三高やその他の學生が食事をしに行く家のことである。それは上方風の通庭になつてゐる四間つづきの長細い家で、その間の方も床をすつかり取外した上に、取附の間と次ぎの間との壁を拔いて、——つまり三間を細長い一間としてそれを食堂に當て、一番奥の間が炊事場になつてゐた。それで、先きに述べた如く、通庭になつてゐたので、兩側に草の生えた細道の往來から、明け放しになつてゐる入口をはひると、三間を一間に直した細長い食堂に、元は白木らしいが手垢その他で茶褐色になつた長細い食卓が置かれ、その兩側に、凭れる所のない、これも元は白木らしいが茶褐色になつた椅子が無雜作に竝べられてゐた。それを右に眺めながら進んで行くと、

或る芝居の舞臺面を見るやうに、食堂と壁一重へだてて炊事場があつた。そこには、厖大な竈に厖大な釜が二個かかつてゐて、兩側の棚には棚一ぱいに飯茶碗や茶飲茶碗が亂雜に置かれてゐた。竈の右手に低い臺があつて其の上に空の飯櫃が三四個積重ねられてゐた。この部屋の土間だけ漆食になつてゐて、そこにはバケツや手桶などが捨てられたやうに置かれてあつた。それから、これも明け放しになつてゐる裏口を出ると、左手に、ポンプ式の井戸があつた。井戸端に鷄共が漫歩してゐた。さうして直ぐ向ふに竹藪が見えるところは、誠に諺に謂ふ所の『京に田舍あり』の風情があつた。しかし、それ等の風情よりも、この賄所を回想して、更に牧の頭に印象深く殘つてゐるのは、其處の朝飯の時の光景であつた。尤も、彼等は朝飯の外に行つた事はなかつたが。

——長い食卓を挾んで、二列縱隊の形に着席した、帝大生、三高生、美術研究生、その他が、細長い食卓の上に、適宜に置かれてある、蓋のしてない、湯氣のぽツぽと立つてゐる、三四個の厖大の飯櫃を彼方へやり此方へやりして、銘銘手盛で食べてゐる光景、汁や香物がなくなると、思ひ思ひに炊事部屋へ取りに行く光景、食べながら話合ひ、話合ひながら食べてゐる光景は、年は彼等と殆ど違はないのであるが、當時（一千九百十二三年頃）日本の文學界の一部を風靡した世紀末（ファンドウシエークル）とか頽廢（デカダン）とか云ふ言葉にかぶれてゐた牧健作や彼に感化された片田隆には、誇張した

詩的な表現で云ふと、青春、健全、希望、空想の亂舞のやうに見えた。併し又、それ等の光景は、彼等には、粗雜にも見えた、言ひ換へると、それを食卓の片隅の方で見てゐた當時の彼等には餘り好感が持てなかつた。それは彼等が青春と健全とを全く失つてゐたからであらう。——

その話を、道を歩きながら、牧が島木にすると、島木はときどき或ひは適に「うーん」とか、「ふーん」とか云つた。彼がかういふ意味のない言葉で相槌を打つときは大抵半分以上相手の話を上の空に聞いてゐる時であつた。牧の話が一段落になつた時、

「ぢやあ、白川で僕が繪を描いてた時……あの時、君は片田のとこ……」と島木は云ひかけた。が、ほんの云ひかけただけで口を噤んだ。彼等は黑谷の町を北の方に向つて歩いてゐた、別に何處へ行くといふはつきりした當なしに。

中途で突然口を噤んだので、却つて島木が何故急に口を噤んだのであらうと考へた事から、牧は當時の事を思ひ出した。——彼は、片田は畫學生には珍しく勤勉な所があつて殆ど毎日缺かさず研究所を出かけて行くので、初めのうちは東京から持つて來た本を讀んで暮したが、持つて來たのは四五冊であつたから二三日の內にみんな讀んでしまつた。その二三日のうちに、片田が肝腎の繪畫の才能に惠まれてゐない事、從つて藝術を愛する者に共通する感受性に缺けてゐる事を

發見して、大阪に行かうか東京に歸らうか、何れにしても片田と成るべく顏を合さない算段をするやうになつた。その頃の或る日、彼は、片田と畫論を戰した末、少し不愉快になつて、當なしの散歩に出た。考へてみると、そのとき牧は、今、島木と竝んで歩いてゐる道を通つて、づんづん歩き進むうちに、比叡山が間近に見える田圃道に出たのであつた。そこで、寫生してゐる島木に逢つたのであつた。牧と島木とは、中學では級が二年ちがつたので半年ぐらゐしか親しくしなかつたが、前後して東京に出てから、いつからとなく親しくなつた。彼等の氣質は可なり違つてゐた。が、違つてゐる爲めに次第に仲よくなつた。——その時、牧が先きに島木を見つけた。

「おい！」と牧が聲をかけると、

「おう！」と島木は、筆を持つた手を休めて、吃驚した目で、懷手しながら歩いて來る牧を見つめた。二人とも、一寸の間、口がきけなかつた。

「どうして、こんなとこに……？」

「ちよつと京都の秋を見たくなつたので、……」と牧は答へた。それだけの理由ではなかつたのであるが。

「しばらくゐるの？」

「來てからまだ一週間にもならないんだけど、……大阪へ行かうか、東京へ歸らうか、と迷つてるんだ、……君だつて變だね、學校、あるんだらう？」牧が自分の事を棚に上げて聞くと、

「母が死んでね、」島木は繪の道具を片附けながら、東京を立つたのは一週間程前で、葬式は四日前で、葬式の日の晩大阪を立つて、「つまり、一昨昨日の晩、此方へ着いたんや……、」と云つた。さうして、繪は殆ど九分どほり描けたから、「後は、東京へ歸つてからにしよと思てんね。僕も東京に歸りとなつてんね、」と附加へた。

そんな風で、東京へ歸りたい事と、話相手が欲しかつた事とで、二人は意氣投合した。その日の夕方、彼等は鴨川の川沿ひの家で夕飯を食べた。島木の案内で、牧は奢られた。その代り、といふ譯ではないが、島木が話手で牧が聞役であつた。しかし、この晩、島木が問はず語りに話した話は、いつまでも牧の記憶に殘つた。——その頃の畫學生は、その頃の文學書生が唯言葉の上だけで樂しんだり悲しんだりした反對に、不言實行、と云ふと堅苦しくなるが、默つて樂しみ行ふ流儀であつた。尤も、勿論、それは一般的には云へない事であるが、島木は、その頃、淺草の高い塔の下にあつた Private Prostitute の町の話をした、——風呂敷に着物から下駄或ひは洋服

から靴まで包んで泊る話とか、尤も、それは特別の例であるが、と云ふやうな話を、それからそれと、つづけた。牧が、それは文學書生の間にも可なり流行してゐたと云ふと、それでは、或る畫學生に、かういふ話がある、と島木が云ふのに、――その畫學生は、月の内、その淺草の高いの塔の下の Private Prostitute の家で泊らない晩が數へる程だ、つまり彼が下宿に泊るのは月の内四五日か一週間ぐらゐといふ意味である、その極端な例は國の××の日に、國中の人々が商賣を休む日に、その男は、××の鳴る音を、高い塔の下の家で聞いた、――その話が、到底筆紙に盡せない程、詳細に話されたので、牧が「島木君、それは君自身の話だらう、」と云つたくらゐであつた。牧は、島木が云ひかけただけで口を噤んだ事から、この話を思ひ出したのであるが、若しあの話の主人公が假りに島木であつたとしても、今の島木に對してゐると、そんな二十三四年前の昔話を思ひ出しても、少しもその話を持出す氣にならないばかりでなく、それどころか、一瞬間思ひ出しただけで一瞬にして消えてしまふ程、今の島木は變つてしまつてゐた。――

當なしに歩いてゐる彼等の足は眞如堂の方へ通じる道を進んでゐた。彼等はときどき「まだ腹が減らないね、」とか、「いつその事、大阪へ歸つた方が、……その方が腹も空くし、……大阪の

方が食ふ物が多いから、」とか、「折角、京都に來たんだから、僕は、大市のスッポンを食ひたいな、」とか、かういふ言葉を跡切れ跡切れに云つた。彼等が云ふ通り、腹は空いてゐなかつたが、彼等自身に氣づいてゐなかつたが、彼等は可なり疲勞してゐたのであつた。その疲勞が、彼等から食慾を奪ひ、彼等から彼等の得意の饒舌を奪つたのであつた。ところが、この無言の爲めに、眞如堂の前まで行く僅の間に、回想の虜となつたかと思はれる程、牧の頭の中に回想が次ぎから次ぎと頭を持上げたので、彼の頭はそれ等の整理に苦しむ程であつた。――

鴨川の川沿ひの家で一緒に夕飯を食べてから三年ほど後、それは所謂新劇團が諺に云ふ雨後の筍の如く勃興した頃の事、牧の親しくしてゐる先輩がGと云ふ劇團の舞臺監督をする事になつたとき、その先輩から美術學校の學生で器用な人を紹介してほしいと頼まれたので、彼は島木を紹介した。彼は當時美術學校の最上級生であつたが、彼も未だ年若く牧の先輩の望みどほり器用な人だつたので、最初はG劇團の背景兼舞臺裝置の手傳として入つたのであるが、俳優の才能と經營の才能とを持つてゐる事をG劇團の主事に認められ、その爲めに不知不識のうちに、俳優の一員兼理事の一員といふ位置になつてしまつた。彼がその爲めに美術學校を一年棒に振つたのは無理のない事であつた。それは二十七八歳以後の文字どほり一寸の遊もない島木新吉を知つてゐる

人々には嘘かと思へるやうな事實であるが、その頃の事をよく知つてゐる牧には、二十五歳の島木があの位の寄路をしたのは、現在四十六歳である島木の今までの生涯から考へると、生れてから一度も病氣をしなかつた人が腸窒扶斯をわづらつて却つて、丈夫になつた例に準へていいとまで考へるのであつた。その無理のない寄路といふのは、二十五歳の美術學生であつた島木は、それから數年後文學に興味を持つて一年ばかり黑人めいた小説家になつた事があるやうに、新劇の俳優に興味を持つて、或る程度まで成功した。彼は、俳優ばかりでなく、大阪人である彼の母の才能を受繼いだらしく、才覺もすぐれてゐたので、G劇團の第二回公演のとき、三日間の興行に、毎日、明日の公演が出來るかどうかが危まれるやうな狀態になつたとき、毎晩、劇場が跳ねてから、主事、理事、舞臺監督、幕内主任、舞臺裝置、俳優の中の主な者等が事務所に歸るのは十二時頃で、それから、明日の興行の費用を捻出する相談會が開かれたとき、その中で何時でも、たとひ成功しなくても、最も名案を出すのが島木であつた。彼等の中でも、また文學界の中でも、利巧である上に理財の才に長けてゐると云はれてゐる舞臺監督の秋山さへ島木君には叶はないと云つた程であつた。それを人傳に聞いた時、島木はこのG劇團と別れようかと思ふほど嫌な思ひをしたものであつたが、それを彼に思ひ止まらしたのは女性であつた。こんな風に述べると非常

に月並に聞えるが、今日この頃の島木の事を考へると、牧が何より先きに思ひ出すのはこの女性であつた。彼女は、G劇場の女優の一人で、長谷峰子と云つた。G劇團が草創の際、前に一度舞臺に出た事があつたが、事情があつて、今は止めてゐるといふ事を誰かから聞いて、島木は、G劇團理事といふ肩書のある名刺を持ち、G劇團脚本部といふ有名無實の名刺を持つた牧と一緒に、有樂町の裏町の或る路地の奥の家に彼女を訪問した。入口の狹い格子戸を明けると、取附の四疊程の部屋に、その瞬間まで何かの遊事をしてゐた、五六歳から十二三歳位までの年頃の、兄妹と思へる、揃ひも揃つて醜い三人の男女の子供が、戸の明く音と一緒に、蜘蛛の子を散らすやうに奥の方へ逃げ隱れてしまつた。唯一人、鼻の低い、口の大きな、頰の脹れた、一番年上らしい男の子が、「ちよつと、」と云ふ島木の聲に立止つて、此方を向いたので、彼は、咄嗟の機轉で、「姉さん、内？」と云つてから、その子の方に例の肩書のある名刺を見せて、「ちよつと、この名刺を渡してほしいんだが、……」と云つた。

不意の見馴れない客の方を怪訝さうな目でじつと見てゐた子供は、小柄の島木の上方訛の交つた言葉に却つて親しみをじたらしく、島木の名刺を受取る　と直ぐ急ぎ足に次の間に入つた。そこに二階への階段があるらしく、階段を上る足音が入口に立つてゐる二人の耳に聞えた。が、そ

れ切り、子供も訪ねる人もなかなか下りて來る樣子がないので、彼等は狹苦しい入口の土間を出て、表で返事を待つことにした。十一月末の殊に强い北風の日だつたので、待つてゐる二分が五分ぐらゐの氣がした。やがて戸の明く音がした。彼等は緊張した。明いた戸の入口から、背の高い丸顏の女が現れた。女は紫色のコオトを著てゐた。近づいて來たのを見ると、丸顏は丸顏だが全體に丸く脹れ過ぎてゐるやうに思はれた。色は白い方らしいが何故か眞赤な顏をしてゐた。

「大へんお待たせいたしました、」と云つて笑ふ顏附には人を逸らさない愛嬌があり、その言葉に人馴れたところがあつた。併し、その鼻の恰好と口元が取次をしてくれた子供に似てゐるのに島木も牧も氣がついた。用意のいい島木は先程子供に事附けた名刺の裏に用事のことを簡單に書記してあつたので、

「あの……御用事のことは、あたしは大抵いいだらうと思ひますけど、一度、父に聞いてみませんと……父は毎日勤に出て居りますので、(後に或る會社のコック長であることをが分つた)……それに、もう長い闘舞臺に出ませんから、自分がよくても、どうかと思ひますけど……あ、大へん失禮いたしました、實は風をひいて居りましたので、ずゐぶんお待せいたしました、……」

「風?」島木が言葉を挾んだ。

「ええ、風は風なんですけど、……」兩方の手を兩頰に當てながら、「阿多福風」といつて、こんなに顏だけが腫れるんです、これでも餘程腫れが引いたんですけど、……」

「ふーん、阿多福風! 怪態な風があるもんやなア。」島木は思はず大阪語を出した。長谷峰子はちよつと變な顏をした。——

この時から、島木はG劇團の女優になる事を納得させるまでの一切の交渉を受持つことになつた。それは賴まれた形であると共に自ら引受けた形でもあつた。島木が牧と一緒に彼女を訪問した時は直ぐにも納得するやうに思へたが、給料はそんなに入らないが自分一人の生活を保證してくれなければとか、その生活費の中には何々の費用を入れてほしいとか、いふ要求があつたので、學生や學生上り等の親の脛齧り連中とか他に職業持つてゐる人とかばかりで成立つてゐる劇團のことであるから、峰子の要求を入れる事は到底できない相談であつた。といつて、經驗のある女優が是非とも二三人必要な場合であつたから、どうしても峰子を入れてくれといふ劇團の方の希望だつたので、さすがの島木も彼女を納得させるのに、その交渉に、意外の日數と手數がかかつた。ところが、それが機緣になつて、島木と峰子の交渉が後になつて更に一層面倒な交渉にならうとは誰が知り得たであらう。それは兎に角、話が極まると共に、島木は、先づ主事の

中代と相談して、下澁谷のG劇團の事務所兼稽古場の近くに、六疊と二疊の二階を借り、若干の生活費を劇團の方から出させる約束にして、そこに峰子を住ます事にした。第一回の試演は、中澁谷の某實業家の邸内にある、演藝場を借りて、一幕物ばかりの飜譯劇を四種上演した。その内の一幕に、中代と島木が出たが、島木の方は可なり好評であつた。專門の批評家も、一般の人も、峰子を褒めたので、島木は面目を施したやうな氣がした。その頃から、彼は、劇團の用事でなく、ときどき峰子を訪問するやうになつた。第一回の試演で幾らか自信が出來た上に、經驗のある俳優が二三人加入したので、第一回公演を何某講堂で開いた。それも、『素人の集りの劇團としては』といふハンディキヤツプ附であつたが、可なり好評だつたので、先きに述べた第二回公演を有樂座でやる事になつたのであつた。その頃は、下澁谷では不便だといふので、G劇團の事務所が神樂坂の傍に引越したので、島木の考へで、神樂坂の裏通の路地に、四分六の割で家賃を出すことにして、彼は、牧と共同で、一軒の貸家を借り、二階の六疊に牧が住ひ、階下の八疊と二疊と三疊に彼と峰子が住ふことになつた、島木は、峰子が炊事が出來ないので、これも牧と相談して、老婆の女中を置くことにした。ところが、島木が自分で探して連れて來た老婆女中は、どういふ譯か、金聾ではなかつたが、可なり耳が遠かつた。或る日、その事を不自由だと牧が詰ると、

「うん、あのお婆さんの家は、長生筋と見えて、あのお婆さんの、母親も聾、姉も聾、みんな聾や、」と島木は云つた。又、島木は、峰子と一緒に住んでゐる事を、これは牧には云はなかつたが、人々には「あれは共同生活や、」といふのが常であつた。『共同生活』といふのは、當時のインテリ(殊に藝術家)間の流行語で、男女が、形式だけの家庭生活をする、或ひは夫婦の契をしないで同じ家或ひは同じ部屋に共棲する、といふ程の意味である。併し、この共同生活といふものは、その形のままで何時までも續く譯のものではない、それどころか、これは所謂戀愛結婚の前提のやうなものであつた。――島木と峰子がこの共同生活を始めたのは春の中頃であつた。二階では殆ど朝から晩まで『春』の氣分に惱まされながら牧が卒業論文を書いてゐた。階下では島木と峰子が滿ち足りた氣持と滿ち足りない氣持で譯わからずに苛々してゐた。その氣持は、G劇團が、第二回公演を豫定の三日間を辛うじて濟ますと共に、解散してから一層ひどくなつた。それと共に、島木は一年ほど離れてゐた繪が描きたくなつた氣持を抑へることに苦しみ始めた。或る日、朝飯をすましてから、前の晩、峰子が買物に行つてゐる間に、整理しておいたスケツチ箱を彼が押入から出すと、「おや、あんたも矢張り寫生に行くの?……あたし、まだ繪かきが寫生する所を見たことがないから、一緒に連れてつて下さらない?」と峰子が云つた。それを相手の氣を惡

くしないように斷ることにまで氣を遣はねばならぬやうな狀態に島木はなつてゐた。

「牧君、自分で招いた事とはいひながら、一人で寫生に行く事が出來ないとは情ないよ、……」或る時、島木が珍しくこんな愚痴をこぼしたことがあつた。「ぢやあ、家で靜物でも描いたらいいぢやないか。」「僕は、野外は平氣やけど、家で描いてゐる所を見られるのんは嫌でかなはんね、……」こんな會話が交されたこともあつた。かと思ふと、或る朝、珍しく早起した蜂子が、牧が齒を磨いてゐる傍に來て、「牧さん、」まだ島木は寢てゐたらしかつたが、聲をひそめて、「島木はね、本當は、俺は誰よりも繪はうまいんだと時々云ふんですが、本當?」と聞いて牧を困らしたこともあつた。——そんな風な生活が、だらだらに半年ぐらゐつづいたが、或る日、牧、島木、峰子、耳の遠いお婆さん女中の一家、これこそ四人の共同生活が解散する事になつた。——

G劇團や、牧や、お婆さん女中やは、解散して救はれたが、島木と峰子とは何時まで立つても解散し切れないやうに見えた。彼等は神樂坂の裏通の路地の家から取敢ず芝區の或る町の仕舞屋の二階に引越した。この貸間は峰子が見つけて來たのであつた。が、階下に不見不知の人が住んでゐる、二階の八疊の貸間で鼻を突合す生活は島木を憂鬱にし峰子をヒステリックにした。さういふ生活が何月かつづいた或る日の朝、「夫婦が別々に住んでゐて、……」と島木は峰子の顏色

を伺ひ伺ひ、「……夫婦が別々に住んでゐて、そして、ときどき、訪問し合つたり、泊り合つたりしたら、面白いと思ふがな、西洋流で、ハイカラで、……」と云ふと、「それや、ハイカラだわ、」と彼女は飛立つやうに云つた。それを聞くと、島木も心の中で飛立つやうに思つた。彼女は言葉をつづけて、「ぢやあ、早速、今からでも、探しに行かない?……あの、南佐久間町から日比谷公園に出る道の、右ツ側の角に、竹細工屋があるでせう、あそこに確か二階貸します、の札が出てたと思ふわ、あそこへ行つて見ない?」と云つた。そこで、『善は急げ』といふことになつて、峰子は竹細工屋の二階を借りる事になり、そこから三四町はなれた所の二階に島木は引越すことになつた。その晩、島木はその琴平町の紙箱職の二階に落着いた時、眞に『解放』された嬉しさを味つた。ところが、その喜びは一晩きりであつた。何故なら、その翌日、峰子に會ふと、毎日訪問しなければならない事、又いつ彼女が訪ねて來ても居なければならない事、——さういふ面倒な約束を强制的にさせられた。言ひ換へると、島木は自分が考へた案に束縛されるやうな破目に陷つた。併し、かういふ生活は半年とつづかなかつた。で、今度は、島木は思ひ切つて一軒の家を借りることにした、それは見苦しい爭をしても他人に見られなくて濟む事と、もう一つは小さくても一軒の家に住めば鼻を突合さなくて濟む事とであつた。そこで、赤坂の新町に手頃

の借家があつたので其處に引越した。この一軒の家に水不入で住むといふ事は、島木にはますます荷が重くなる氣がしたが、峰子には飛び立つほど嬉しい事であつた。彼女は、一軒の家を借りると共に、島木に繪を描くことを許すやうになつた。これは、長い間描かなかつたので、繪が描きたくて堪らなくなつてゐた島木にも、天窓が明けられたやうな氣がした。彼はこんな樂しい仕事があるのに何うして峰子などに心を取られたのであらうと夜中に目を覺ました時などしばしば考へた。すると、彼は次第に峰子が鼻に附いて來た。殊に野外で寫生をしてゐる時など、一所懸命に描きながら、『目に附いた女房やがて鼻に附く、カ、』などと川柳の句を獨言つことなどがあつた。彼が眞に繪を描くことの樂しさを、それが生甲斐であることを、知つたのは此の時が初めであつた。その頃の或る日、彼が繪の事を考へて一人で悦に入つてゐると、「あんた！」と彼女が突然呼びかけた、「どうして、あたし達には子供が出來ないんでせう？」彼が答へないでゐると、「あんた、昔、病氣した事があるんでせう、だから、……」「病氣した事はあるがね……、」彼はやつと答へた、「併し、それはすつかり直つて、子供の出來る出來ないに差支ない、と病院で證明されたよ。あぶないのは君の方やろ？」と思はず國言葉を出した。「ぢやあ、あたし、今日でも見てもらつて來るわ。若しあたしの方が大丈夫だつたら、あたしの方が新しく見てもらつた譯だ

から、矢張り、あんたのせゐよ、」と彼女は向になつて叫んだ。そんな問答が暫くつづいた後で、「あたし、今日、あんたに云ふ事があるの、」と彼女は改まつて云つた、「前から、あたしが、幾らうるさく云つても、未だ籍を入れてくれない。といふのは、どういふ譯なの？」後の方が涙聲になつたので、「それは、」と彼は考へ考へ、「この間、君がその話をした時、國の母に手紙を書いたことを知つてるだらう、……そしたら、母から、お前のええやうにしたらいいと云うて來たことを、たしか君に話したらう、」「……ぢやあ、あんたはあたしの籍を入れるのが嫌なんでせう、さうよ、さうよ、屹度さうよ、……逃げようとする位ですからね、……」純東京辯でこんな風に捲立てられると、辛うじて東京語を使つてゐる大阪人の島木は沈默するほか手がなかつた。又かういふ場合は沈默が勝つた。併し結局この時は彼の負になつた、何故なら、この後で、來年の何月何日に必ず正式の結婚をするといふ一札を書かされたからである。正式結婚承諾書を受取つてからの彼女は、これ迄とは反對に、彼が成るべく繪を描くことを望むやうになつた。それは島木自身さへ少し薄氣味惡くなつた程であつた。が、彼は、そんな氣味惡さは直ぐ忘れてしまつて、三日に一度が二日一度、二日に一度が一日一度、毎日一度の三時間が五時間に、五時間が十時間に、といふ風に、彼の繪を描く度數と時間の數が加速度的に多くなつて來た。彼の心が繪に向けば向く

程、彼の心と體は彼女から背いて行つた。——

彼が正式結婚承諾書を書いてから半年程後の事であつた。その事件の起る一週間程前から、彼等が寢る時に、何處から手に入れて來たものか、彼女が、鍵のかかつた箪笥の引出の中から、短刀を取出して、彼等の共用である蒲團の下に入れる習慣が始まつた。彼がその譯を聞くと、「いつ死にたくなるかも知れないから、」と彼女は云つた。その習慣が始まつた日から一週間程後の或る朝、「ぢや、繪とあたしと何方が好き？」「そんな事は云へん、」「云へんといふのは、あたしより繪の方がずつと好きといふ事なんでせう、……薄情者！」云ふなり、彼女は島木の體を兩手で摑んで泣きながら搖振つた。「どうしたんや、どうしたんや！」と彼が叫んだ位では興奮した相手には答へなかつた。と、かう叫ぶと一緒に島木が蒲團の上に立つたのと、その聲を聞いて峰子が立上つたのと、殆ど同じ瞬間だつた。その瞬間、島木ははッとした。いつの間に取出したのか彼女の手に鞘を拂つた短刀が光つてゐた。「危い！　危いやないか！」彼は夢中で叫んだ。「危いことは分つてるわよ！」云ひながら、血相を變へた彼女は、どういふつもりか、そのきらきらした物を氣違ひのやうに振廻した。「お前は、僕をどうかするつもりか！」彼も興奮した聲で叫んだ。「ええ、殺すつもりよ！」白く見えるほど眞青な顏をして、彼女は體を震はしながら近づ

いて來た。「その代り、あんたを殺したら、あたしも生きてゐないつもりよ！」自分の使つた激しい言葉のために一層興奮したやうに思へたので、彼は夢中で彼女の手にある物を取上げようとした。自分より女の方が幾らか背が高いといふ事がちよつと氣になつた。その間、一秒の半分だつた。突然、「あッ！」と叫ぶ聲と共に島木は、右手で左の親指を握つて、峰子の傍から二三尺飛退つた。負傷した一本の指から出る血がそれを握つてゐる五本の指の隙から滲み出てゐるのを見ると、今度は島木より峰子の方が驚いた。彼女は短刀を部屋の隅に拋出して、島木の傍に走り寄つた。彼女は青くなつて狼狽しながら、「何か、繃帶にするものを、何か、繃帶にするものを！」とおろおろ聲で叫んだ。「手拭でええ、手拭でええ！」と流石に土佐人の血を受けた島木は落着いた聲で云つた。併し、なかなか血が止まりさうになかつたので、手拭の裂いたのを繃帶代りにして、彼は醫者に行くために着物を着替へた。彼が止めるのも聞かないで、彼女も、簡單に着物を着替へて、彼に從つた。最寄の醫者は彼の傷口を三針縫つた。——この事があつてからは、彼女は彼の傍を片時も離れなかつた。便所に行く時でさへ、彼女は彼を離れなかつた。彼はますます困つた。——

これはもう逃げる外はない、と島木は思つた。――この考へは牧健作から教へられたのであつた。その頃、牧は、急に國から母が來たので、本郷の或る町に、母と二人で小さな一戸を構へてゐた。牧が一戸を構へて間もない頃、島木は峰子を速れて牧の家を訪問した事があつた。峰子が牧の母と三十分ほど散歩に出た時、島木がその頃の煩悶を牧に打明けると、「峰子さんのやうな婦人は、此方が逃げるより外に手がない、と僕は思ふね」と牧は云つた。「しかし、逃げるは逃げても、行場がないからね。」「行場がないといふのは？」「一ぺん逃げて失敗した事があるネ。……友達の家ならどんなとこへでも乘込んで來よるからね……。あのヒステリイ一流の遣方で泣きつかれると、いくら僕が隱れてゐても、友達は大抵あのヒス子に同情してしまふからね。……あの女は、若し僕が大阪の家に逃げて行つたら、大阪まで來兼ねないからね。……」「君の云ふ通り、僕の家は勿論、東京中の友達の家はみな駄目かも知れないが、……この近くに君の從兄さんが、……何でも非常に偏屈な、裁判官の從兄さんの家があつたね、たしか君の學校時代の保證人だつた？……あそこなら絶對に安全地帶だよ。峰子さんも、あの家が窮屈な事を、たしか知つてたと思ふが、……」「君は實に物覺えのえゝ男やな。……從兄は從兄だが、年は僕より十五も上やから、僕は一年に一ぺん位しか行けへんね、……その代り、君の云ふ通り、あの從兄は用事の外

は家の者と口をきいた事がないといふ程の變人やから、あの家全體が變人の感じがある。……なるほど、彼處ならいくら長山峰子が訪ねて來よつても、びくともしよれへんやろ。有難う、有難う。」「まあ、安心し給へ、あの家は君にとつて、巴里のノオトル・ダムのやうなものだよ。」「巴里のノオトル・ダムと云ふのは、どういふ譯や？　ノオトル・ダムといふ大きな寺は巴里で見たことがあるけど、……」「僕もよくは知らないんだが、どんな罪人でも、一旦ノオトル・ダムの中に逃げ込んだら、誰でも、その罪人を捉へたいと思つても、一歩もこの寺の中に入る事が出來ない、といふ話だ。」――この話を島木を思ひ出したのであつた。

或る朝、その日は傷口を縫つた絲を抜いてもらふ日だつたので、朝飯の支度をしてゐた峰子に、「ちよつと絲を抜いてもらひに行て來るよ、」と島木は何氣なささうに云つた。その調子が實に自然に行つたので、いつもなら直ぐ一緒に行かうと云ふ彼女が、それを云ひそびれてしまつた恰好で、「ぢや、あたし……お歸りになる迄に、御飯の拵へをしときますから……」と云つた。この時の、懇願するやうな――といふより、あらゆる女の弱さを訴へるやうな――優しい光を湛へた目は、島木が、いつでも目を閉ぢると、ありありと思ひ出せる目であつた。が、この時は、この目を後に感じながら、後髪を引かれる思ひを感じながら、彼は、心を鬼にして、善きにつけ惡き

につけ、さまざまの思出を持つてゐる家の入口を跨いで外に出ると、出て半町ほど行くと、次第次第に足を早め、それでも二三度後を振向いた、が、或る横町を曲ると、いきなり、一目散に走り出した、「ノオトル・ダムへ、ノオトル・ダムへ！」と口の中で祈るやうに稱へながら。——

島木は、裁判官の從兄の家に十日ほど居候をしてから、その從兄の母に進められて、彼女の里の家に長年下女奉公をしてゐた者が澁谷で寡婦ぐらしをしてゐる、その者の家はさいはひ植木屋で、而も閑靜な所にあつて家族も小人數だといふ、——その家の離の部屋を賄附で借りることになつた。彼が從兄の家にゐる間に、果して峰子は訪ねて來たが、この伯母が巧く宥めて歸した。彼は、伯母と相談して、今直ぐ大阪の實家に歸つたら、峰子のやうな性質の女だから、大阪までも訪ねて行きかねないから、この澁谷の家の離で半年ほど一年でも落着いて勉强することに極めた。——

牧がこれ等の話を聞いたのは、島木が澁谷の植木屋の離に落着いてから二月程後に、從兄の家に來た序にと云つて彼の家に寄つた時であつた。その後半年近く、島木は牧の家に姿を見せなかつた。島木はその半年程の間に豫定通り落着いて勉强した。その甲斐があつて、その年の秋、彼

はB協會の展覽會に可なりの大作を出品し、入選したばかりでなくB協會賞を得た。その年の秋の末頃、再び牧と島木はしばしば往來するやうになつた。しばしばと云つても、一週間に一度か十日に一度か半月に一度かぐらゐであつた。この一週間に一度か十日に一度か半月に一度かぐらゐといふのは、その頃濱町にあつた大阪風の private prostitute の出入する家に、誘ひ合つて行く習慣が彼等に出來たからである。これは、淺草の高い塔の下の P.P. より幾らか高級であるために、彼等のやうな文學書生や畫學生には、せいぜい此の位の度數より通へなかつたからである。この時は、峰子のために辛い經驗をしてまだ日數の立つてゐない島木の方が大事を取り、島木より幾らか年下であり貧乏とその他の理由のために島木ほどの戀愛の經驗のなかつた牧が、不覺のために、島木が峰子のために艱難したより以上の艱難を嘗める破目に陷つた。尤も、この時の島木の相手が黑人風であつた反對に、牧の相手が素人風だつたからでもあるが、牧の場合は、如何に二十六歳とはいへ、全く不覺といふより言樣がなかつた、といふのは、彼は相手の女と知合になつてから一月もしない內に同棲したからである。尤も、女の方から押しかけて來たのでもあつた。彼女は醫者の娘で兩親もあり姉も弟もあつた。牧は、峰子以上のヒステリイ病者である此の女の性質を直すためには、兩親に會はす事が一番いいだらうと考へた。そこで、或る夜、そ

の女と一緒にその女の兩親の家の前まで行つて確めてから、牧は、それから二三日後、本郷三丁目で偶然島木に會つたのを幸ひ、青木堂に誘つて、その話をしに行く役になつてくれないか、と賴むと、島木は、顏が歪んだのではないかと思はれるほど、迷惑さうな顏をした。それは牧を暫く啞にしたほど深刻な表情であつた。それから間もなく島木は大阪に歸つたが、青木堂で彼が表した迷惑の相は、牧の頭に長く殘つたばかりでなく、その後、彼の當時の生活を反省させるのに非常に役立つた。不思議な事は、島木に女を置去りにする法を敎へた牧が、島木の場合と形は違ふが、島木が逃げた年から三四年後に、女から逃げる法を工夫して實行した事であつた。

島木には、再び會はない女の印象が、彼の遁走する朝出がけに、「……御飯の拵へをしときますから……」と云つて彼を見た懇願するやうな女の目であつたが、それと强ひて對照させると、牧には、その女を最後に見たのは、その女の最後印象は、動かうとする電車に、車掌に促されながら、送つて行つた彼を見返り勝ちに、ひよいひよいと、飛乘つた女の後姿と、秋の日の光にちらちらと光つた女の白足袋の足とであつた。——

その頃から十七八年の年月が立つた。

牧は、島木と竝んで京都の東山の麓に當る黑谷の町を默り勝に歩いてゐる時、昔の自分自身の事より、今ならんで歩いてゐる友達の昔の事を思ひ出しながら歩きつづけたが、回想は唯の回想で、今の彼にはそれ等の事どもは殆ど何の興味もないことを見出した。併し、恐らく彼と竝んで歩いてゐる島木新吉は、牧健作に劣らぬ、否、牧以上の、復雜な過去を持つてゐるが、回想に殆ど何の興味もないことは牧と同じではあらうが、彼は、牧のやうに回想などはしないで、今あるもの、今起りつつあるものの外、何も考へてゐないであらう。——そんな風に考へると、人間として、島木は、自分などより、確に役者が一枚も二枚も上のやうに、牧には考へられた、尤も、回想は牧の仕事の役に立つものではあるが。——

「昨日、變な所で友田に會つたよ。……そのとき、友田から、この間『にんじん』を見せてくれた、小森虹文の事を可なり委(くは)して聞いたが、面白かつたよ、」と牧が云ふと、

「友田といふ人は、面白い人やなア。……あの人は、變つてるなア。」島木は、小森の事は抹殺して、友田の事だけ云つた。併し、それは、褒めてゐるのか、貶してるのか、感心してゐるのか、分らない言方(いひかた)であつた。——

「……さうさう、來るとき、汽車の中で、松尾松風に會つたよ。大阪へちよつと寄つたらどうで

す、と云ふと、大阪は羨しいな、と云ひながら、忙しくて寄る暇がない、と云つてたよ。……」

「何でやね？」

「東京に殘してある子供が心配なんださうだよ。」

「何で又、あない子供が氣になんねやろ？」

「君、近頃の彼の小說よんでる？」

「ときどき讀むけど、僕等には、昔の戀愛もんの方がやつぱり面白いなア。……」

その時、眞如堂の前に來たので、「ちよつと入らうか、」「ふん、」「この三重の塔ちよつと面白いね、」「ふん、」「少し疲れたな、」「一服しよ、」「一服すると云つても、こんな寺の中は有難くないな。」で、眞如堂の前を通り過ぎて、西の方へ、三高の方へ出る道を歩きながら、

「君の家は實に呑氣でいいな。親子三人、と云ふと、有觸れて聞えるが、……君んとこは、友達みたいでいいな、女中さんまで、友達みたいだなア。」

「ふん。……併し、こないだ、うちのやつが國へ歸りよつた時、——母親が危篤いふんで、子供と一緒に行きよつたんで、——女中と二人きりやつたけど、却つてその方がええなア。……僕の方が女中の使ひ方は巧いね。食ふもんかて、賣りに來よるのを、僕はまめな性分やよつて、自分

に見つくらうて、後、女中に、自分の好きな物を料理さすから、その方が却つて旨いよ。……」

「君んとこの奧さんなんか、いい意味でちつとも邪魔にならないから、いいと思ふがな。」

「うん。邪魔になれへんけど……、まあ、長い間見とをるよつて、筆の洗ひ方や、古いカンヴスの始末や、そんなもんは、女はけちやから、知らん間に、洗たり、始末したりしよるなア……」

「また、友田のことだが、僕は明日彼を訪問することになつてゐるんだが、友田と一番親しくしたのは二十年ばかり前になるから、突然彼と會つても見當がつかないんだ。が、それで、豫備知識、といふと變だが、君は同じ大阪だから、ときどき會ふことがあるだらうから……？」

「豫備知識なんて、そんなむつかしい事は何やけど、……僕かて滅多に會ふことがないが……却つてフランスにゐる時の方がよう會うたぐらゐや。」

「友田がフランスへ行つたの？」友田の話がこれまで隨分出たのに、彼が洋行したことを少しも云はないのは、如何にも島木流だな、と牧は思つた。

「君、知らんかつたかな。友田は、フランスにも僕等より長くゐたし、ドイツにも隨分ゐたらしいよ、……あの人は、文學でも、繪ェでも、音樂でも、何でも知つてるけど、……結局、今は音樂に一番凝つてるらしい。文學はあんまり深入りすると樂しくなくなるし、繪ェも、——友田君

は僕等より西洋の繪ェや彫刻を深山見てるやろ、――繪ェも、あんまり澤山見ると、飽いて來る、と云うてるさうや。そら、友田君の家には、西洋の繪も可なりあるし……」

「彼が買つて來たの？」

「そや。日本の繪ェも、古い繪のええ物も隨分あるやろ……そら、あない仰山あつたら、誰でも飽くわ。それで、今は、藝術のうちでは、音樂が一番純粹で、人の心を樂しますし、清めるし、……僕等にはよう分らんけど、研究所へ來る學生の中で友田君のとこへよく行つてるのがあるので、そんな人から聞くんやけど。……君の云ふ御影の友達といふのは、音樂の友達で、大阪で音樂を語れるのはあの人一人やさうや、相馬何とかいふ名アや、……」

「友田君、細君あるの？」

「死んだよ、もう五六年前や。大阪の何某新聞で美人投票をした事があつて、その一等當選の美人やさうや。子供が二三人あるさうやが、うるさい云うて、細君の里へ預けたあるさうや。……この氣持は僕にも分るがなア。……」

「それは僕にも幾らか分るな。……實はね、昨夜、友田に連れられて、曾根崎のお茶屋へ飯を食ひに行つたんだが、どういふ譯か、藝者は一人も呼ばなかつた、無論よぶ必要はなかつたんだが

ね。ところが、この家は僕の古戰場だ、と友田が云つたがね、君、知つてる、その意味を？」

「それは北（註、曾根崎新地を云ふ）で有名な話や。まだ細君が生きてた時分のことや、――僕も噂で聞いてるんやから委しい事は知らんけど、――友田君の文學熱中時代の時分らしい。毎日何時間づつか忘れたけど、ただ本を讀みに行くだけやさうや、お茶屋へ行て、をかしなもんやなア。併し、その間、かならず、藝者を一人傍に置いとくんやさうや。君も知つてるやろが、大阪は、東京と違て、藝者何人呼んだかてそないかかれへん。それを、友田君は、三十分交替か、一時間交替か忘れたけど、一人だけしか傍に置かんといふ規則やさうや。……」

「さうすると、北の藝者は、みんな何度か、友田君の、その一人座敷に出てる譯だね？」

「いや、それが三十人だけに限られてたんや。……そン中に、友田君の好きな藝者が一人ゐると云ふんや。それがをかしいね、友田君はそン中の誰が好きちふ事を云へへんもんやから、本人の友田君の外は誰にも分らん譯や。……」

「到頭わからず仕舞か？」

「わからず仕舞や。」

「それがどうして古戰場なんだ？」

「それは僕にも分らん、誰にも分らんやろ。」

「友田君は、僕は好きだが、さういふ趣味はさすがの僕にも分らないな。趣味としても病的のやうな氣がするね。」

「併し、僕はちよつと分るやうな氣もするな、分らんやうな氣もするけど、……」

「さう云ふと、僕にも分るやうな氣がするけど、……併し、島木君、君や僕のやうに、家庭にも、子供にも、餘り興味を持たず、勝負事に一切興味がない、煙草も、酒ものまん、大抵の遊戯にも餘り興味がない、ただ仕事だけが好き、――といふやうな人間が一番わからないと僕は思ふ、屁理窟みたいな事を云ふやうだが、僕自身が自分を客觀して見ても分らない。……かういふ人間が、友田君の趣味が分るとか分らぬとか云へた義理ぢやないぢやないか。……併し、その分らない人間の中でも、友田君が大將かも知れないぜ。……まあさういふ屁理窟は止めて、……それだけ分つたら、明日(あした)の友田訪問は別の日にして貰つて、君、明日(あした)、奈良へ行かないか?」

「奈良も、もう新綠の時期が過ぎたから、つまらんよ。というて、京都もあんまりぱツとせんな。」

健作はその翌日の燕で東京に向つた。

一と踊

一

私は、考へると、やつぱり不思議に思はれてならぬのである、そんな町、これまで地圖の上でも、碌に目を止めて見たことはなかつたのである。それが、三十歳の或る秋の日のこと、何といふ事もなく、東京から汽車で十時間ばかりの道程(みちのり)のその町に、友達と二人で出かけたのであるが、沿道は隧道だらけだし、汽車はガタ馬車のやうに搖れるし、私たちは、途中で何度、いつその事下りてしまはふかと云ひ合つたか知れない。それは、たつた一昨年のことで、指折り數へて見ると、その日から未だ二年の月日さへ立つてゐないのである。

だが、今や私には、その町の停車場の、屋根一つない貧弱なプラツトフオオムも、二三等の區別もない一室切りの小さな待合室も、驛前に並んでゐる繭だか絲だかを入れる、一寸(ちよつと)見ると兵營のやうな、窓の澤山附いてゐる大きな白壁造りの土藏の行列も、停車場前から一直線に走つてゐるでこぼこの道も、道端の家々の前を流れてゐる溝川も、青いペンキ塗りの郵便局も、その郵便局の建附けの悪いドアも、さては二つに別れて急な阪道になる道の傍に立つてゐる石の地藏も、その道の突當りにある私の宿屋のいつも硝子が壞れたままになつてゐる瓦斯燈も、それ等は悉く、

恰も私が生れた日以來ずつと見馴れて來たもののやうに、私の記憶の藏の中に收められてしまつたものである。

だが、かうはいふものの、私は、その町につづけて住んでゐた譯でもなかつたのである。その初めの時は二週間ばかり、二度目には一ヶ月餘り、三度目にはほんの五日程、さうして四度目の時は二ヶ月近く、――それが去年の春のことであつた。さうして私はその町の一人の藝妓と犬のやうに夫婦になつたのである。さうしてそれが私の今の女房なのである。

五月、――彼女は彼女の家財道具を引包めて、彼女は元東京の者であつたが、十年間その町に住んでゐたのである、彼女にとつて十年間の浮世の町、私は今日限りさらりと身を洗ふのだ、さらば、さよなら、と惜氣もなくその町を引上げて來たのである。されば、その秋に行はれた國の國勢調査の日、彼女はけろりとした顏をして、生れた時から私に連れ添うてゐたやうな顏をして、調査員に向つて、戸籍にもあります通り、私は何某妻でございます、としやあしやあと述べたことに違ひない。彼女は私の家に來て以來、あんな山の中の町、鬼に喰はれてしまへ、と思つて更に振り向かないのである。

けれども、私は彼女と夫婦になつた後も、彼女に隱れて又二度もその山の町に出かけて行つた

のである。その譯はかうである。――初め、私はその町で今の私の女房でない別の一人の藝妓に戀したのである。その女は藝名をゆめ子と云つて、當歲の子を抱へてゐた。けれども私たちの間には到頭怪しい關係はなかつたのである。

どんな男にも、どんな女にも、いろいろ違つた面があるものである。それが白と黑と程の違つた面でも、その白もその黑も、僞ではないところのその人間の一部なのである。例へば、一人の辨慶が泣かぬ辨慶になつたり泣く辨慶になつたり、一人の賢女が教育家であつたり道ならぬ戀に陷つたりすることは、それぞれ皆人間の自然なのである。つまり、私もずゐぶん惡い男であり、その子持藝妓も案外だらしのない女であるかも知れないが、神の覺召しか、或ひは彼の惡戲か、私は彼女と組合はされた場合、お雛樣のやうに二人は向ひ合つて、童貞と處女のやうに二人は話し合ふのである。――何處を見ても、いつの折も、何とも早や淺ましい、嫌なことだらけの世の中である、併し、私とあなただけで、せめて一つ夢のお伽話をこしらへませうよ、とまあかういふ譯なのであつた。

だから、別れてゐると、二人は手紙を書き合ふのである。だが、その手紙には一切戀しいとか、好きだとかは認めぬのである。二人は又しばしば贈物などし合ふこともある。が、私は大抵わざ

と彼女の子供へのものを贈るのである。すると彼女は私の母への物を贈つて來るのである。念には念を入れよ、用心には用心をしないと、夢のお伽話は壞れるのである。ところが、私がその町に二度目に出かけて行つた末の頃に、私達の間に今の私の女房が現れて、四度目の時の中頃に、私が彼女に攫はれたのか、彼女が私を攫つたのか、遂に取返しつかぬことになつた次第である。

二

その私の女房といふものはなかなか悧好者で、聢者（しつかりもの）で、もつとも十年も藝妓をしてゐたのではあるが、三本の簞笥と二本の長持と、その外茶棚やら本箱やら、普通の書生の持つやうな本箱を二つも、それから長火鉢やら、客火鉢やら手水鉢から下駄箱までも、それ等を先きに述べた隧道を幾つも通るガタ馬車のやうな汽車に、三十何箇の荷物にして持つて來たのでも分るであらう。當時彼女はもう一本の藝妓であつたばかりでなく、藝妓屋の主婦でもあつた。配下に藝妓さへ抱へてゐたものである。さうして更に感ずべきことには、彼女の同僚であるところの、その町の七十人の藝妓たちは、無論旦那がない筈がないが、しかし誰が、どんな人が、彼女の旦那であるかも誰も知らない位であつた。かういふと、彼女は如何にも海千山千の剛の者らしく聞えるかも知

れないが、無論さういふ類の何かには違ひないが、私と同じ年の生れで、私と似て至つて氣弱の性質で、姑である私の母にもよく仕へ、夫である私にも誠に柔順で、それは中中感心な女房である。

ところが、彼女は、ずゐぶん頭も働き氣の利（き）く者ではあるが、何處やらうつかり者のところもあるのである。彼女が私の伽藍洞（がらんど）の家にその三十何箇の荷物を運び込んだ時、折から私は旅に出てゐて留守中であつた。さうして三日目に私は歸つて來たのである。一週間程前、明家（あきや）のやうな體裁の家から旅立つた私は、歸つて來てその同じ家の中にそれぞれ安物でない相當な家財が充滿し、それ等が悉く整頓されて置かれてあるのに驚いたことであつた。ところで、それ等の一つの簞笥の中からと、下駄箱の中からと、私は一枚の洗張りして間もない銘仙の男の丹前と、二三度履いたばかりの男の下駄とを見出してちよつと困つたことである。だが、私は、それに就いて默つてゐたばかりでなく、私自身の丹前を洗張りしてゐる間、どんな男が着たのだらう？　その女房の持つて來た丹前を着、お湯に行く時などの不斷履きに、どんな男が履いたのだらう？　その女房の持つて來た下駄を履いたものである。

これは然し女心の物を惜む性質から、思ひ切つて捨て兼ねて、彼女が持つて來たものかも知れないが、その事がなくても、やつぱり彼女がうつかり者である證據は、やはりその時分のことで

あつたが、「もう大抵入らないと思ひましたし、母さんもこれは入らないと仰いましたが、念の爲めに、紙の類は、新聞でも、この中に入れておきましたから、……」と彼女は云つて、押入の中の一つの支那鞄を指さした。「さうか、さうか、」と私は答へて、その日はそのままになつてゐたが、その翌日何かの用事があつて、その支那鞄の中の紙屑を搔き探してゐた。その時、私は、一冊の小さな見馴れない古びた手帳を手にとつて、何だらう？　と思つてばらばらと中を繰つて見た。それは彼女の日記帳だつたのである。「何年何月何日」と細いペンの字で書いてあるのが一番初めに目についた。もう五年ばかり前の月日の事である。

私はふと好奇心に誘はれて讀んで見ると、それは、特に彼女が懷しい何某といふ手帖の中に書いてある男と、伊香保に遊びに行つた二日間だか、三日間だかの日記なのである。その記事に依ると、彼女は、自分の町の停車場から一人で乘つて、汽車が乘換へになる或る驛でその男と會つて、二人で樂しく出かけて行くのである。高崎から伊香保までの電車の中で、愛嬌のある醉拂ひの男に會つた話は、私がまだ彼女と客と藝妓として坐つてゐた時分に、彼女からよく聞かされたものであるが、その事もこの日記の中に出てゐるのである。その話を聞いた時にも、無論彼女はそんな事とは云はなかつたが、私は心の中で誰か男と一緒に行つたのだな、と察してゐた。何故

といつて、彼女は頗る旅の見聞の狹い女で、旅行の話といへば、子供の頃箱根に行つた話と、この伊香保の話と、もう一つ何處とかに行つたこと切りない、その何處とかの旅行談には、必ず連れの大勢の客や藝妓たちの行動をまぜて話すのに、この伊香保の話に限つて決して彼女自身の身邊に就いて話さなかつたからである。

その日記の中で、彼女は、その男と夫婦として三日間行動したことを、女らしい嬉しさを、廻らぬ筆に現はして、その途中の電車中での所見にまで、嬉しさの情を現はしてゐるのである。私は、それを讀み終つた時、元よりよい氣持にはならなかつたが、そのまま支那鞄の紙屑の中に押し込み、自分の探し物を止めて、町に散歩に出たことである。が、それに就いては固より私は彼女に何にも云はなかつた。

三

さうして彼女と私と連れ添つてから、早いもので丁度かれこれ一年になるのである。

さて又一年ほど前のことであつた。夕方、私たちが、母を合して三人で、夕飯を食つてゐたところへ、女中が一束の郵便を運んで來て、私たちの傍でそれを改めながら私の前に置いた時に、

一通だけ「これは奥様」と云つて一つの手紙を彼女の前に置いたことがあつた。

彼女は最早や實家がない身の上で、唯一人の義理の妹の外、どこそこに叔母が、どこそこに叔父が、又どこには以前父の店にゐた者が、などと話すことがあるが、妹と叔母との外には殆ど文通などしてゐない。見ると、今來た手紙ははつきりした男の筆蹟で、彼女はそれを女中の手から受取ると、ちよつと顏色を變へて、あわてて懷の中に扭ぢ込んだ。固より、私も母もそれに就いて何の質問もしなかつた。「悪い手紙らしいな、」としかし私は思つたが……。

その晩も私は散歩に出て、夜遅く歸つて來て、直ぐ床に就いたが、氣がつくと彼女の顏色がいつになく冴えぬのである。いつもは屹度晴晴しい顏をして、今夜は夫の機嫌はどうだらう？ と半ば伺ふやうに半ば活氣づけるやうにする彼女が、その晩に限つてそんな餘裕を失つて、ひどく自ら悄氣てゐるのを見て、私は直ぐ、ああ、あの夕方の手紙のことだな、と思つたが、默つて床に就いたのであつた。

ところが、彼女は、私が寢てからも、隣の間で、いつまで立つても床に就かないらしいのである。彼女は何かひどく煩悶してゐると見えるのである。そこで私は思ひ切つて「お前の、僕に都合の悪いことで、つまり秘密で、僕の氣持の悪くなるやうなことで、それが隱せることなら成る

べく隱しておいてくれる方がいい。が、どうしても隱し切れないことや、どうしても自分で始末の出來ないことがあるなら、遠慮なく云つてもいい、その方が氣持がさつぱりするだらう。」と私は云つたのである。すると彼女はしくしくと泣き出したのである。

「夕方來た手紙のことか？ どうしたんだ？」と私は努めて優しく云つた。

「濟みません、濟みません、」彼女が泣きながらつづけて云ふところを聞くと、今から三年程前に彼女はその男から五百圓の金を借りたが、半月程後にそれを返さうとすると、「まあいいよ、今は。いづれ一萬圓も君に金がたまつたら返してくれ給へ、それ迄はまあ預けておかう、」と云つたのださうである。

「お前はその時分その男と關係があつたのか？ どうせ話すのなら、話の分るように、隱さずに云つた方がいい、」と私が云ふと、「ありました、」と彼女は俯向いたまま云つて、「が、直ぐに、一ケ月しないうちに切れました。その人が外の人と關係の出來たことを聞きましたので、私の方からお斷りしたのです。その時お金を返さうとしたのです。」

「差支へなければ、その手紙を見せてごらん、」と私は云つた。見ると、「男をこしらへて逃げて行く金を君に用立てはしない、どうしてくれる？ 返事を下さい、」と云ふやうな簡單な意味のも

のであつた。彼女が云ふには、「今から半月程前に葉書で初めてお金の請求狀のやうなものを突然よこしたのですが、それはそんな請求されるやうな筋のもんではございませんから、さう書いて返事を出しておいたのです。」

「さうか。その金は兎に角僕がこしらへよう、」暫くしてから私は云つた。「それから、ついでだから、今後又、そんな、お前も煩悶し、僕も氣持の惡くなるやうな事で、底の割れて來さうな心配のある話があるなら、ついでに今みんなしてしまはないか。お前のたくさんの家財道具や、抱へ藝妓の着物や帶なんかのことで、又どこかから抗議を申込んで來やしないか？」

「いいえ、」彼女ははつきり云つた、「それは私が夢廼家の年が明けて、二度目に自分で三春家に抱へられた時のお金とか、その他一切自分のお金で買つたのです。外にもう何もあなたの御迷惑になるやうなことはないつもりです。」

四

實際、今の彼女の量見としては、そんな町の思出や、幽靈や、みんな消えてなくなれ、私は今正當な妻である、忘れられるものならあんな町のこと皆忘れたい、私の今迄の生活は今日の日の

爲めの用意だつたのだから、ねえ、あなた、あんな町のことなどあなたも忘れて下さいな。——さう彼女は心に祈つてゐるに違ひないのである。——

けれども、私には忘れられぬのである。だから、私は彼女と住んでからの一年の間に二度も、今度と合して三度も、彼女に隱れてその山の町に行つたのである。

彼女が私にこの町に行かしたくない理由はいろいろあらう。が、その最も大きな理由の一つは、嘗て彼女の同僚であつた、あの子持藝妓のゆめ子と私との關係である。彼女にして見れば、ゆめ子と私とがそんなお伽話の關係であるとはなかなか信じられないのである。よし又それを信じたところが、そのお伽話がいつまでお伽話の境に安定してゐよう？　と心にかかるのである。彼女は、そのゆめ子の姉さん藝妓でありながら、不意に現はれて、鳶のやうに私を攫つた事を思ひ出すのであらう、その腹立まぎれにゆめ子が彼女に就いての知つてゐる秘密のある事ない事を私に告げ口しないものでもない、……それからそれと考へると、彼女の心配は三十何箇の荷物にも這入り切らないほどに、次第次第に殖えて來るのであらう。

「どうぞ後生ですから、」と彼女はしばしば私に云ふのである、「外にどんな好きな人をおこしらへになつても、私は決して何とも申しませんから、どうぞ、あの町にだけは、行つて下さいます

な、後生ですから。」

「よし、よし、」と私は答へるのが常であつた。私だつて彼女の量見を推察して同情しないものでもないのである。

けれども、私は、たまたま私の商賣が著述業であるのを利用して、仕事をするために、家では落着いて出來ないといふ理由で、旅に出るのである。さうして旅先でそれを仕上げて、二日なり三日なり家の方の體裁をごまかせる餘裕を見出すと、そつとその町に廻つて來るのである。さうして一年前のやうに、私の愛する子持藝妓のゆめ子と、お雛樣のやうに向ひ合つて坐つて來るのである。唯それだけの事なのである。彼女の次第に大きくなつて行く子供の爲めに、玩具とか、襦袢とか、靴とか、そんなものを買つて行つては、その僅ばかりの逢瀨の一二日を、彼女と彼女の子供と、さうして私との三人で、浮世の苦勞の風は何處の空を吹くか、人間の邪氣や罪や淺ましさの雨は何處の土に降るか、と云つたやうな顏をして、私たちは子供のやうな罪のない話をして、膝一つくづさずに行儀よく交際して、さうして別れて歸るのが常であつた。

子持藝妓のゆめ子も亦、珍しく悧好な、しつかりした、頭のよい女であつた。考へて見ると、今となつては彼女にとつて私は可なり不愉快な憎むべき男に違ひないのである。何故と云つて、

彼女は以前、よし私が彼女に戀してゐるやうに彼女は私に戀してゐなかつたとしても、町の噂では、現に私の女房でさへもそれを信じてゐたほど、私と彼女とは親しい仲だつたのである。それをおめおめと、――私はこんなにもう頭さへ禿げかかつてゐるやうな男であるが、客としてはそんなに惡い部類のものではないに違ひない、流石にあの人は子供まであるけれど、東京の、學問などする人間の目につくところがあると見える、結構な事である、とまあこれはお話であるが、同じ町の他の藝妓たちに羨まれてゐたのであらうが、――それをおめおめと裏切られて、年もずつと上の姉さん藝妓に寢とられてしまつた、何といふ甲斐性なしであらうと、人々に後指をさされたことであらう。藝妓としてこれは死ぬ程の恥に違ひない。その事もその事であるが、彼女は又彼女だけの考へとして、その事があつてから、私の顏を見る毎に、この人は常常あんな綺麗な口をきいてゐながら、やつぱりさうであつたのか、とこれは私流の考へ方であるが、折角のお伽話を無慘に打ちこはされた恨もあるであらう、それを未だにしやあしやあとした顏をしてやつて來るとは、呆れた人だ！　とゆめ子は心の中で思つてゐるかもしれないのである。

果して、私が女房を迎へた後に、彼女に隱れて、おめおめと、一度行き、二度行きして、ゆめ子に會つた時、私の心なしか、彼女の言葉や行ひは殆どこれまでと變らなかつたが、ただ何とな

しに冷たくなつたやうに私は感じ出した。もともと冷たく見える女ではあつたが、その冷たさの中に、私の慾目からであらうが、私には或る魅力があつたのであるが、今やさういふ事でなしに、彼女が眞から心の底の冷たさをちよいちよい私に對して、一度目の時、よりも二度目の時といつた風に、出して來るやうに思へてならぬのである。

併しそれは決して無理とは思へぬことである。若し彼女がもう少し毒婦型の女であるならば、此際彼女はうんと私に親しみを見せて、私が近附いて行つたところでぴんと撥ねつけて、私に復讐すべきものである。だが、誠に甘い話であるが、たとひ彼女がさういふ女であつても、私は私として彼女にますます私流の愛を覺えるのである。私も隨分をかしな人間である。

五

私が家でしばしば子持藝妓を褒める時とか、たまに彼女と友達のやうな文通をする時とか、さういふ時に、どうかした拍子に、私の女房はいろいろと藝妓の内幕話をすることがある。私は子供の頃、ふとした機會で或る市の藝者町に十年ばかり育つたので、今更女房から聞く迄もなく、いろいろな彼女等に就いての内幕は聞き知つてゐる。今や、それ等の藝妓の一人であつたものを

緣あつて女房に持つにつけて、私はそれ等の話を思ひ出すことは、私に決して快い氣分を與へないのである。

私の女房の云ふことに、何某といふ藝妓は、それは仕樣のない女で、或る男と思ひ合つた末、やつと一緒になつたと思つたら、今度は別の男に惚れて、かと思ふと、又別の男に口說かれたので、その方に靡いてしまつて……等、等、等と話すのである。そんな話はしないがよい、と私が窘めると、馬鹿でない私の女房はふと氣が附いて、すぐに話を變へるのが常であつた。藝妓仲間の腐つた話を聞くことは、私の女房はどれ程の程度のものかを知らないが、やつぱり引いて彼女の過去の身の上がさまざまと邪推される譯だからである。

或る日は又彼女は私の愛する子持藝妓の身の上に就いて話すのである。「あなたはどんな風に思つてらしやるか存じませんが、あの人はなかなか一通りや二通の人ではありませんよ、」と彼女は云ふのである。その話に依ると、彼女は初め或る男と堅く約束もし、深い關係もあつたのであるが、その男が兵隊に取られて東京に行かねばならぬ事になつた、そこで、二人の男女は實際端の見る目も氣の毒なほど別れにくがつた、彼女はわざわざ男が入營する前の日まで、東京まで送つて行つて別れを惜んだものである。

ところが、その男が兵隊に行つた二年の間に、彼女は腹に子を持つたのださうである。二年の後、兵隊から歸つて來た男に呼ばれて、彼女は俯向いてその男の前に坐つた時、男は「お日出たう、よく留守をしてゐてくれたね。然し、これでもう君と會ふ事もあるまい、さよなら、」と云つて、幾らかの金をくれたさうである。彼女は子のこぼれ落ちさうな腹をかかへながら、男の言葉を徹頭徹尾默つて聞いてゐた。さうして默つて金を受取つた、「ゆめちやんだつて辛かつたでせうが、男の方の心はまあどんなだつたでせうね。だけど本當によく出來た人だとみんな褒めました、その男の方を、」と私の女房は云ふのである。

尙、彼女の云ふところに依ると、ゆめ子の養母の、彼女の叔母は、その町の藝者家中で一番金を溜めてゐると云はれてゐるくらゐで、ずいぶん人でなしの評判の惡い人であるが、ゆめ子も一寸見たとこは大人しいが、あのお母さんの氣性をずいぶん受けてゐるといふ人の評判である。――その時の子が今の赤ん坊で、その子の父親から手切金と子の養育料として、間に入つた彼女の養母がいろいろと奔走した末に、可なりのお金を取つたといふことである。その上、また子が大きくなつた時の何とか料として、十五年後に拂ふ約束で金一万圓の證文まで取つたのださうだが、それは何でも間に新聞記者が這入つて、うまく騙し取られて破り捨てられてしまつたが、……な

どと私の女房はいろいろと惡い取沙汰をするのである。

それ等の話は、本當か、嘘か、どの位までの本當か、どの位までの嘘か、私は知る由もない。が、まあ、世の中といふものは何としたものであらう。けれども斯ういふ事は、恐らく藝妓仲間だけの話でなく、華族には華族の、金持には金持の、學者には學者の、さまざまのの階級の人間の間に、いろいろの變つた形で轉がつてゐることであらうか。――

だが、それは私と彼女との間に起つた事ではないのである。――私たちは、こんな事ばかりでなく、物事を常にこんな風に判斷して、世の中を渡つて行く必要があると私は思ふものである。だから、私は少しも變らず、今も尙その子持藝妓が懷しく、彼女の住む町がやつぱり私のお伽話の町であることに變りはないのである。

六

ところが、今から一ケ月ほど前のことである。或る日、しばらく音信の絶えてゐた子持藝妓のゆめ子から、突然私に手紙が來たのである。私は何とはなしに震へる手附でその封を切つた。私は胸を打たれた。

その一二ケ月前に、私は一人の友達と、私の女房に内所で、その町に行つた事があるのである。先きに述べた、それは、私が女房を迎へてから、隱れてそこへ行く第二度目の時であつた。その時のこと、――或る晩、私はその町から一里程はなれた隣の町に、ゆめ子と、もう一人外の藝妓と、私の友達と私との四人で、自動車に乘つて活動寫眞を見に行つたのである。その事が、後でその町の人の噂に上つて、私たちが何か隱れ事をしに行つたといふ風に看做されて、その町の新聞に載せられたのださうである。その新聞の切拔が彼女からの手紙の中に入つてゐたのである。

彼女の手紙が云ふのに、私がどんなに辯解しても人が承知しません、あなたと私とが決して汚ない仲でないことを、私は口悔しくてなりません、どうぞ、どうぞ、私を可哀さうと思召すなら、あなたからも、あなたと私との交際が潔白なものであるといふ事を、お手紙に書いて送つていただけませんでせうか、――ざつと斯ういふ意味なのである。

結局、これで、たうとう私たちの間に破裂が來た譯である。私は思ふのである。いふまでもなく、これは彼女が明かに私を袖にする氣持で書いたものに違ひないのである。恐らく彼女によい旦那が附いたのであらう、その旦那が、この新聞の記事を見たり、人の噂を聞いたりして、大きに怒つて、彼女を詰つたものであらう、彼女はそれをいろいろ辯解したが聞かれず、旦那の發言

でか、彼女の思附でか、いづれにしても二人一緒のところで、この手紙を認めたものに違ひないのである。何とも無理のない次第である。

私は直ぐに彼女の要求通りの返事を書かうかと思つた。が、さうしなくても、恐らくこの手紙を書いたといふことだけで、彼女の用は足りたのに違ひないと考へた。私は、女房に見られぬうちに、そツとそれを灰にしたことである。

けれども、私が彼女を愛する心はこれまでと毛頭變りはないのである。が、もはや私は、如何に彼女がまだ藝妓をしてゐたとしても、あの町に出かけて行つても、彼女を呼ぶことは遠慮しなければならぬことになつたのである。恐らく私はもう二度と彼女を見る事が出來ないかも知れないのである。

七

けれども、この文章の初めに書いたやうに、今、私は三度目で、その山の町に、女房に隱れて、今度は一人でやつて來たのである。さうして、此度はわざとこれ迄の行きつけの宿屋には行かなかつたのである。

汽車で、私は、屋根もない貧弱なプラットフォームに夜着いた。帽子を深く被つて、マントの襟を立てて、知らぬ宿屋に伸をつけた。私はそこの女中を呼んで、少しぐらゐ部屋は汚くても狭くてもいいから、奥まつた隅の方の、人目につかない、それで、便所に行くにも、湯殿に通ふにも、餘り長い廊下を通らないやうな部屋に通してくれと頼んだ。東京を出たのは一週間ほど前で、私はもう目的の著述の仕事は餘所ですまして、もはや家に歸るまで何にもしなくてもいい體になつてゐたのであつた。その町では宿屋に藝妓が入るので、夜になると、方々の部屋から、陽氣な聲が、一人の私の心をそそるやうに聞えて來るのである。

私は、晝間は、持つて來た小説本を讀んだり、又ぼんやり机に肘を突いたり、茶を飲んで煙草をすつて、煙草をすつて茶をのんで、さうして障子の間の硝子窓を通して山を見て暮した。山はこの世に於いて女と共に私が最も見ることを好むところのものである。だが、そんな風にして暮すと、一日は一年のやうに長い退屈な思ひがするのである、以前は、私はこの町に來る毎に、夜でも晝でも、一寸でも、間があると藝妓を呼んで、藝妓と窓の外の山を見て樂しみ暮した。藝妓は大抵ゆめ子を呼んだことはいふまでもない。今も、退屈だから、外の知らない藝妓でも呼ばうか、と幾度私は机の前の柱に取附けてあるベルを押さうとしたか知れない。だが、私は辛抱した。

さうして日が暮れると、帽子を深くかぶつて、私はその何を見ても最早や私の記憶の藏にあるところの、その町のいろいろを見て歩いた。そんな時如何に私の心が二十歳のやうにセンテイメンタルになつたか？　さういふことは讀者の想像にまかさう。私は何となく主人のない犬のやうな氣がした。この町は物の匂まで私の腸に染み入るのである。

さうして私はそこに三日滯在した。そんな風にしても、私はいつまでもこの山の町を離れたくない氣がした。けれども、それ以上ゐると、もう家の方にごまかしがつかなくなるので、三日目の夜の汽車でそツと來た町を、又そツと立つつもりでゐた。

その日の朝のことである。朝早く、まだ町の家々の戸が八分通りまで締まつてゐる時分であつた。私は、宿屋の裏門を出て、なるべく裏町を通つて、なるべく早く町外れに出て、さうして町の後の山に上つたのである。何をしようといふ目的があつてではない。唯、自然と、日の光の下に横たはつてゐるその町を、見ようと思つて、と云ふよりも、更に少年らしいセンテイメンタルな氣に襲はれてである。

山道を五六町上つたところに、右に入ると、その町の、春は櫻が咲き、秋は紅葉の美しい、小さな公園がある。私は、その公園への道を行かずに、道が二つに分れる角のところで、細い方の

草の生へた道を分け上つて、草の上に踞んで煙草を吹かした。私の足の下の方には掌ほどに小さくその町が見下ろされるのである。先づ目につくのは、その町の權威と財産であるところの、製絲工場の煙突である。どういふ譯からかそれ等の煙突はことごとく赤色に塗つてある。この前、この公園に今の私の女房やゆめ子等と一緒に遊びに來て、同じ町を見下ろした時は、それは僅か一年半ほど前のことに過ぎないが、當時生絲の相場は天井知らずで、これ等の赤色の百本の煙突は萬本あつても足りないかと思はれる程、黑々とした軍艦のやうな威勢のいい煙を吐いてゐた。ところが、今ではその相場が四分の一に下つてしまつたといふ話で、それ等の煙突の工場はこの所當分休業しなければならぬ狀態なのださうである。心なしか、私の目に、今はそれ等の煙突さへ、半年前の威勢に比べて、如何にも悄然として朝空の下に立つてゐるやうに見えるのである。

して見ると、それ等の煙突の何本かの持主の、私のゆめ子の子の父も、此頃は見らるるやうに商賣も不景氣だからなぞと云つて、彼女への仕送りを減らしたり、或ひは斷つたりしてゐないか知ら？　さうして又思ひ出したことには、先日私の女房に五百圓の金を催促して來た男といふのも、多分やつぱりそれ等の煙突の持主で、世の中の景氣が惡いにつれて、むしやくしや腹からあんな手紙をよこしたものか知ら？　それ等の男も今はあの煙突の下あたりで眠つてゐるか。子持

藝妓も眠つてゐるか。子は泣いてはゐはせぬか。泣いてゐるなら乳をやれ。乳を飲んで子が又寢入つたら、ゆめ子よ、朝はまだ早い、君ももう一度お休みなさい。……

その時、私の足下の道を麓の方から歩いて來る人の氣色がしたのである。見ると、柴でも採りに行くのか、脊中に四角な木の匡のやうなものを脊負つた、二人連れの老婆の姿が現はれたのである。二人とも、默りこくつて、肩を並べて歩いて來るのである、年は同年位の六十近くであらうか。彼女等は私のすぐ足下の道の邊まで上つて來た時、初めて何方かが、「一服しよか？」と云つて、路傍の石の上か何かに、多分その石が小さいので、小鳥のやうにくつ附いて並んで腰を下ろしたらしいのである。それは私の所から辛うじてその頭だけが見える位置である。

「大分暖けいね。」何方かが稍しばらくしてから云つた。煙草をすつてゐるらしく、紫色の煙が彼女等の頭の邊から、ぷかりぷかりと私の方に上つて來るのである。

「もう、へえ、山にも雪やなくなつたね。」又しばらくしてから別の聲が云つた。さうして後は紫の煙ばかりがぷかりぷかりと上つて來て、そのまま話聲はしないのである。

私は、その時、喉に痰がからまつて、オホンと一つ咳拂ひがしたくて堪らなくなつたのであるが、さうすると下の彼女等を驚かしはしないかと氣兼ねされて、幾度も唾を呑んで辛抱した。そ

の代り、今先きまでの變挺な感慨の氣分などは、彼女等の煙草の煙と共に、さらりと何處かに消えてしまつたと見えた。何鳥だかちろりちろりと私の頭の上の枝で鳴くのも聞えるのである。ひどく天地が悠久な氣がされるのである。

「一つ踊ろかネ？」その時ふと足下の老婆の聲が聞えたのである。私は私の耳を疑つた。が、確かにそんな風に云つたと聞えたのである。

「ああ。」他の老婆がはつきりと皺枯れた聲で答へたのである。

私は驚いて、下の道に目を凝らすと、いつの間にか脊中の匡を外して身輕になつた二人の老婆が、道のまん中に現れて、

「わしア、へえ、聲が出ねえから、お前さん歌つておくれやれ、」とその一人が云つたかと思ふと、他の一人が返事の代りに、

「エー引エ、せくなせきやアるな、浮世は車、めぐる日なみの、ソラ、めぐる日なみの約束に……と忽ち唄が始まつて、二人の老婆がしやあしやあとして、極めて簡單な、足を二歩ばかり交る交る前に出したり、手を一二度叩いたり、兩手をぶらりと脇に垂れたり、それで終り、――と云ふ程の簡單な踊ををどつたのである。「めぐる日なみの、ソラ、」と云ふところでは、うたはぬ

方の老婆も合唱するのである。さうして最後に、『そら來い、あばよ、又來なよ、』と云ふところでも、又うたはぬ方の老婆も合唱するのである。これは、私が以前この町で藝妓を呼んだ時分にしばしば見たところの、この邊の土俗の唄と踊なのである。さて一さし終ると、踊の手振りの終らぬうちに、「もう一つやろか、」とうたつてゐた聲が云ふのである。さうして、

「エー引エ、はなればなアれの、あの雲見れば、明日のわかれが、ソラ、明日のわかれが思はるる、ソラ來い、アバヨ、又來なよ。……」

とつづけて二人の老婆は先きと同じ踊の唄をくり返した。

さうして、私が、呆氣に取られて、實際、心から感動して眺め入つてゐるうちに、踊は濟んでしまつた。と、道の上の老婆は、又かたはらの、私の所から見えない所に入つてしまつて、暫くがさがさやつてゐたかと思ふと、前の通りの、背中に何か匡のやうなものを背負つた恰好になつて、その間始終無言で、さつさと何事もなかつたやうに、山への道を歩き出したのである。これは嘘の話ではないのである。

彼女等の姿が左の道の山の蔭に隱れた時、私は初めてにツと口元をゆがめた。私は頗に不思議な微笑みを感じたのである。が、それと一緒に、次ぎの瞬間に、私の目の中が急に生溫くなつて、

ぼーッと眼前の足の下の町の景色が濡れて見えるのを感じた。私は目に不思議な涙を感じたのである。その時、何處かの笛が、時間を知らすのであらう。ボオと鳴り渡つたのである。で、私は急いで私の宿屋への裏道を辿つたのである。

宿に歸つてからも、私は頻りにあの山道の二人の老婆のことを思ひ出した。思ひ出すと、にッと微笑まれて、次ぎの瞬間に、反對に目に涙のやうなものを感じた。さて、朝飯を食つて、机にもたれて、障子の硝子越しに、山を見た時、私は、今夜この町を去るのだ、今度又いつ來られるだらうか、と思つてセンティメンタルになつた。今まで、いつ來た時でも、私は彼女——ゆめ子に會はなかつたことはなかつた。だが、今度を初めとして、これからは幾度來ても、やつぱりこんな風に、机にもたれて、煙草をすつて、山を眺めて、夜だけ町をそッと歩いて、それだけで、いつも彼女に會はずに歸らねばならぬだらうと思つた。ふと又、私の可哀さうな、この町で威張つて藝妓をしでゐた時よりも決して心の嬉しくなつてゐない、どうぞあの町の話をして下さいますな、唄や三味線を私は忘れたいと思つて居ります、私はもう大方忘れました、と云つて、料理の本などを一所懸命に見てゐる、私の女房のことを考へた。——

だが、いつか、直ぐ私達もみんな爺さん婆さんになるであらう、さうして、若しゆめ子と私の女房と又私とても、どんなことがあつて同じ土地に住むやうなことがあるまいものでもない、さうしたら、みんな、柴刈りに行け、その時は、今朝の婆さんたちのやうに、仲よく踊りなさい、踊りなさい、と私は思つたのである。

私はその晩その町を立つた。さうして、家に歸つて、「やつと原稿を書いたよ、もう少しゆつくり遊んで來ようと思つたが、急に歸りたくなつたので、……」と、鹿爪らしい浮世の夫の顏をして、私は女房に云つたものである。

海戰奇譚

明治三十八年五月二十七日の午前五時頃、聯合艦隊第一戰隊の殿艦、日進の甲板で當直勤務をしてゐた寺内少尉は、當直將校から一通の無線電報を示され、それを艦長に傳へる事を命じられた。「テキカンミュ」といふ電文だつた。久しく實戰から遠ざかつてゐたのと、待ちに待つた時が來たのとで、彼は、氣が宙を飛ぶ思ひで、艦長室へ駈けつけた。

彼は夢中で扉をノツクした。幾らノツクしても答がないので、彼は拳固で叩きつづけた。それでも返答がないので、彼は牴牾しくなり、扉を押し明けて、

「閣下、閣下、テキカンミュとの電信であります！」と精一ぱいの聲で叫んだ。が、彼は張合ひ抜けがした、艦長が幼な兒のやうにすやすや眠つてゐたからだ。そこで、彼がもう一度同じ言葉をくり返すと、艦長は今度は薄目を明いて彼の方をちらと見た。が、又直ぐ眠りつづけてしまつたらしいので、彼は、自分の聲が艦長に聞えなかつたのかと思つて、もう一層大きな聲で同じ言葉を繰返した。と、艦長は、今度は目を閉ぢたまま低い聲で、

「さうか、」と云つた切り、また寢入つてしまつた。而も今度は前よりも深く眠り入つたらしく思はれたので、生附き惡氣戲で疳癪持の少尉が、前より一層大きな聲を張上げて、同じ報告をくり